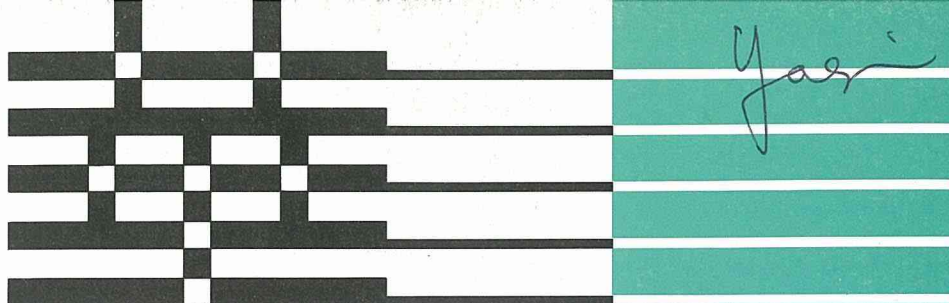


論文 / 著書情報  
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT society of architectural design education
巻号 / vol.	No. 8
発行日 / Pub. date	1994,
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。



# Ka

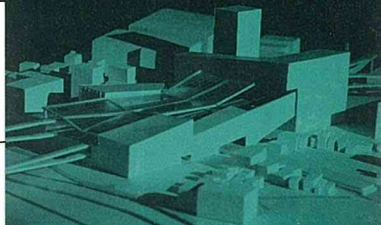
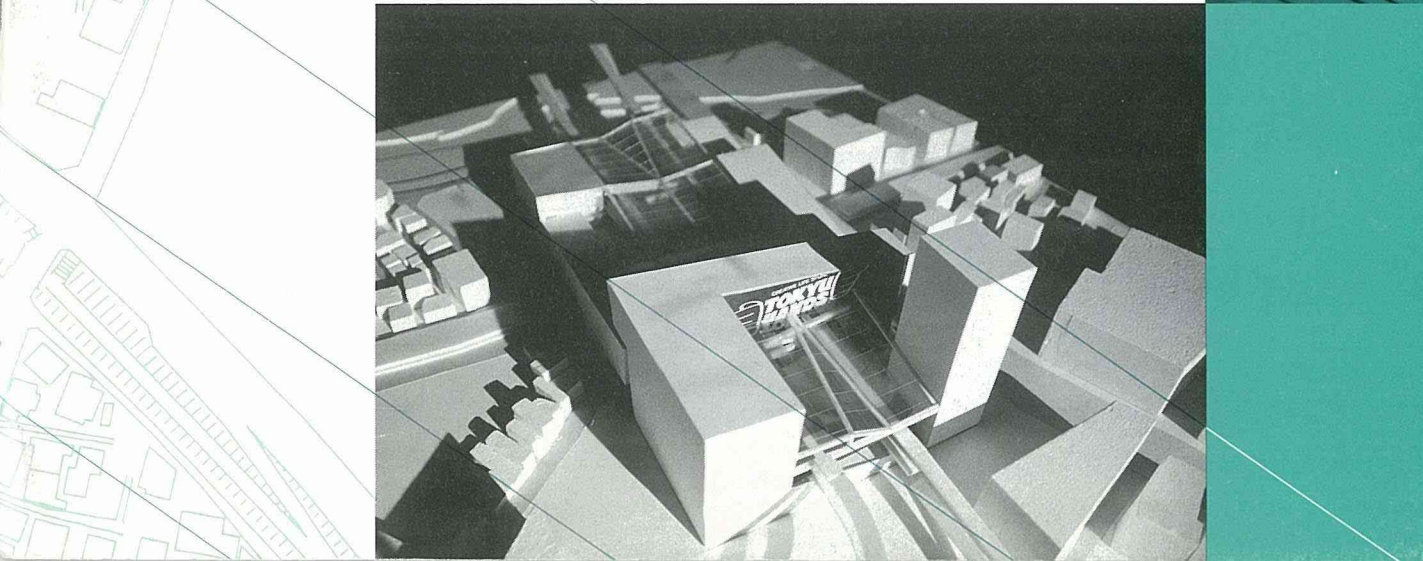
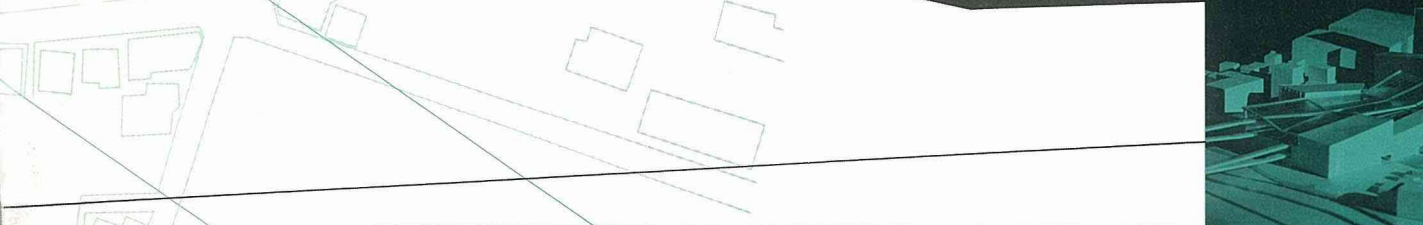
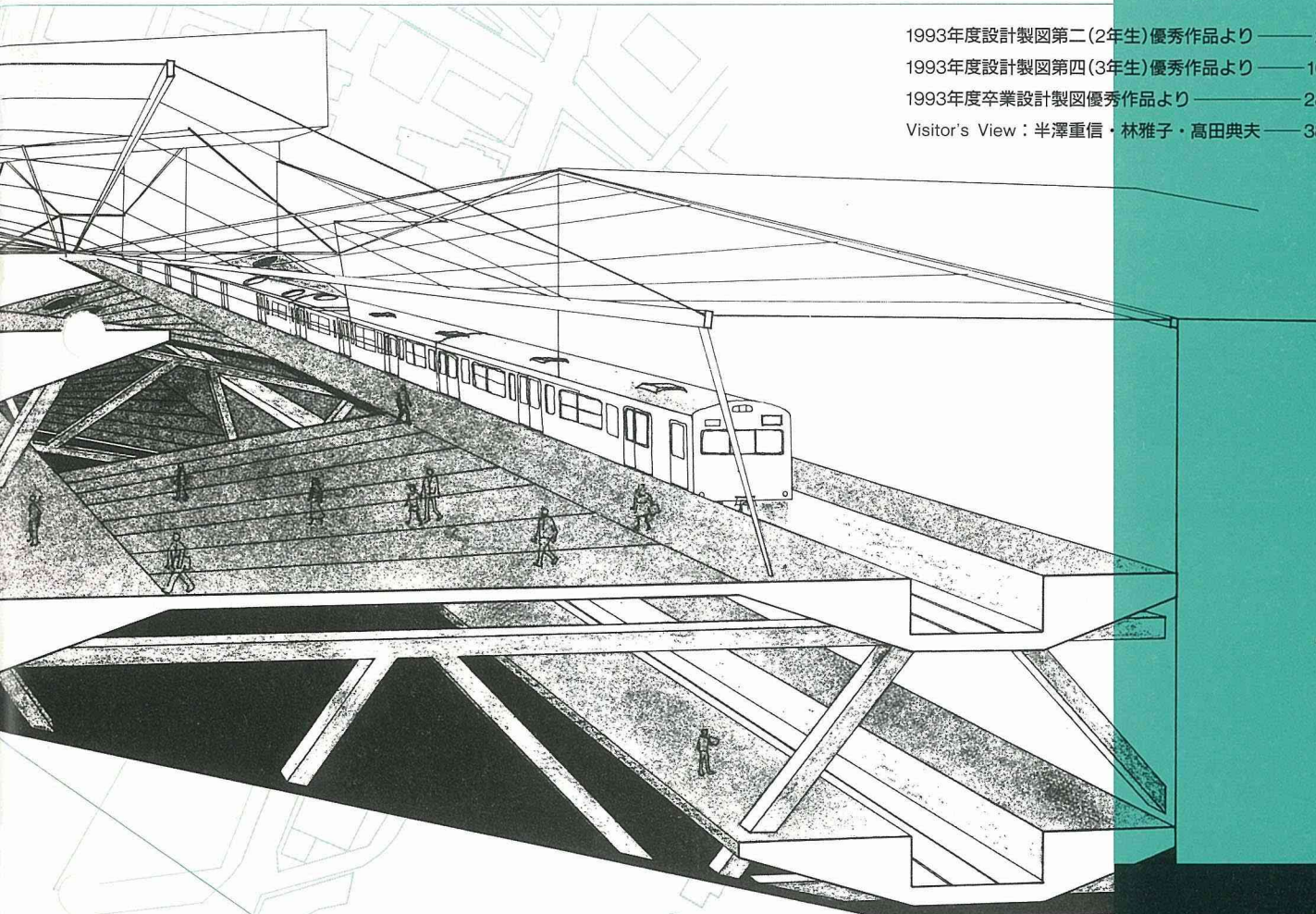
No.8 1994

1993年度設計製図第二(2年生)優秀作品より——2

1993年度設計製図第四(3年生)優秀作品より——10

1993年度卒業設計製図優秀作品より——28

Visitor's View: 半澤重信・林雅子・高田典夫——38



# 1993年度設計製図第二(2年生)優秀作品より

This year's outstanding 2nd-year studio work: Winter Semester

## 低層集合住宅

Low-rise Housing Development

### 講評

助教授 八木幸二

代官山の同潤会アパートの敷地を使つての低層集合住宅計画は、都心のあまりにも高価な敷地に低層という矛盾をはらんでいるが、「単なる住宅の提案ではなく、その中でどんな社会、どんな生活の姿をつくるのか」というのが課題の主旨である。

全体としていえることは距離感の不足で、身の回りの個人的スケールから家族相互・住居相互の心理的な距離、都市の一部としての社会的な位置関係などを、常日頃から寸法・距離として捉える努力が必要である。

柳博通君の「細胞」は、5mグリッドの組み合わせという単純な架構を複雑に組み合わせることによって、さまざまな住居タイプを可能とし、相互の間隙であるオープンスペースも視覚的に変化のあるものとなっている点が評価できる。内部の曲線も、稚拙な点もあるが視覚的に不思議な広がりをだす可能性を秘めている。

似たようなグリッドプランである菅菜々子君の「階段路地……」は、3.5m角という設定が居間の部分で無理な気がする。外部空間を個々の住宅の前庭と、公共の路地とに分けている点は評価できるが、全体的に似たような路地空間になっているのをもう少しメリハリをつけると使い勝手にも変化がでるであろう。

安森亮雄君と佐々木省悟君のは樹木と水を考慮している点が評価できる。自然環境を大切にするというのは、言うは易く行い難しで、特に再開発となると、既存の樹木の種類・位置・高さなどが、住戸の設計や配置にも影響をおよぼすはずである。水による演出は、ライトの落水荘のように自然の水流の方がやはり素晴らしい。

この他にも、堅実ではないかもしれないが、ある意味ではもっと素晴らしい作品が何点もあった。こういうところにはバランス感覚の良い作品が残るが、われこそはという個性派も、めげずにがんばってほしい。



- 第一課題：志水英樹教授、八木幸二助教授
- 期間：10/5~11/16
- 課題主旨：関東大震災の復興事業として建てられた同潤会アパートは、日本の集合住宅の先駆的な存在である。現在さまざまな障害はあるにせよ、住みこなされたその表情は豊かであり、また集合住宅の将来を考えるうえで生きた教材でもある。課題は、この敷地に現代の集合住宅を提案するものである。
- 想定敷地：東京都渋谷区代官山町同潤会集合住宅地、南斜面の街路で囲まれた一部とする。現在12棟の連立住宅(48世帯)が建ち並び、各戸は8/3、8/4.5/3、4/4.5帖の2間~3間で非常に小さいが、敷

- 地にはさまざまな樹木が生い茂り、区の保存樹林に指定されているものも多い。面積は3385.75㎡。
- 設計条件：計画戸数15戸以上、1戸の延床面積は120㎡以内、階数は2~3階で地階は認めない、居住者は、4人家族を基準として考える。駐車場を各戸に1台分確保、その他共同施設等は各自提案。
- 法規制：第二種住居専用地域(60/300)準防火地域/第三種高度地域
- 授業内容：現地見学/敷地模型各自製作/ポリウムスタディ/エスキスチェック/講評会

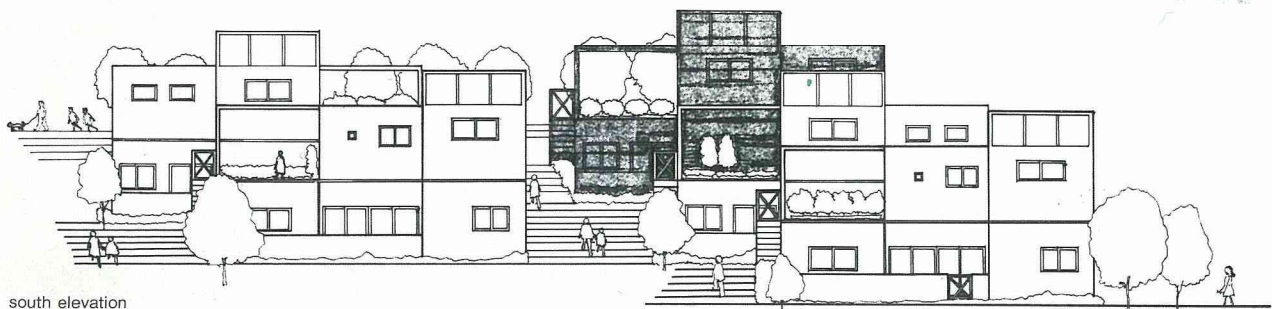
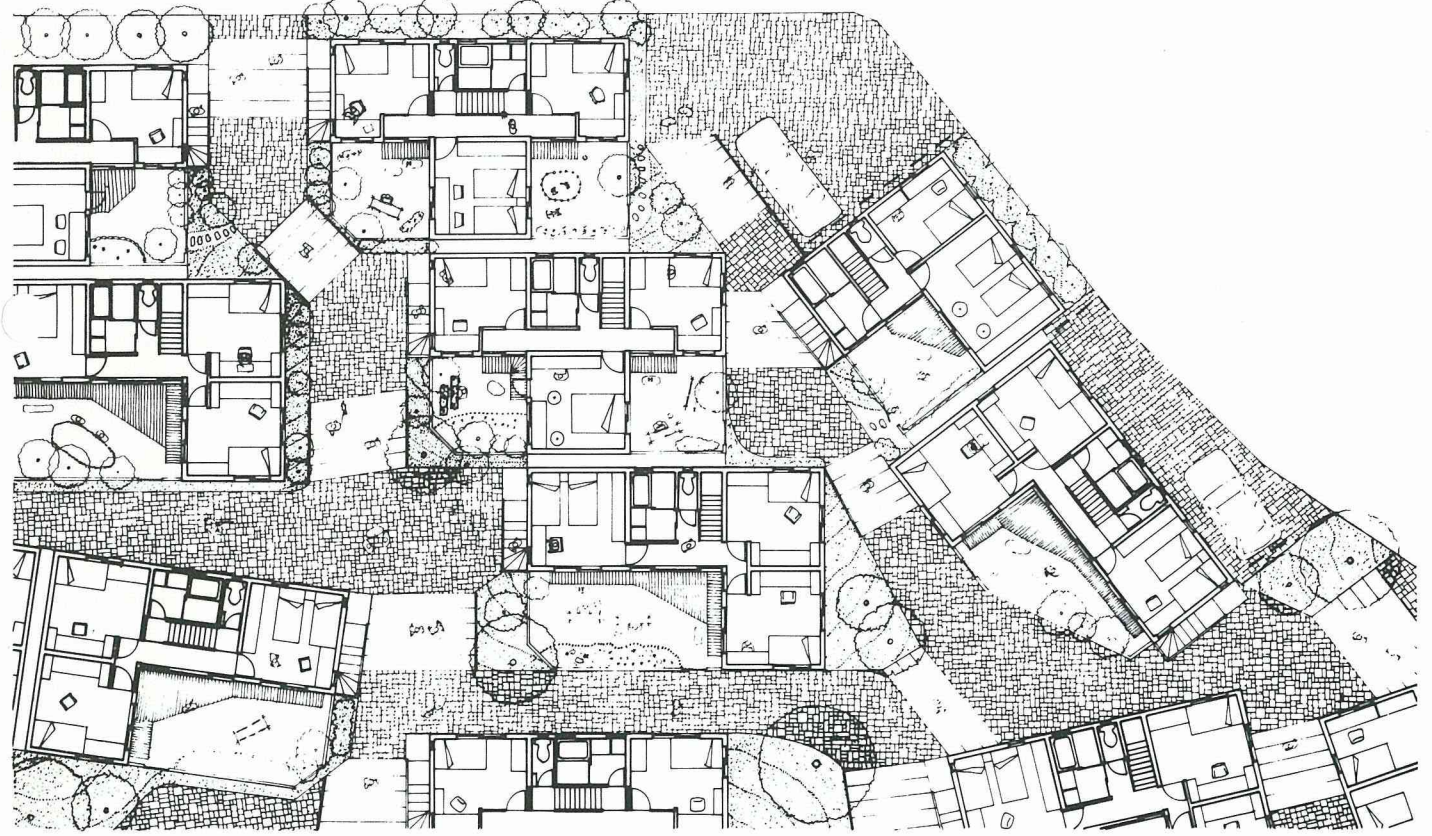
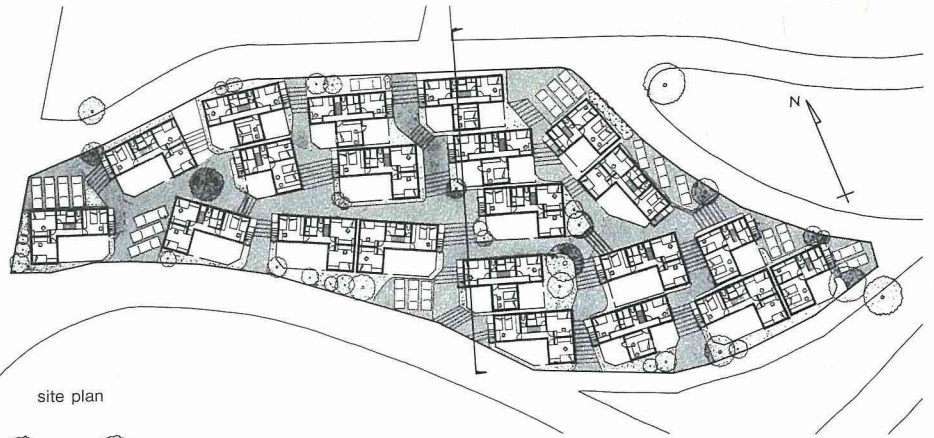


# 階段路地が結ぶ家々

Housing Linked by Steps

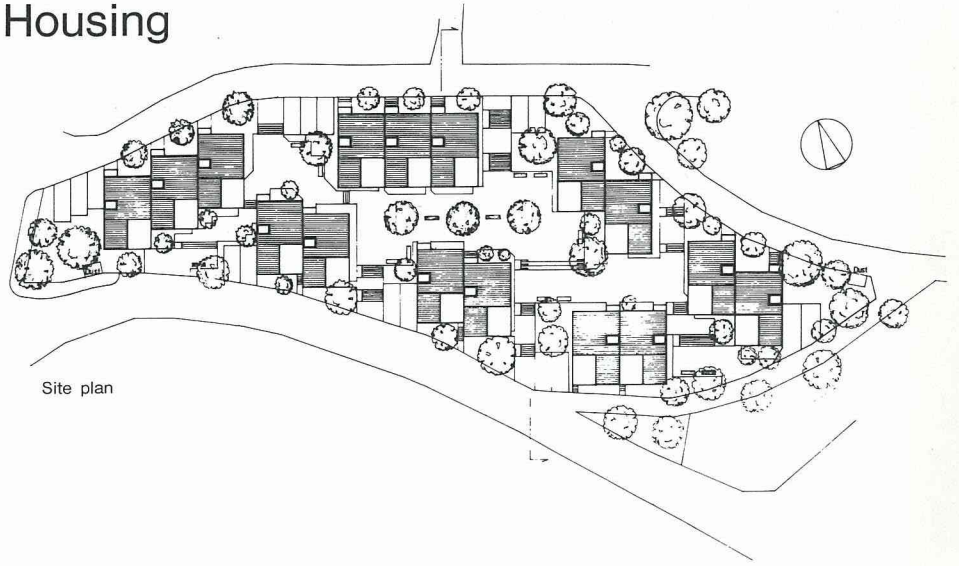
菅 菜々子

Nanako Suge

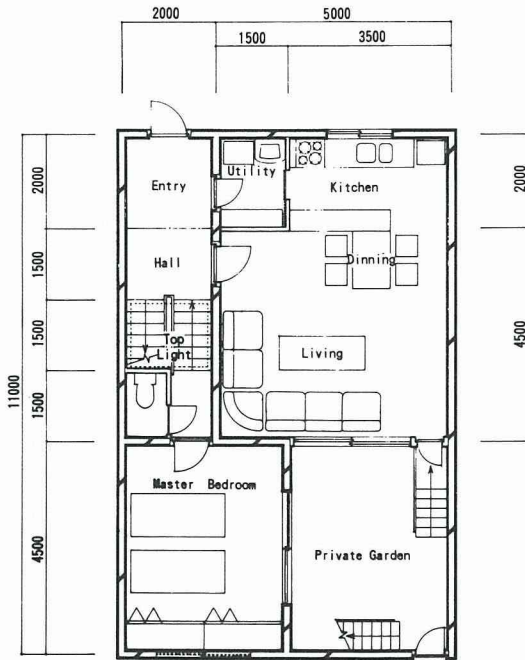


# Daikanyama Low-rise Housing

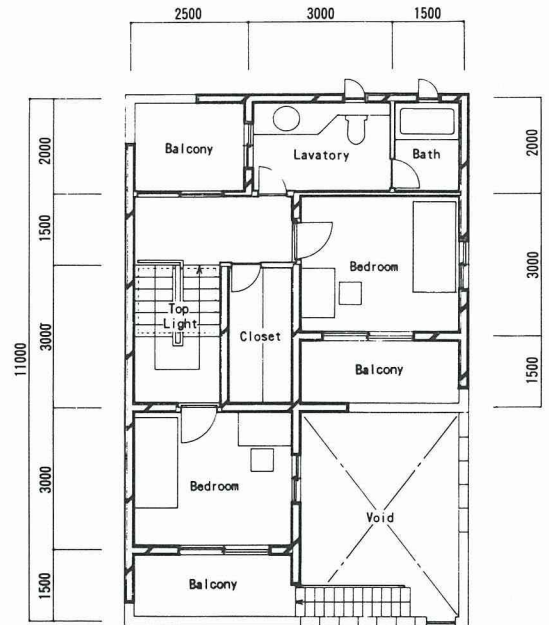
安森亮雄  
Akio Yasumori



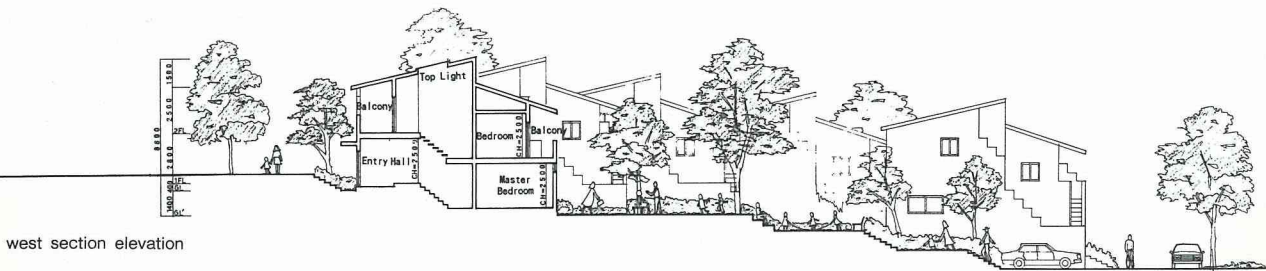
Site plan



1st floor



2nd floor



west section elevation



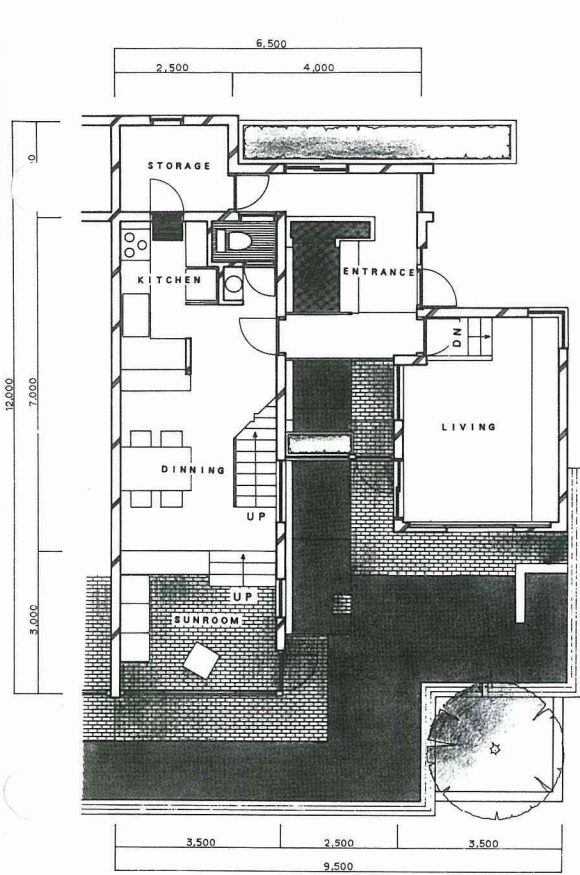
south elevation

# Daikanyama Flachbau

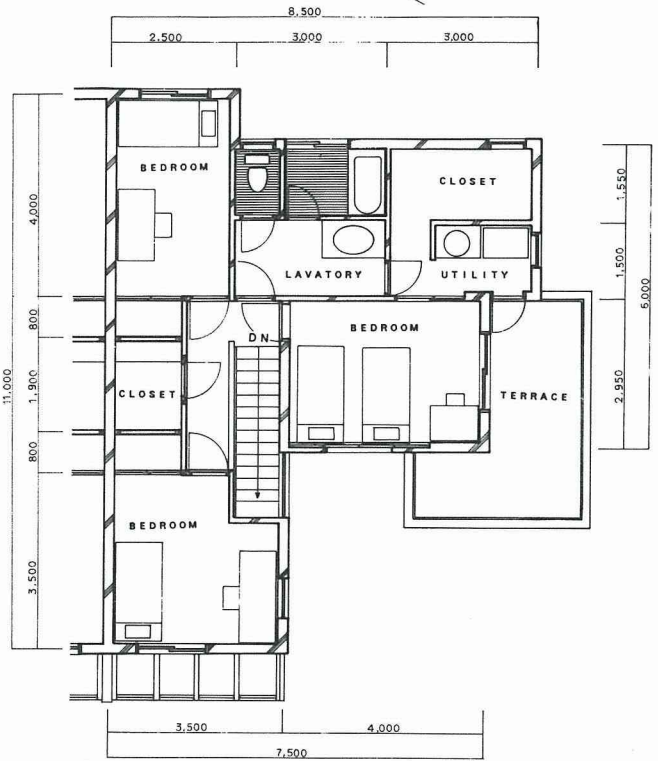
佐々木省悟  
Shogo Sasaki



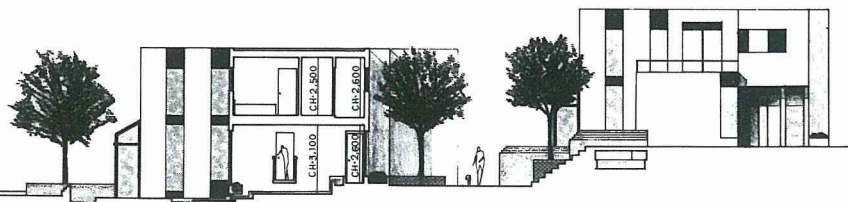
site plan



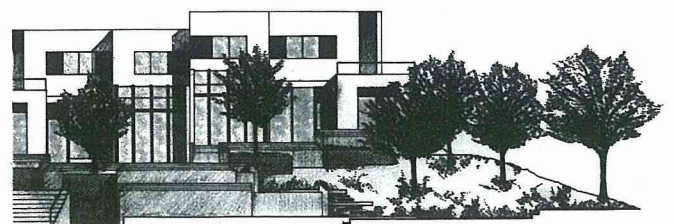
1st floor



2nd floor



Y-Y' section elevation

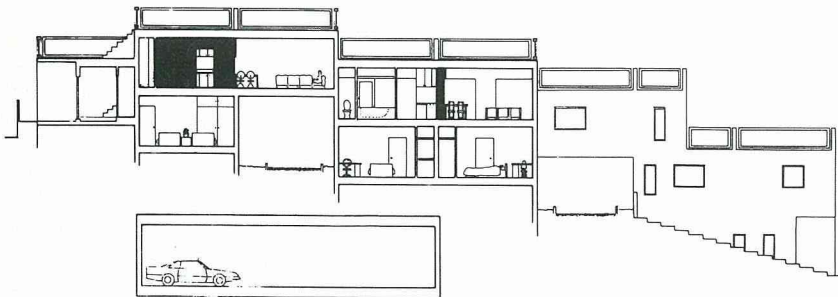
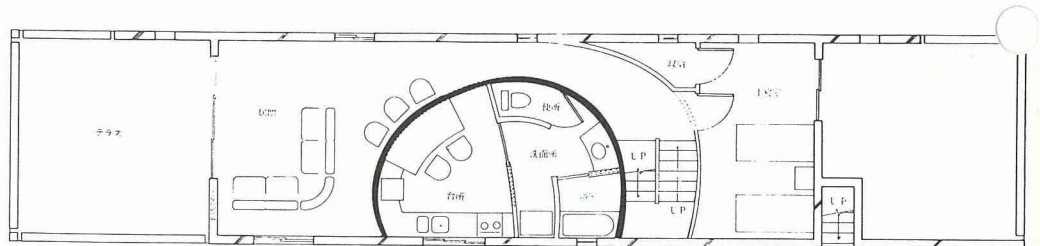


X-X' elevation

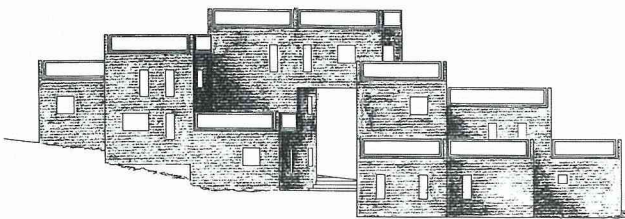
# 細胞

Cell

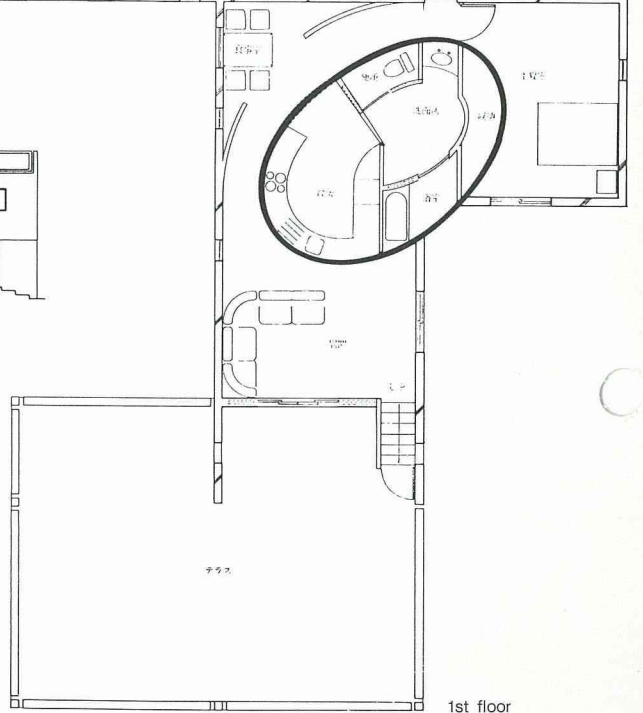
柳 博通  
Hiromichi Yanagi



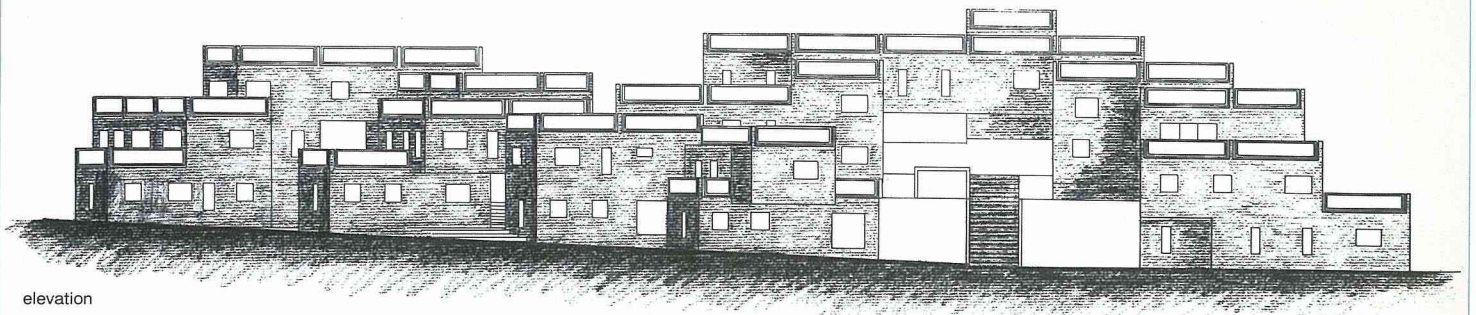
section



elevation



1st floor



elevation

# 1993年度設計製図第二(2年生)優秀作品より

This year's outstanding 2nd-year studio work: Winter Semester

## 大学会館 Student Hall

### 講評

教授 志水英樹

「大学会館」の課題は、東工大大岡山キャンパスの現生協第一食堂・新食堂の建物が建っている敷地に、新しく学生生活の拠点となるような大学会館を計画するものである。

2年生の課題として、周囲の状況との関係、画条件などを考えやすいように身近な機能と敷地を設定した。敷地は傾斜地であり、水力実験棟や体育館、北側の公道、南側の学内道路で囲まれている。考慮すべき条件は多いが学生の日常生活との関連が深く、2年後期の第2課題としては適当であろう。大学会館に含めるべき機能としては、食堂・売店は必須としたがそれ以外は各自が自由に設定することとした。

最初の時間に、現地見学およびグループ作業による大学会館が備えるべき機能と規模などの検討を行った。設計に際し留意すべき点として、水力実験棟や体育館などの周囲との関係を考慮すること、いくつかの異なった施設の複合となるため利用時間帯や管理区分、などなどを明確にすること、建物の内部空間と外部空間の関係について考慮すること、食堂の厨房などへのサービス動線や出入口を適切に設けること、などを課題説明時やエスキスチェックにおいて指摘した。

多種の機能を複合させながら建物形態を操作する作業に、特に食堂とサークル室という空間の大きさが異なる諸室の構成に苦心している学生が多かった。そのため、外部空間や半外部空間を内部空間とのつながりを考慮しながら適切に計画されている案は少なかった。

増山絵里奈君の作品は、傾斜地をうまく利用し、レストラン・サークル室・売店などを地下に納め、地上部分を公園化している計画である。構成力のない学生では破綻しがちな円、曲線を多用しているが、うまくまとめており魅力的な空間の創出に成功している。特に講堂付近から地下道となり、レストラン・サークル室へ導かれるアプローチの空間は期



●第三課題：志水英樹教授、藍沢宏教授、宮本文人助教授

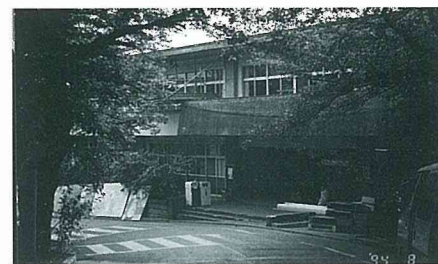
●期間：11/25～1/27

●課題主旨：現在の第一食堂を取り壊し、新しく学生生活の拠点となりうるような大学会館を計画する。大学会館は学生を中心とした全大学人の話し合いの場であり、また課外活動の場であるので常に学生に開放されていなければならない。また、大学会館はどういうものでありたいかを考えること。そのためプログラムづくりから始める。何を入れるのも自由であるが、それらをどう維持し、継続していくかを考えること。

●想定敷地：東京工業大学大岡山キャンパス内第一食堂および周辺敷地規模は制限なし

●設計条件：施設規模約3500㎡、鉄筋コンクリート構造を主とする。食堂600人、売店、ラウンジ、機械室、その他各自のプログラムに合わせて自由。

●授業内容：現地見学/グループ作業/プログラムチェック/敷地模型製作/エスキスチェック



待させるものがある。計画面では、厨房の大きさ・位置、サークル室の中途半端な数と大きさ、活動場所の狭さなどにやや問題がみられる。また、独特の色彩表現が建物形態とマッチして、空間への期待感を高めているが、配置図・立面図の用紙だけ表現が異なるのが惜まれる。

吉田昌矢君の作品は、直方体や円弧・角柱というプリミティブな形態をダイナミックに構成させた計画である。最上階のスカイラウンジは長さ約100mのガラス上の角柱がやや軸をずらして4階部分に置かれた形態であり、かなり大胆であるが力強さが感じられる。全

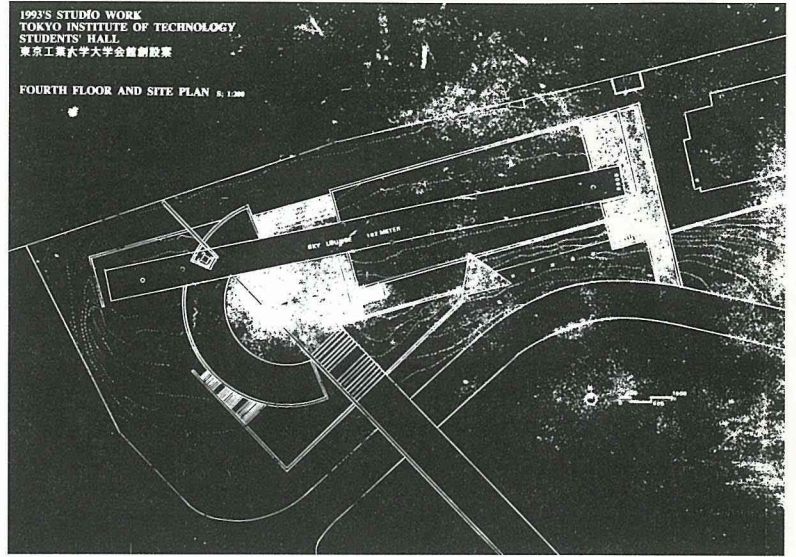
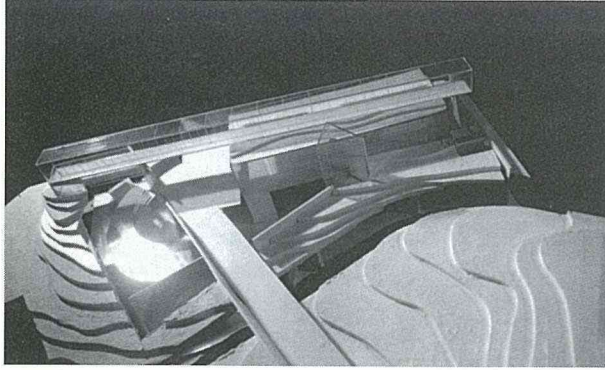
体的には、かなり荒削りであるが、魅力的な空間構成である。しかし、時間不足のためであろうが、機能的には未完成な部分もかなりみられるし、室名の未記入や線のきたなさなど図面表現も不十分である。また、本館方面からの導入路となるブリッジがスロープの中央付近からはじまっているが、大岡山キャンパスの学生生活におけるスロープの役割についてはどう考えているのであろうか。

他にも、部分的にはおもしろい案もいくつかあったが、思考時間と作業時間の配分のまずさなどのため全体をまとめるまでにいたっていなかった。

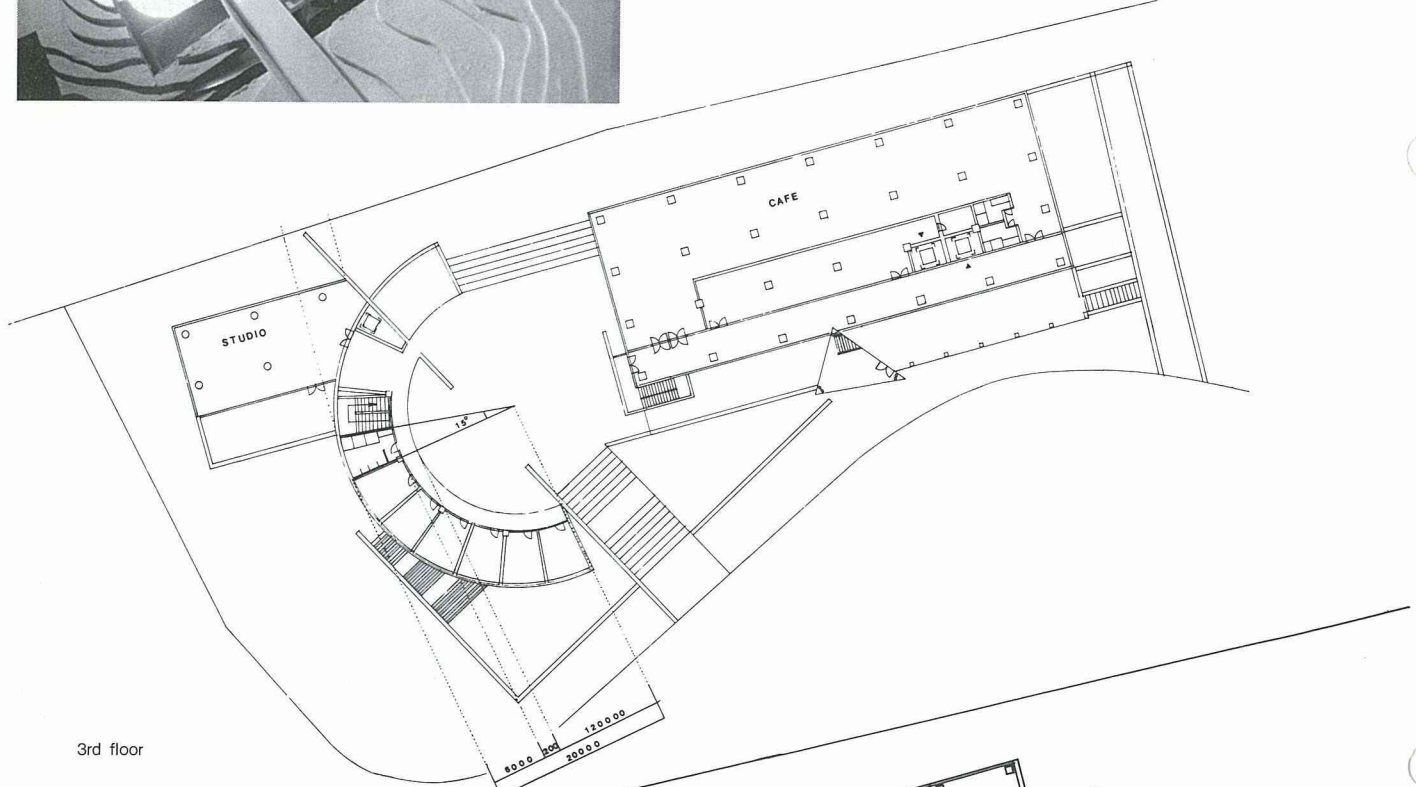
# 東京工業大学学生会館創設案

TIT Student Hall Project

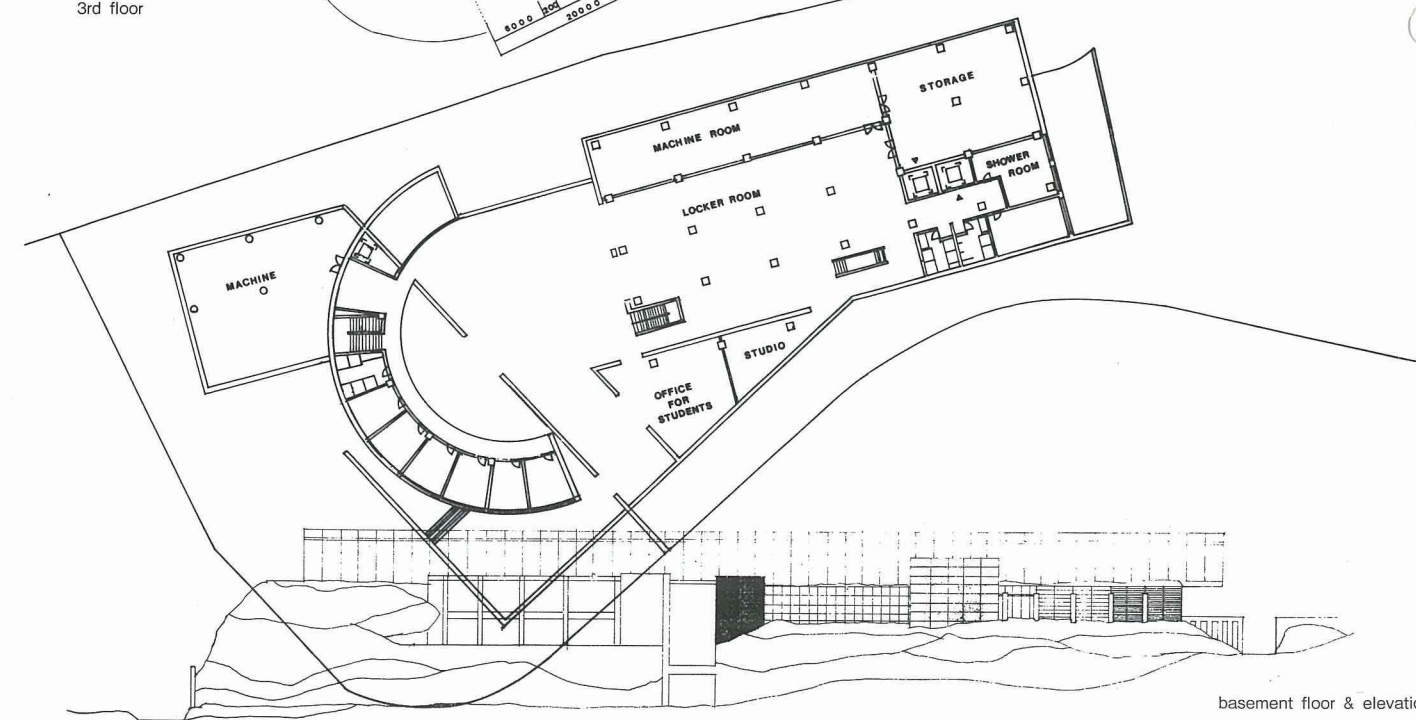
吉田昌矢  
Masaya Yoshida



4th floor & site plan



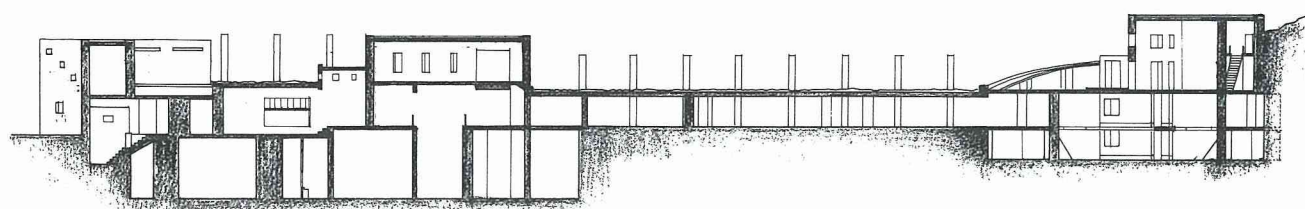
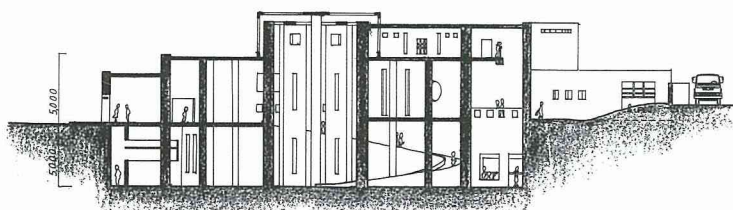
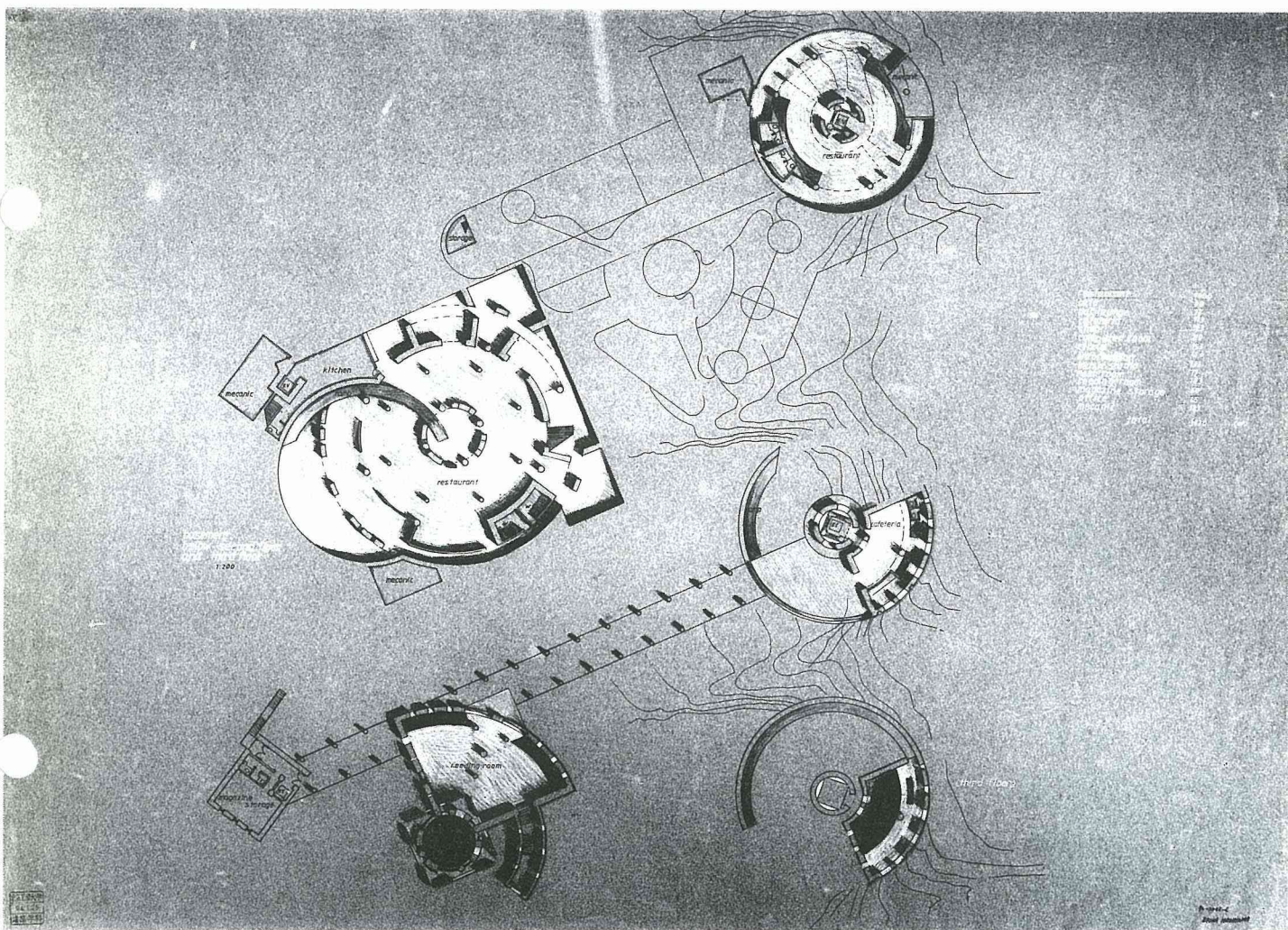
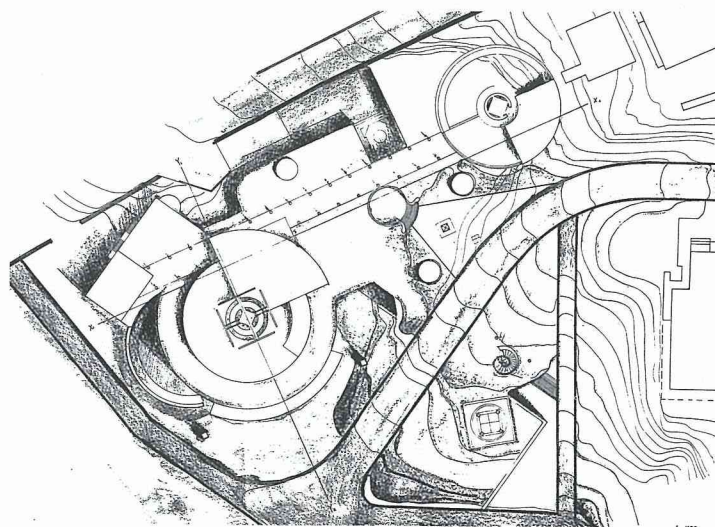
3rd floor



basement floor & elevation

# The Interval

増山絵里奈  
Erina Mashiyama



# 1993年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

This year's outstanding 3rd-year studio work: Winter Semester

## 複合都市住宅施設

Urban Complex Housing

### 講評

非常勤講師 東 孝光

都市の建築は、建築主や設計者の意図、また敷地がもつ法的制約だけで決まるものではない。その敷地や周辺環境に蓄積された歴史的、地理的条件からくる有形無形の影響をも積極的に捉え、また近隣ビルの都市空間とのかわりにも参加しながら、それら結び付けてどのような新しい創造的関係が構想できるかが問われるのである。

この課題は、そのような背景のもとに、東京中心部、神宮外苑周辺の幹線道路沿いの指定敷地に、都市住居を含む複合型建築を設計し、周辺環境との積極的な関連づけを含めたデザインを求めるものであった。

学生たちは、敷地の観察や資料の調査などによって、敷地に接続する2階レベルの歩道橋が、実は江戸から明治、大正にわたって存在した丘陵地のレベルであることを学習し、幹線道路が切り通しの道路として新しくつけられたものであることを意識するようになった。そこから、敷地背後の古い住宅地への構え、隣地のコンクリートの強い構成の建築への評価と関連づけや、車の交通量の激しい全面道路から内部の商業エリアにどうつなげるか等の課題をみだしていったようである。

東 孝光  
Takamitsu Azuma



1933年 大阪府生まれ  
1957年 大阪大学工学部構築工学科卒業  
郵政省大臣官房建築部入省・郵政技官  
1960年 坂倉準三建築研究所入所  
1967年 東孝光建築研究室開設  
1968年 東孝光建築研究所設立、代表取締役  
1985年 同上退職、大阪大学工学部環境工学科教授  
主な作品：塔の家、Kフラット  
主な著書：『都市住居の空間構成』鹿島出版会、『塔の家白書（共著）』住まいの図書館出版局

#### ●課題主旨

東京中心部の指定された敷地に、住居を含む複合型建築を設計し、周辺環境と積極的に関連づけてデザインする。

#### ●課題の背景

都心の渋谷区神宮前3丁目の外苑西通り一帯は、青山通りと千駄ヶ谷、新宿大木戸を結ぶ幹線道路であるが、緩いカーブと道路傾斜をもつ地形、1960年代の東京オリンピック直前の整備で拡張されたために、敷地の大小や不整形の敷地ばかりが残されており、その影響でさまざまな建築形態がみられる地域である。

特に新日本建築家協会のある神宮前2丁目の陸橋を挟む4つの敷地は、進廉設計の建築家会館、竹山聖設計のTERRAZZAなどの、いろいろな世代の建築家の設計した建築が、ひとつの橋を挟んで接している。この敷地の一画を再構成し、住居・商業の複合建築を設計することで、橋を含めた周辺環境の全体を、新しい特徴のある都市空間のスポットにまとめることを課題とする。

#### ●設計課題

指定の敷地に、定められた制限内で商業施設・オフィス・ギャラリーなどを各自で具体的に設定し、一部に都市型賃貸住居を複数戸含めて複合建築にまとめて設計すること。また歩道橋を含めて公共の道路、階段を再整備し、場所の意味の創出をデザインすること。

#### ●敷地条件

敷地面積：約898㎡  
建築面積：718㎡以内  
延べ床面積：5388㎡以内  
建ぺい率：80%  
容積率：600%  
路線商業地域/準防火地域

#### ●設計条件

- ・階数・高さなどは自由に設定してよい。ただし、道路斜線は法規による
- ・日影規制は考慮しなくてよい
- ・地階に駐車場15台程度、地上からの出入りをする
- ・1〜3階に都市的な商業施設を計画する
- ・最上階に住居を複数階設定する。規模・戸数・家族構成は自由に設定する
- ・敷地周辺の公共空間および歩道橋は必ずデザインすること

#### ●要求図面

- ・配置図：1/200以上 屋根伏を原則とし、周辺状況を詳細に表現すること
- ・平面図：1/200以上 各階・室名・家具等記入
- ・立面図：1/200以上 3面以上、陰影をつける
- ・断面図：1/200以上 2面以上
- ・外観の表現：彩色透視図、アクソメ、模型写真、エスキス模型等、自由
- ・内部透視図：2カ所以上、彩色自由

全般によく敷地と周辺の歴史的、都市環境的な文脈を読み取り、上層部の住居群と下層群と公共および商業スペースの複合化に取り組んだ案が提出されたが、学年からいって、まだ十分に建築や都市空間のデザイン手法の細部に習熟している段階に達していないからか、まとまりある表現を意識すると内部計画が生硬になり、個々のシーンを重要視すると全体が饒舌な表現になってしまう傾向もみられた。特に歩道橋の再デザインや、隣接ビルの外部空間との有機的結合など、要求が多すぎて少し荷が重すぎたかとも感じられたが、参加者はよく頑張って、それぞれのさまざまな都市空間の構成に挑戦していたと評価する。

仲胆君の案は、全体を地上に近い商業エリア、中間のオフィス、ギャラリー、頂部の2層の都市住居エリアに明確に分離してそのつなぎに空中のピロティ空間をはさんだ構成であった。ピロティ部分がやや多くてひ弱な感じを受けるものの、機能的にも視覚的にも明快で整理された分節的表現にまとめている。

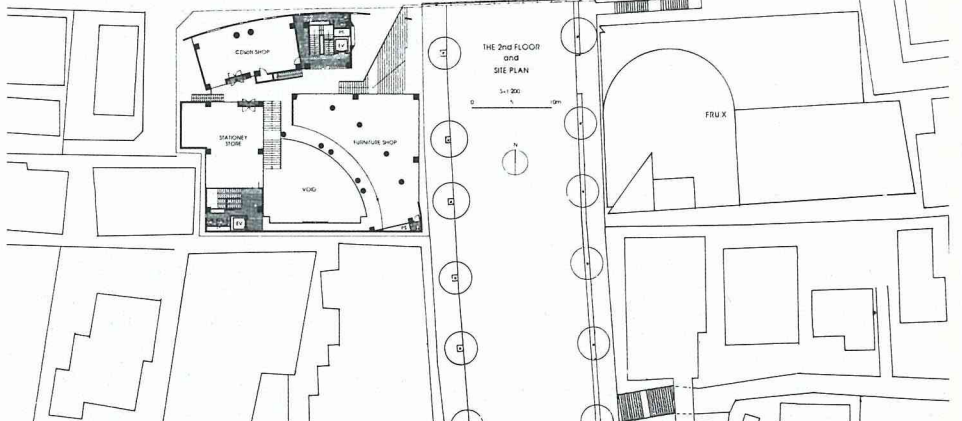
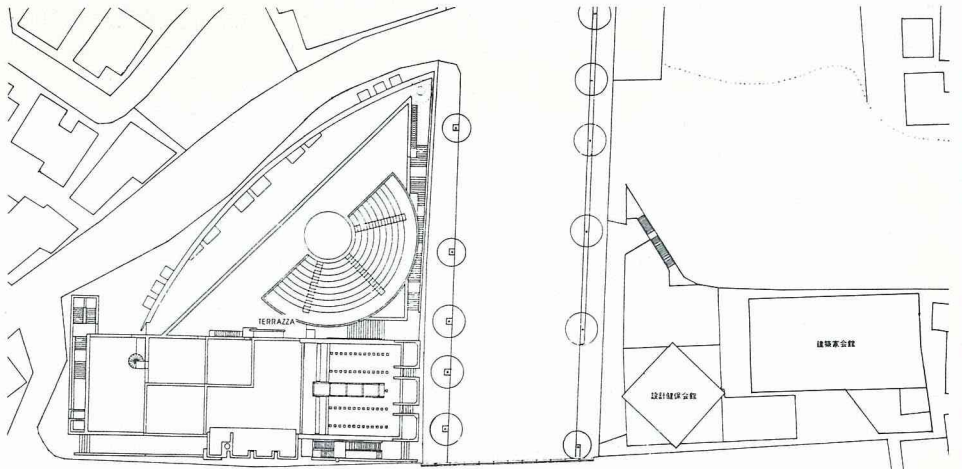
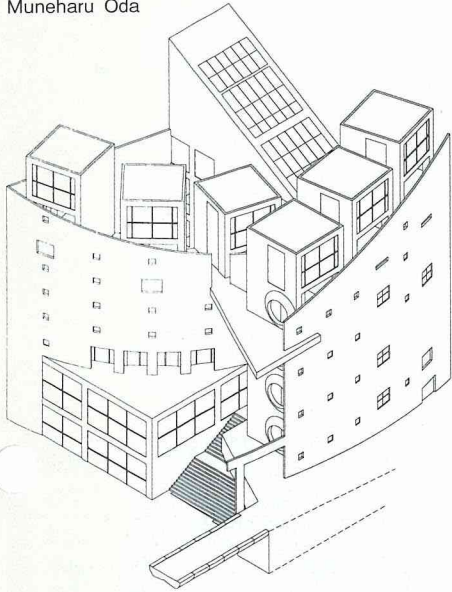
まず近代建築の正攻法のアプローチを学び、その上でもっと複合的な現代性を追えば良い、と私は評価した。

また、小田宗治君の案は、平面で円弧を使った3つのブロックが、吹き抜けの中をトポロジカルに上昇する空間構成を、CADを使ってよく検討し、かつ表現の工夫にも利用した興味深い案になっている。全体に要素を細分化し、それを組み合わせて動きのある外部空間をつくることに挑んでいる。欲を言えばCADを使うなら、もう少し複雑な空間に追い詰めてもよかったか、という感もある。

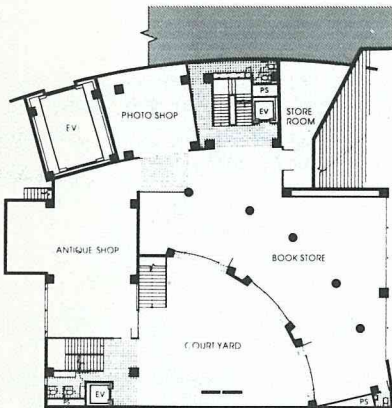
山口祐一郎君の案は、頂部の都市住宅の表現にそれほどウエイトをもたせず細分化し、全体に隙間の多いビル空間の中に、球体の中に計画された小ホール、多層のショップ群をつなぐ吹き抜けの上のガラス張りの円錐、宙を走る空中歩廊など、抽象形態を挿入した現代的な都市空間を狙っている。他にも何案もあったが、挑戦的な空間構成が評価できる作品であったと思う。

# Tectonics

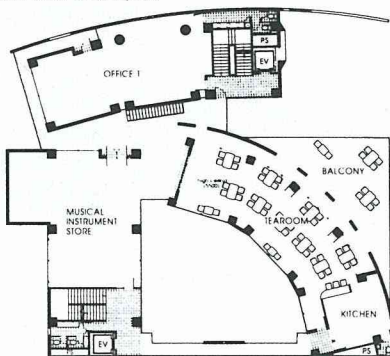
小田宗治  
Muneharu Oda



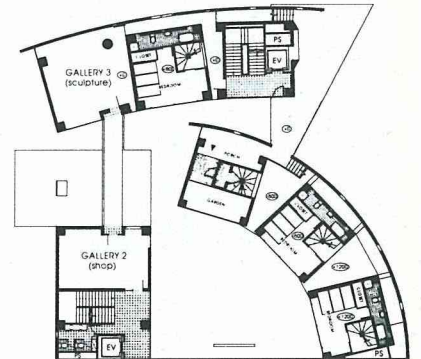
2nd floor & site plan



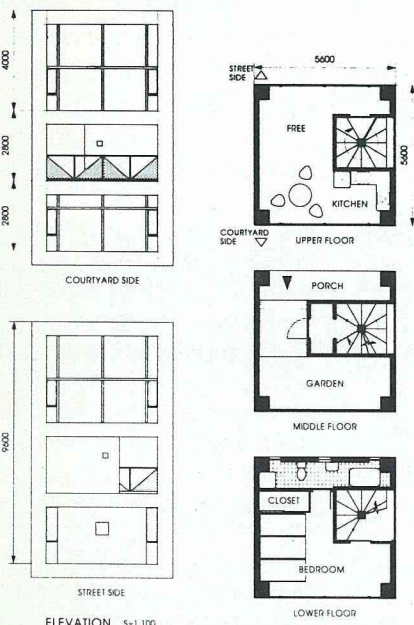
floor



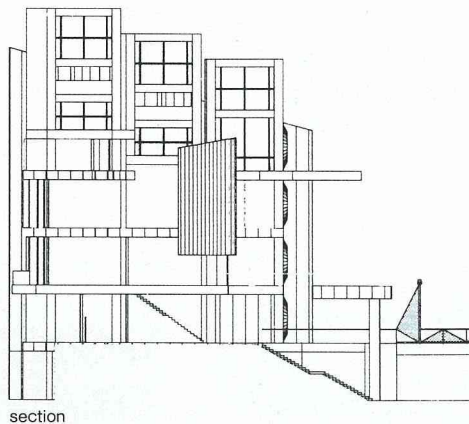
3rd floor



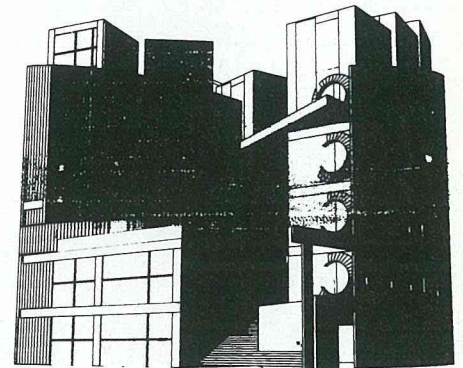
5th floor



House plan



section



tectonics n. 1 (construed as singular) the science or art of assembling, shaping, or ornamenting materials in construction; the constructive arts in general  
2 structural geology  
tectonic adj. 1 of or pertaining to building or construction; constructive; architectural

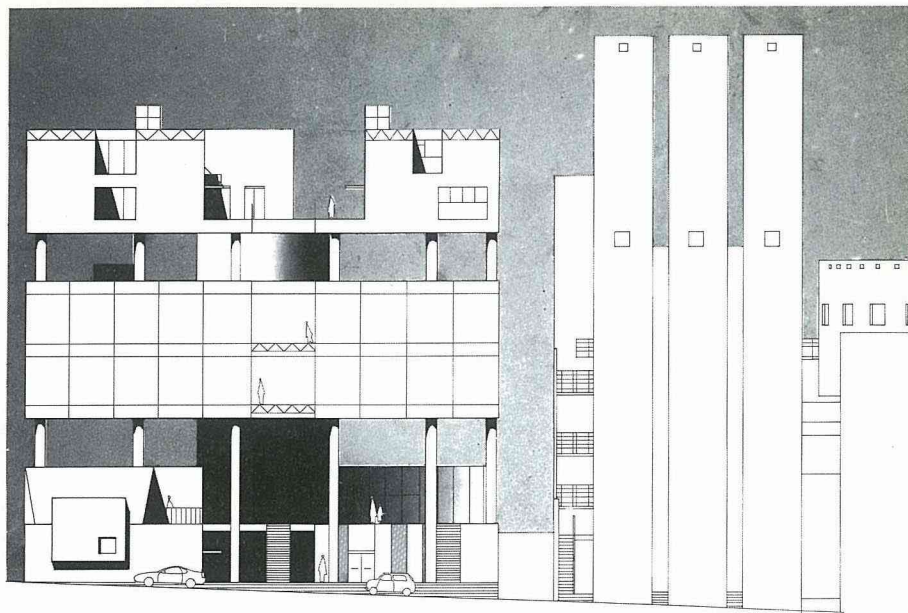
# Aoyama Complex

breezy/breezy

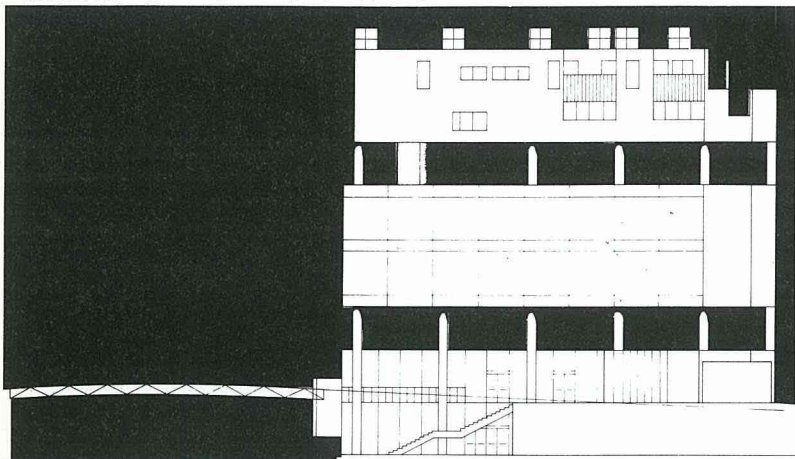
仲胆  
Makoto Naka



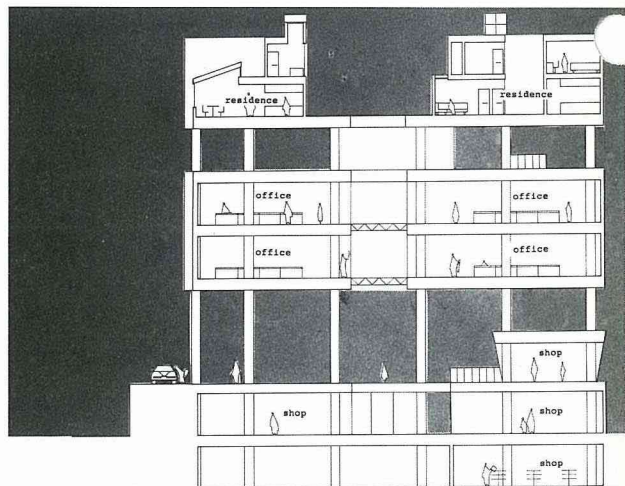
site plan



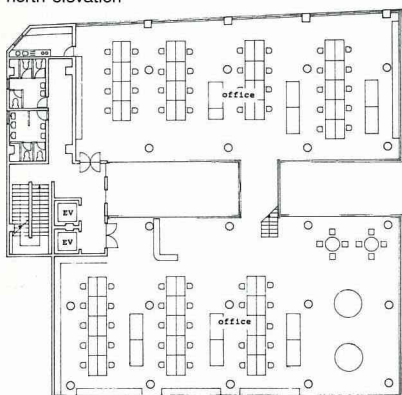
east elevation



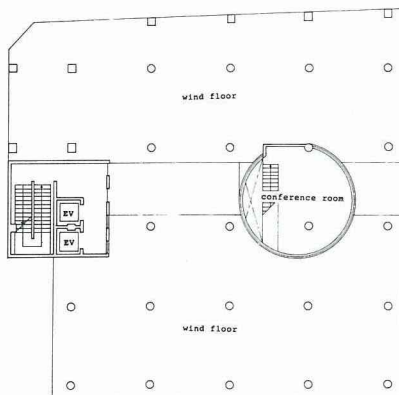
north elevation



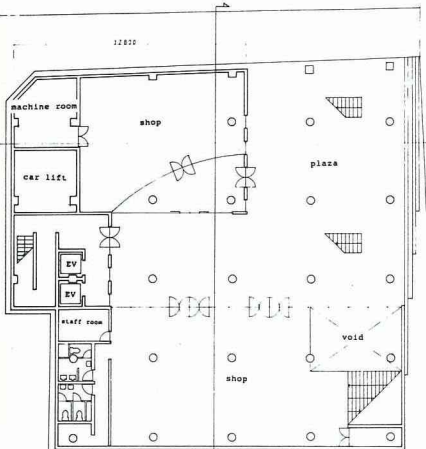
section



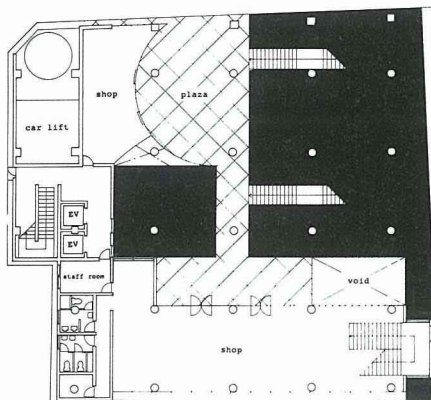
4,5th floor



6th floor



1st floor

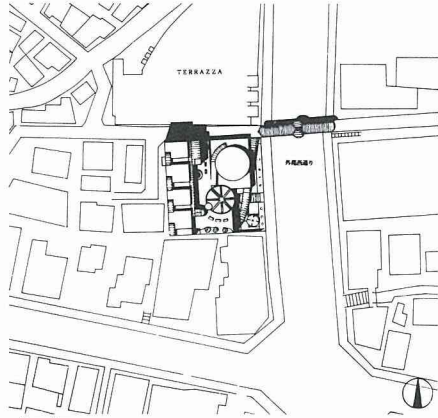


2nd floor

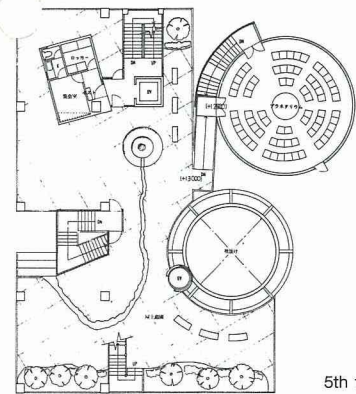
■敷地は、神宮前の外苑西通りにある。この一帯を歩くと、表通りにあるビルによって背後にある住宅と表通りが分断されて圧迫感を感じることがわかる。■そこでこの圧迫感を少しでも軽減し、周辺住民に開放感を与えることを第1の目標とした。この建物には、3階部分と6階部分にWind Floorとよばれる、何も機能のない(6階部分には会議室があるがそれ以外は何もない)、風の吹き抜ける階を設けた。またこの階は、1・2階のShop Floor、4・5階のOffice Floor、7・8階のResidence Floorを機能的に分ける働きをもっている。■また、2階部分につながる橋からの導入がしやすいようにPublic Spaceを設けた。この建物によって通りに開放感が生まれ、この地域が活性化されることを期待する。

# Urban Complex

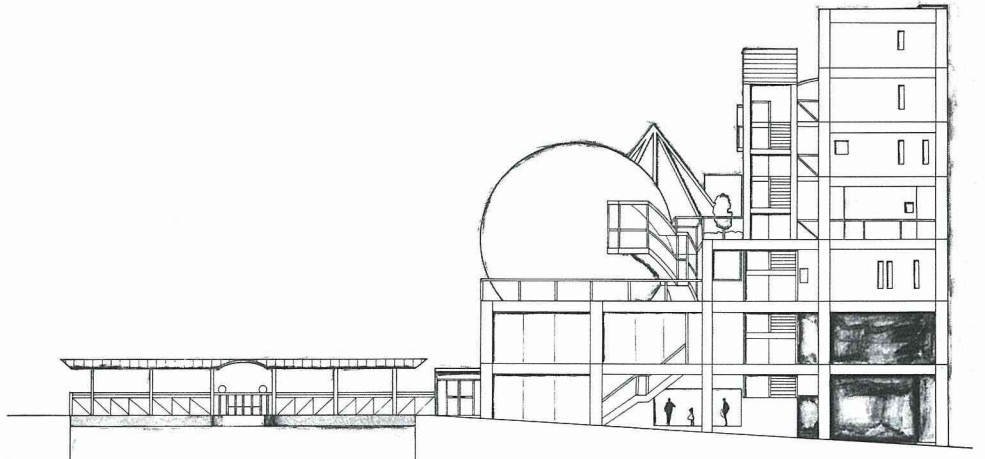
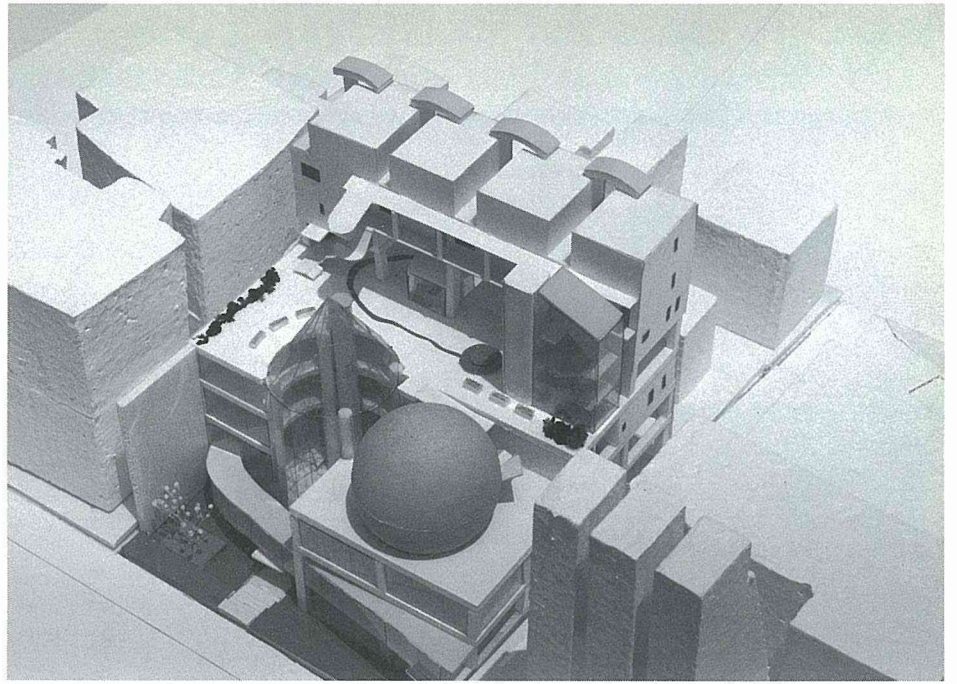
山口祐一郎  
Yuichiro Yamaguchi



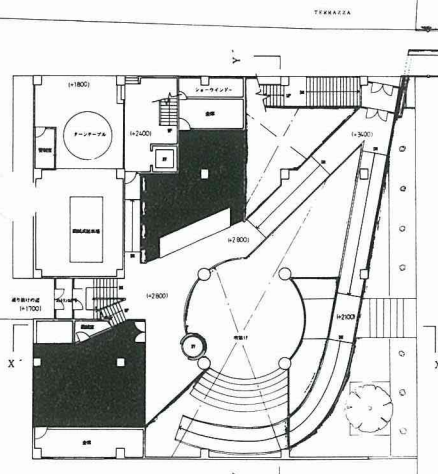
site plan



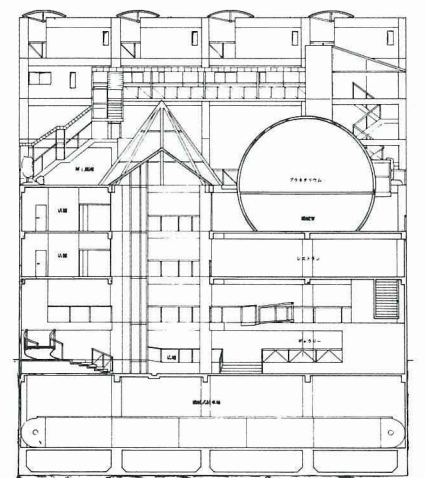
5th floor



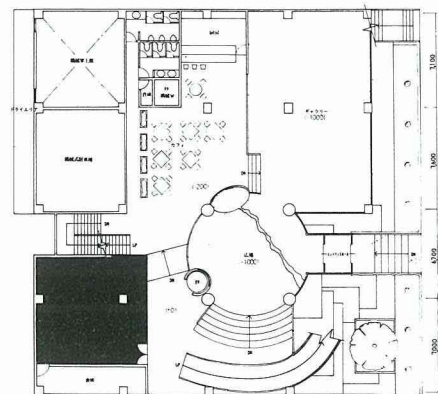
north elevation



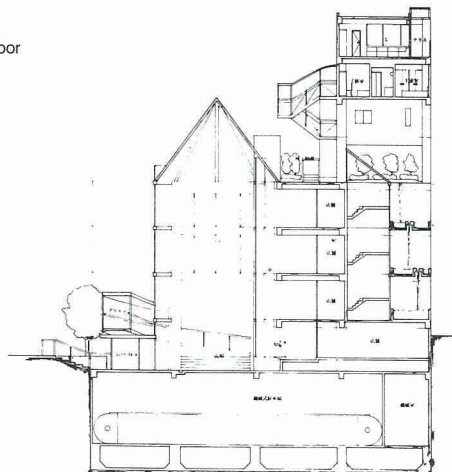
2nd floor



section



1st floor



section

■商業施設を建ててもつぶれてしまう「キラー通り」、歩行者より車の通過量が多いことが理由のひとつでもある。  
 ■この通りに商業施設を建てるという挑戦的な試みをするにあたり、通過者の大部分を占める車に対してのサイン性を主にとらえた。球と円錐のボリューム、そして全断面を映すガラスの通り側ファサード。  
 ■複合される住居は屋上庭園の上に浮く、下層での混沌とした都市の状況から遊離した生活。

# 1993年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

This year's outstanding 3rd-year studio work: Winter Semester

## 課題を逆行する Inverse Design Approach

### 講評

講師 團 紀彦

この課題は、3つの段階から成り立っている。

第1段階：壁面と柱に基づく立体構成。この段階では具体的な敷地の特性や特定の機能は設定せずに空間とフォルムのシステムを発見する。

第2段階：第1段階でスタディーした立体構成にヴォリュームを与えながら特定のプログラムを設定する。

第3段階：第2段階でスタディーした建築に、それに適合し、または対比効果を生み出す周辺環境をデザインする。

このような課題を出題した意図は、大学における建築の設計課題のほとんどが、敷地条件と機能的条件を与件として与え、それらを解く、いわゆる“プロブレム・ソルビング”の形式を採用しているのに対し、現実に即した建築家の職能を考えると、そうした与件をただ受動的に受け入れるだけでなく、より積極的に与条件に対しての設定能力を養うことを念頭においている。現実の設計行為の中では、与えられた与件を十分に理解した上で、それらの現実をふまえた上で建築的に構成する能力が問われることはいうまでもないが、その習練が積み重ねられていくほど、また現実に対

團 紀彦  
Norihiko Dan



1956年 神奈川県生まれ  
1979年 東京大学工学部建築学科卒業  
1982年 東京大学大学院修士課程修了  
1984年 イェール大学建築学部大学院修士修了  
1986年 團・青島建築設計事務所設立  
1993年 東京工業大学建築学科 講師  
主な作品：新島グラスアート・センター、M邸、新島セミナー・ハウス、八丈島のアトリエ、スライス・ビル、ヴィラ・森井、ストラータ、ローソン東富士ゲストハウス

- 第1段階  
いくつかのタイポロジーに基づく建築的構成をつくる。この段階では、特定のプログラムや敷地条件は認定しなくてもよい。ただし、何らかの動きのある「場」を作り出すように心がけること。
- 第2段階  
第1段階の建築的オブジェクトを「建築化」する。特定のプログラムを発見し、オブジェクトを変形させながら、両者を共存させるよう試みる。
- 第3段階  
第2段階でつくられた建築と周辺環境との関係をデザインする。建築物を変形し、敷地条件を想定しな

から両者のより望ましい結びつきを発見する。  
(注) スケールは自由、敷地とプログラムは架空のものでもよいが、できるだけ具体性をもたせること。

- 提出図面  
配置図  
平面図  
断面図  
立面図  
模型  
設計趣旨  
設計プロセス(第1段階～第3段階)

する発見的な能力と新たな提案性が求められてくる。

本課題では、第3学年の後期ということもあって、従来の課題を、おおむね一通りこなしてきた学生たちに対して、その形式を逆行させることによって、より建築設計のプロセスを立体的に理解させることが意図されている。結果的には、そうした課題の意図を十分に学生たちへ伝え切れなかったことや、また伝わったとしても、それに十分答えるだけの基礎力がまだついていないことも手伝って、多くの学生に戸惑いが生じたことは否定できない。今後の指導における課題と受けとめて

いる。  
全般的な印象は、やはり第1段階での構成的なシステムが、第2段階で飛躍的に自由に展開できた学生は少なく、むしろ第1段階の形骸が硬直化して第2、第3段階で足かせとなって身動きがとれなくなっているものが多いように思う。これには、学生諸君がもっと手を動かして、基礎力を身につけた上で、自分の考えを文章に推敲するように自由に表現できるだけの造形力を身につけることがまず必要となるだろう。

田中富朗君の提案は、限定された構成要素をもとに茶室の空間を作りだしており、やや唐突に見える形態のどこかに茶室への導入の妙味が作りだされているかにみえる。しかし、この種の限定的な要素の構成であれば、周辺のランドスケープとの繋がりを強力に打ち出すことと内部空間のダイナミズムを作り出すことによって存在そのものの重さと強さをよ

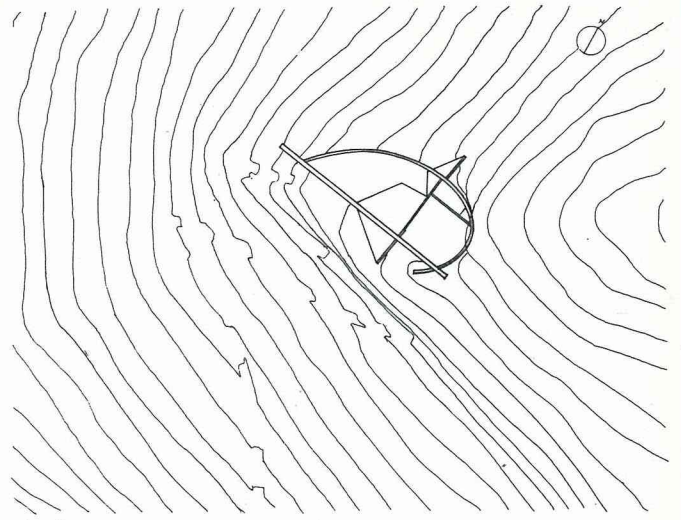
り表現できたはずである。小池卓也君の作品は、出題の意図をよく捉えて系統的にプロセスをまとめてはいるが、第1段階の構成の勢いが、第2、第3段階に反映されていないのが気になった。村岡直人君の作品も、プロセスを明快に示してはいるが、第1段階の立体構成をそのまま全体的なプログラムの編成に移行させてしまった点で、空間的な魅力を失ってしまったのではないか。このような場合には、第1段階における構成的骨格を保ちながら、パブリック・プライベート、フィギュア・グラウンド等の編成の理念と合わせて、より魅力的な空間を発生させることが必要であったと思われる。相馬克政君の作品は、自然発生的に生成される集落のようなイメージをもったホテルの提案であって有機的な中庭広場を作りだしてはいるが、課題の主旨との関連のなさ、ランドスケープの不自然な結びつきが、問題点となっているように思う。

# 茶室

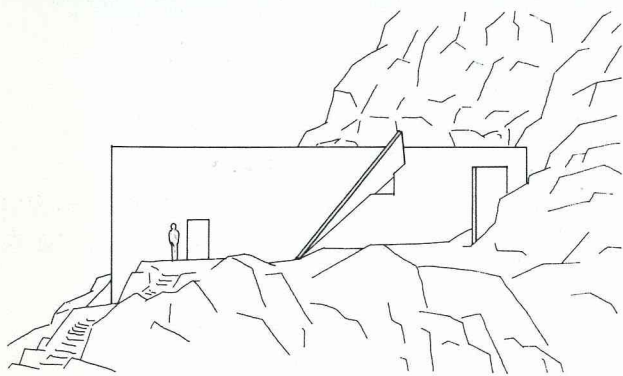
Tea Ceremony Room

田中富朗

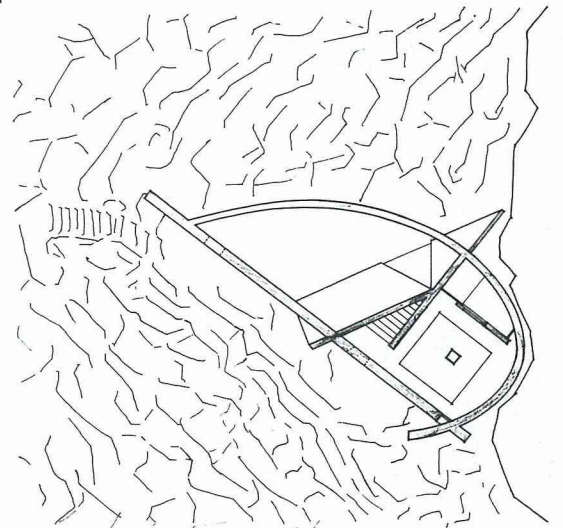
Tomio Tanaka



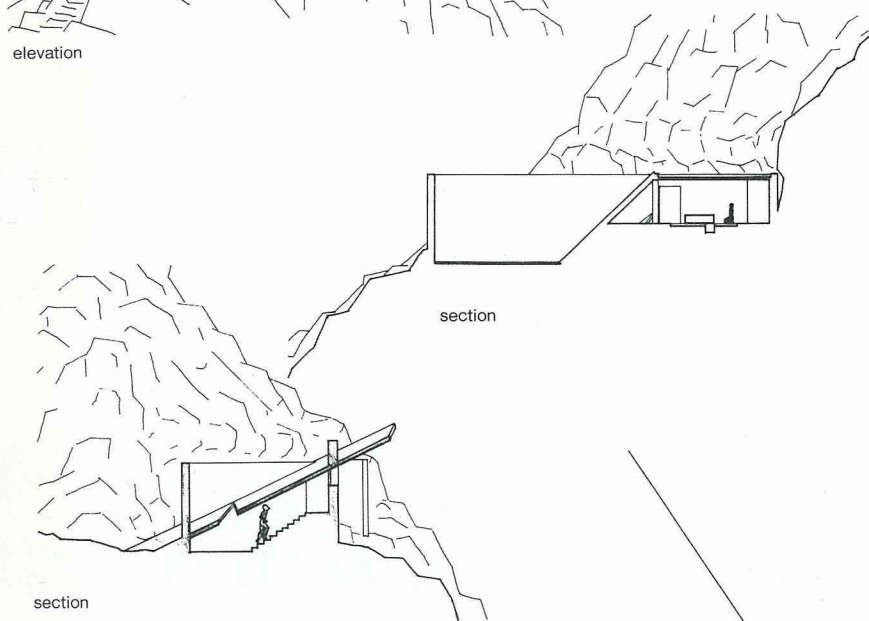
site plan



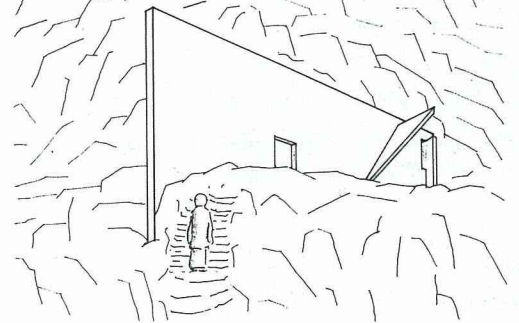
elevation



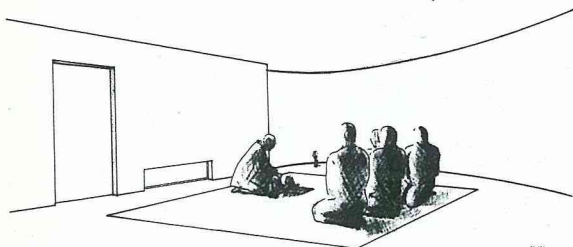
plan



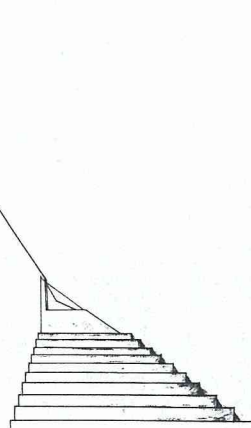
section



section



※

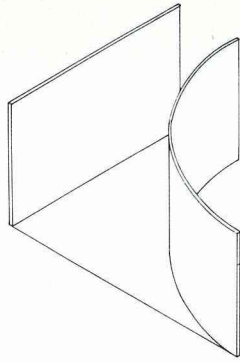
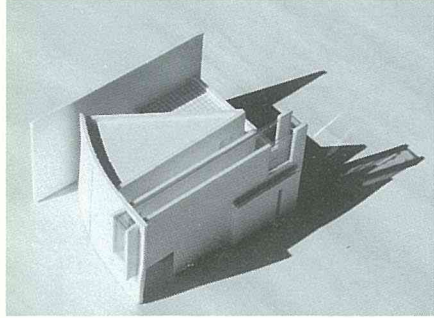


■「課題を逆行する」ということでしたが、はじめ何を言っているのかわかりませんでした。しかし、エスキスを繰り返すうちになんとなく「逆行」の意味がみえてきました。■建物の形態・機能・環境などの諸要素が、円環状に並んでいて、そこを私がグルグル廻るうちに、設計している建物が何であるか決定していく感じでした。たまたま、その円環を廻るきっかけが、「形態」であったというわけです。■いつもの製図の課題は確かに「何をつくるか」がはじめにあるわけで、そのことから「逆行」というのはふさわしいのですが、私のなかでは、「何をつくるか」が円環の一部であったので、「逆行」というより、「回転」してしまいました。

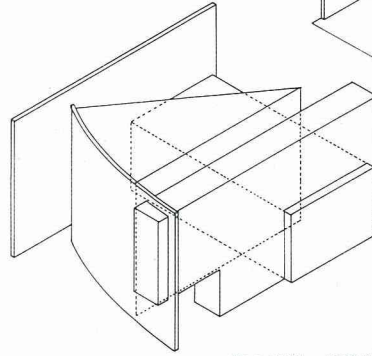
# Gallery とき

Gallery Time

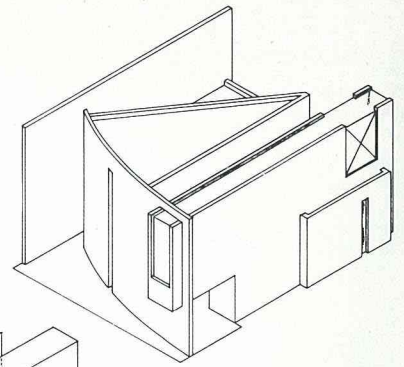
小池卓也  
Takuya Koike



▲第1段階：1枚の壁の出現



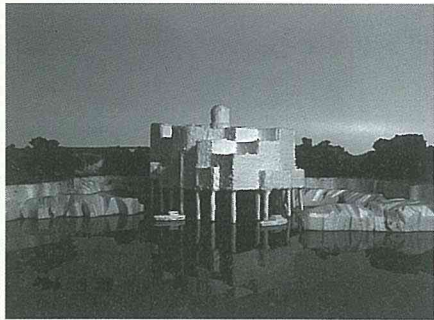
▲第2段階：建築化された壁



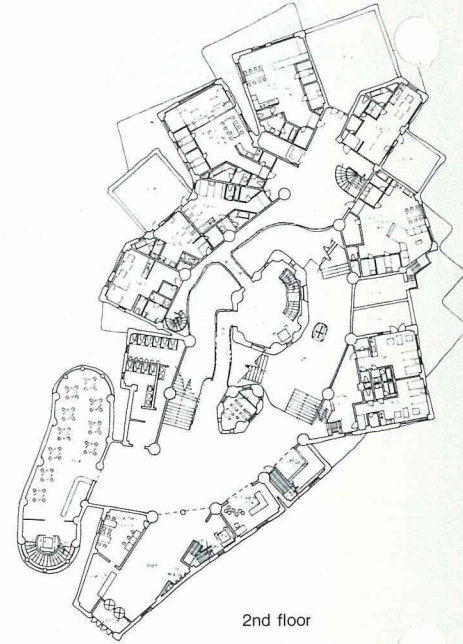
▲第3段階：周辺環境との調和

# Sunken Ship Hotel

相馬克政  
Katsumasa Soma



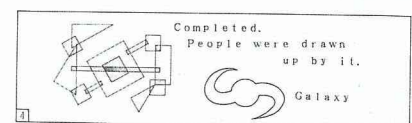
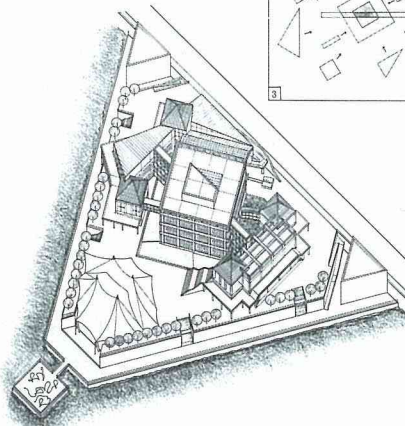
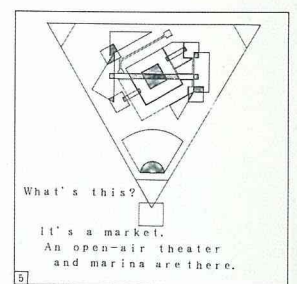
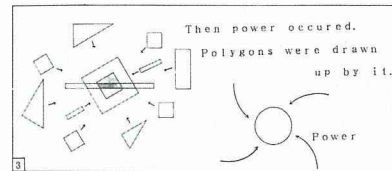
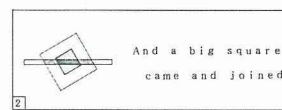
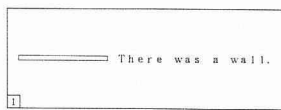
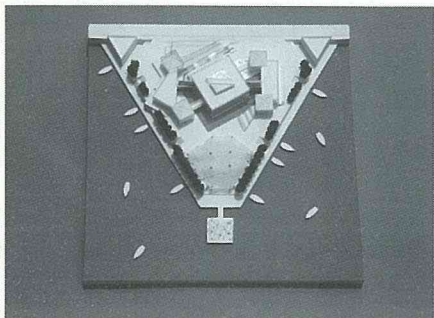
site plan

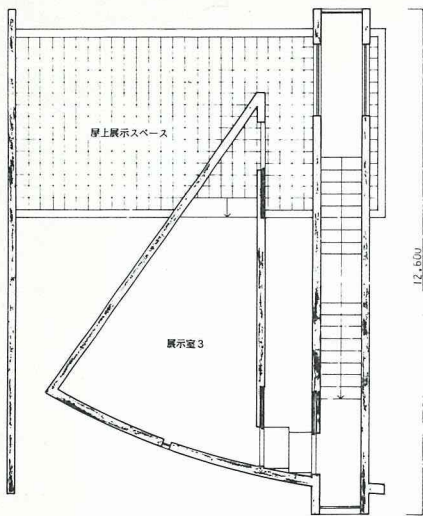


2nd floor

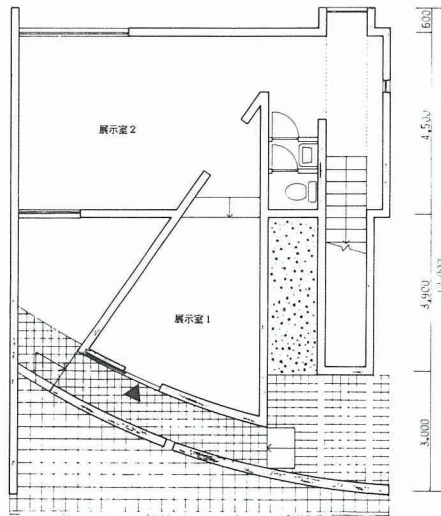
# LSI for a Town

村岡直人  
Naoto Muraoka



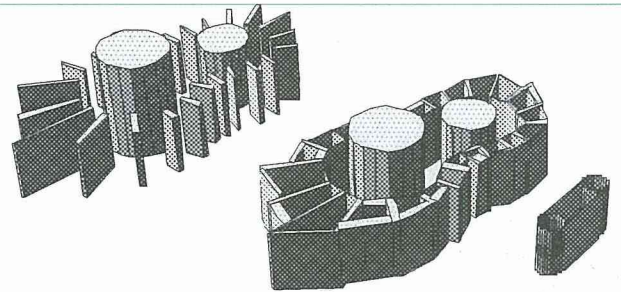
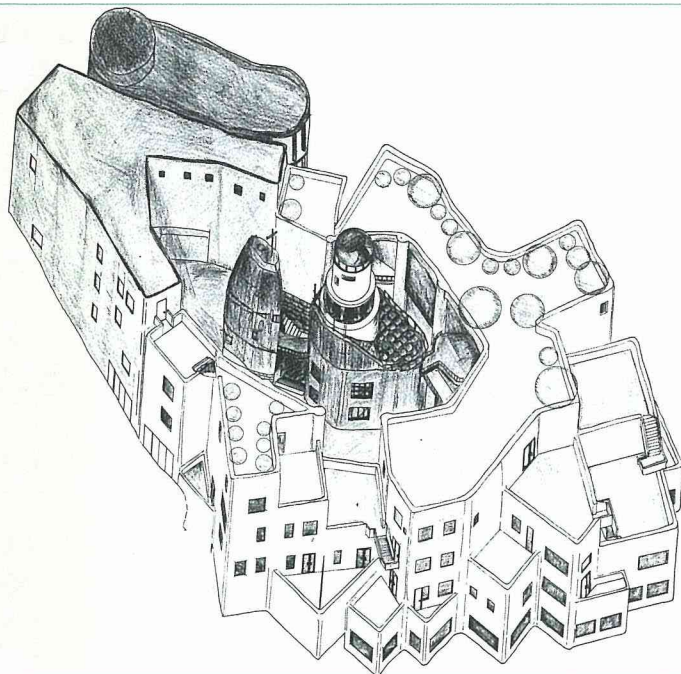


2nd floor



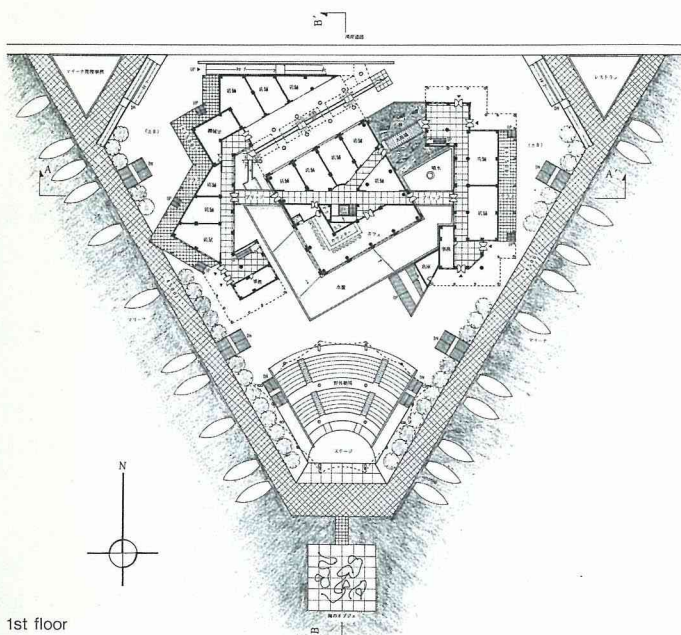
1st floor

■この作品は、一対の壁が生まれるところから始まった。向かい合った壁の間を、人が通り抜けるとき、あるいは、そこにたずむるとき、壁はその人にどのようなはたらきかけるだろうか。■この壁を建築化するにあたり、さらにいくつかの要素を加え、各要素と機能を対応させた。この際、壁によって生じる空間は、人の流れがたまる場所と位置づけた。■以上の段階までにつくられた建築と、周辺環境とのデザインにおいて、物理的な動きを感じない建築と、無常観を漂わせた川を隣り合わせを考えた。■しかし、オブジェクトの変形、周辺環境との結びつきという点において、さらに検討を重ねるべきであった。

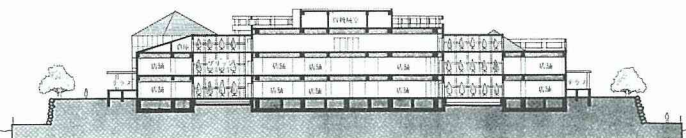


■何かを創造するにはまず直感的に脳裏に浮かぶ原風景が存在し、それがさまざまな制約を受けながら形を変え現実化されてゆく。もしそこに一切の制約がないならば、その原風景をそのまま現実化することに全精力を傾けるべきである。■岸壁に建つホテルを創造した。「ひとつの円筒とそれを補佐するもうひとつの円筒、そしてそれらを取り囲みながら放射状に延びる複数の壁」という基本構成を建築化してゆき、それと平行してホテルというプログラム

を与えた。その過程においてメインの円筒には物質的な象徴として「動線空間」と「灯台」の機能をもたせ、サブの円筒には精神的な象徴として「礼拝堂」の機能をもたせた。両者を取り囲む構造のうち、南側の客室部分を水面から立ち上げることによって浮遊させ、同時に下の列柱空間が水路となって船からのアプローチを可能にした。■このプランからなにかの「情景」を思い浮かべた人がいれば、創造した甲斐があったというものである。



1st floor



section

■コンピューターの基盤を町にたとえると、ICや抵抗といった部品は建物、配線は交通手段、ライフラインといえよう。このプロジェクトはさまざまな機能の部品（建物）の中でもものを売るという機能をもった部品「マーケット」の計画である。このマーケットはうずまき型の平面をしており、まわりの物質（もの、人）を引きつける重力（魅力）をもつ銀河を模している。■また、この平面形は回遊性を生み、買物というリラックス行為とあいまって脳と体をほぐしてくれる。東西に走る

ブリッジは建物全体としては緑の壁となり、海への視覚を遮ることにより、両側でみると開放された印象を与える。集客効果を高める装置として野外劇場を配し、ステージの先に、海のしぶきをイメージしたステンレスワイヤーのオブジェが存在する。三角形の二辺はマリナーで、底辺は道路に面している。■経済活動の場であるマーケットと文化活動の場である野外劇場とギャラリーの集積するこの場は、町の大規模集積回路（LSI）となる。

# 1993年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

This year's outstanding 3rd-year studio work : Winter Semester

## 【私のセカンドハウス】 My Second House

### 講評

非常勤講師 林 雅子

1993年11月末から翌年1月末までの期間、6回にわたって3年後学期の建築設計製図第4(選択)を担当した。

2つに分けたクラスをさらに前半と後半に分け、4分された20人余りを、それぞれ一人の講師が異なる課題を担当するのだが、はじめに行われるスライドレクチャー、最後の講評については、2クラス合同で行うという珍しい方式であった。これは学生に対して、限られた期間内にも、外部から招いた講師たちの多様な課題と意見に接する機会を与えようとする、仙田教授の工夫の結果とお見受けした。

私の課題は「私のセカンドハウス」。スライドレクチャーでは、それぞれロケーションの異なる木造のセカンドハウスや、ライフスタイルの個性豊かなワンルームハウスの例などを紹介した。また、昨年たまたま大学の傍らに完成したRCと木造の2つの住宅を見学して、予め図面で読み取ったものと実際の空間体験との違い、スケール、ものの寸法、材料の実感に触れる機会をつくった。

ところで、3年の後期にあえて住宅を課題とした理由について一言触れておこう。いう

林 雅子  
Masako Hayashi



1928年 北海道生まれ  
1951年 日本女子大学家政学部生活芸術科卒業  
51~56 東京工業大学建築学科清家研究室研究生  
1958年 林・山田・中原設計同人設立  
1985年 アメリカ建築家協会名誉会員  
日本女子大、東京大学、東京工業大学等非常勤講師。  
受賞：日本建築学会作品賞('81)、第3回エイボン女性  
年度賞芸術賞('81)、吉田五十八賞('86) 他  
著書：『空間の骨格—林雅子のディテール』彰国社  
『現代の建築家 林雅子』鹿島出版会

#### ●私のセカンドハウス

あなたは、きまりきった日常の暮らしから脱却するための第2の住空間を、どこに、どのようにもとこうとするか。

#### ●課題の意図

これまで経験したことのない次の事項を学習する。  
①与えられた設計与件に対応するのではなく、条件設定を含め、何をするべきかを自ら考え、企画する。  
②建てられる環境と、そこで営まれる生活の個性から建築を発想する。  
③住宅を学ぶことの中にも含まれる建築の基本的かつ重要な要素——モノの寸法ヒトの動作と寸法、空間のスケール感などを的確に把握する。  
④木造の特性をいかした架構とデザインを学ぶ。

#### ●設計条件

①環境：敷地の位置、規模ともに自由。但し国内の実在の場所であること。  
②生活：家族構成、職業、常住の住まいの環境や条件、セカンドハウスの使用目的、使用時期、頻度などは各自設定すること。  
③規模：想定された生活条件下で維持可能な最小限度のものとする。  
④構造：在来工法の木構造。  
●要求図面  
A 2版トレベに鉛筆書き青図。最小枚数にまとめる。  
①各階平面図：1/50 配置図兼用を原則とす。主な家具配置を記入する  
②立面図：1/50 (2面以上)  
③断面図：1/50 (1面以上)  
④断面矩形図：1/20  
⑤設計説明書：設定した設計条件を簡単にまとめる。  
⑥軸組模型：1/50 地形を含む

までもないことだが、建築の設計は住宅に始まり住宅に終わる。住宅ができなくて他の建築が満足にできるはずはないのに、昔と違って近頃の世の中では、住宅を設計する機会は滅多に得られない。そこで、あとになって設計の基礎ができていなかったことを悔やまないうように、あえて住宅を選んだのである。

さて、結果はどうであったか。中間のエキスチェックは敷地環境条件の選択を含め3回行ったが、すべての与条件が設定されたところから出発する受け身の対応に馴らされているせいか、環境の選択についても住空間の発想についても、ハウスメーカー風や建売風という固定観念から脱け出せないようであった。機能別に分類した空間を棟別に配置した例や、都心のビルの上という設定もあったが、発想倒れていま一步の突っ込みが不足していて、「これは」という鋭い発想はみられなかった。豊かな時代にもかかわらず、自分の望む生活というものが具体的な像を結ばない様子を見るのは辛いことである。

渡辺案は、木造の特徴を生かした屋根架構の美しさと、最小限のシンプルライフが説得力をもっているが、これは多忙なひとりの男の隠れ家という企画の賜物である。サービス周りの平面はもう少しゆとりをもたせながらコンパクトにまとめられるはずだ。表現はい

かにも稚拙であった。

小池案は、昼と土間、カバードテラスを接続させた気持ちのよさそうな案だ。当初の発想を次第に育てて佳い案に成長させた例だが、台所を北側のサービス部分にまとめた方が意図が明快だった。

瀬戸案の、小ホールをもつ案は着眼はよいのだが、公共の場とは異なる積極的な音楽の楽しみ方や、くつろぎのスペースが工夫されて欲しかった。ベランダを広くしたら少しでも雰囲気はまったく変わっただろう。H形屋根はソーラーコレクターとしてもピアノの演奏効果にも、むしろ逆効果だ。

田中案は、海を望む岬にカーポートと一体に計画された家で、奥行きをハイサイドライトで解決している。台所前のデッキには屋根がほしいし、便所、脱衣室にも風を入れない。吊り押し入れもきちんと表現してほしい。

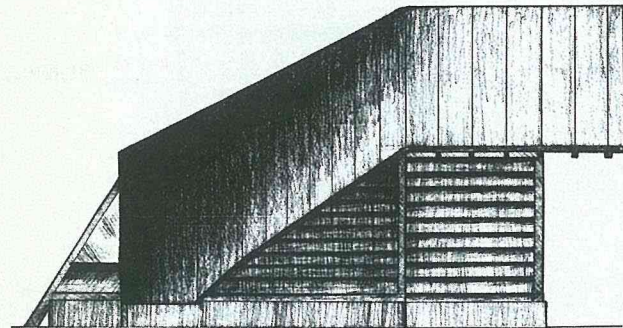
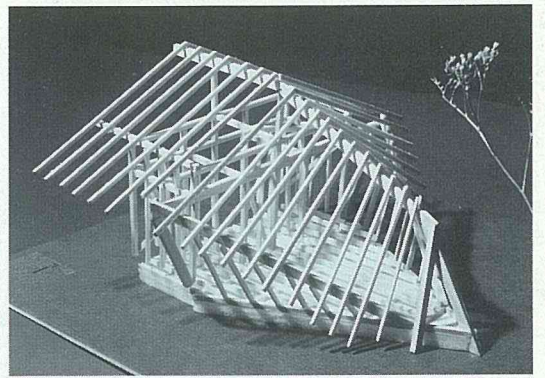
村岡案は、まとまりのよい案だが、どこかにありそうなのが欠点で、もっとのびやかさがほしい。生活空間を2階に上げるなら廊下もどきのデッキでは不十分だろう。階段の幅と蹴上げ、下の階の天井高などの基礎的な寸法感覚や、登り梁の間隔、その下側の桁、それを支える？中央部の梁の意味など、わからないことが多い。木造の架構をきちんと勉強してほしい。

# ある多忙な男の隠れ家

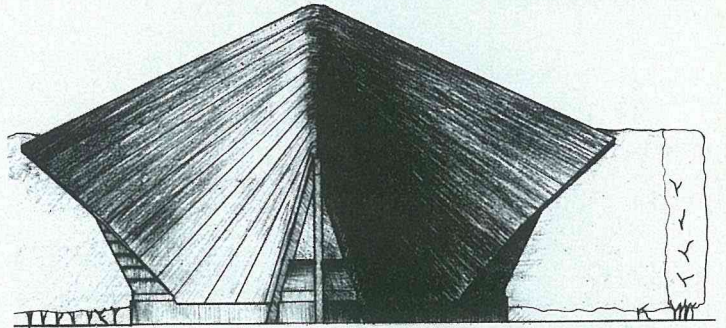
Hideaway for a Busy Guy

渡辺 拓

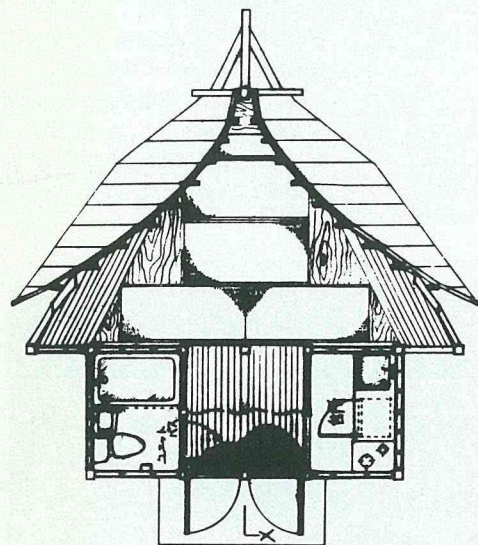
Taku Watanabe



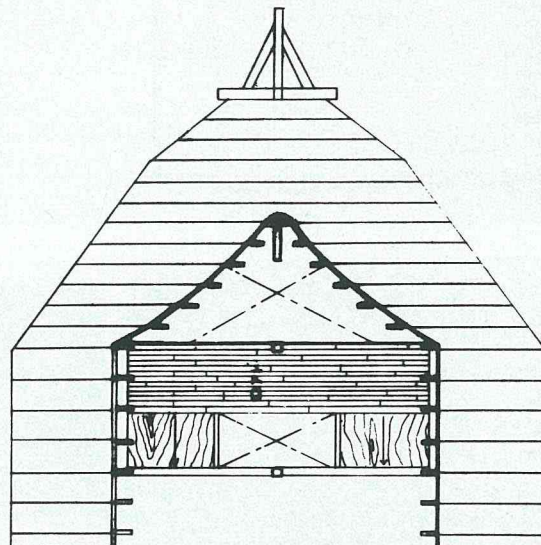
elevation



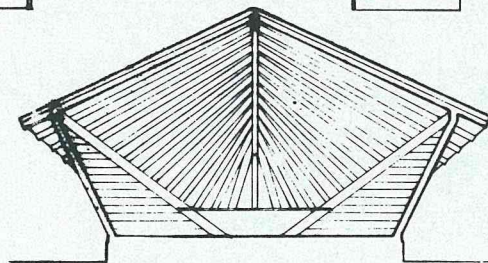
elevation



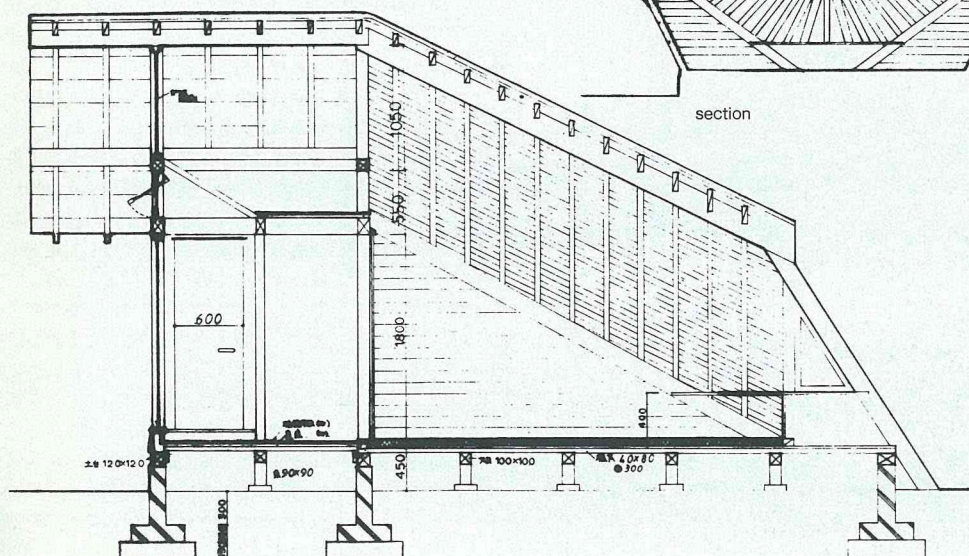
1st floor



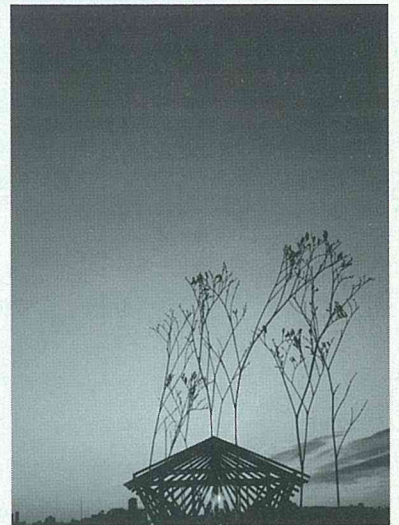
2nd floor



section



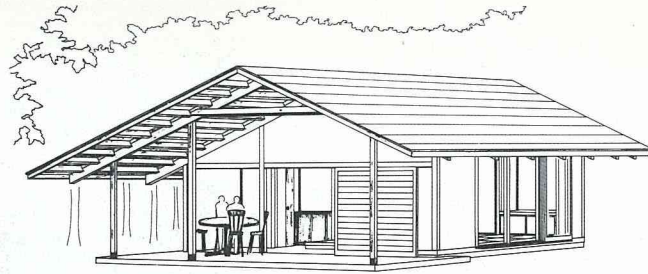
detail



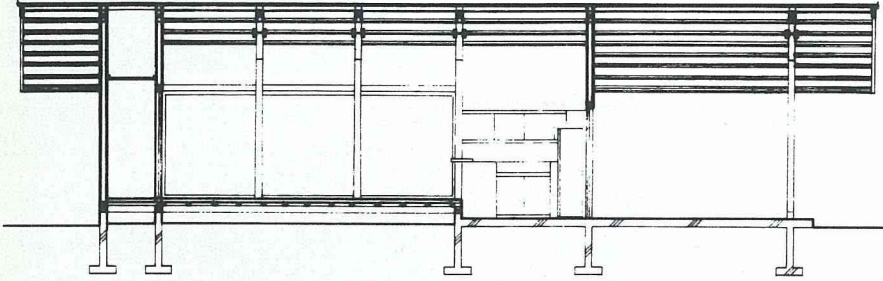
■施主は東京の中心部に住み、日々たくさんの情報に囲まれ、仕事に追われていた男。彼にもっとも必要だったことは「何もしない」ことだった。求められるのはできる限り情報から切り放されること、そこにいるだけで日常を離れられること、守られること、簡単に逃げ込めること、いつまでもそこにいられること。■このような条件から、敷地は北総線矢切駅から徒歩10分程の場所になった。都心から30分程の土地だが、忙しい東京を傍観できるとても静かな場所だ。東側は鎮守の森に面し、西側は江戸川の堤防まで開けている。彼一人が寝転がるためだけの最小限の部屋を充たすために、平面と架構が計画された。開口は東西方向に限られ、西の妻側から射す光が緩やかな曲線を描く天井面を照らす。■今日、情報やイメージは存分に与えられたが、その結果大切な時間は奪われた。選択や消費の自由はあるが、創造や思考の自由は少ない。そのような状況で「何もしない」自由を求めたかった。

# 軽井沢の家

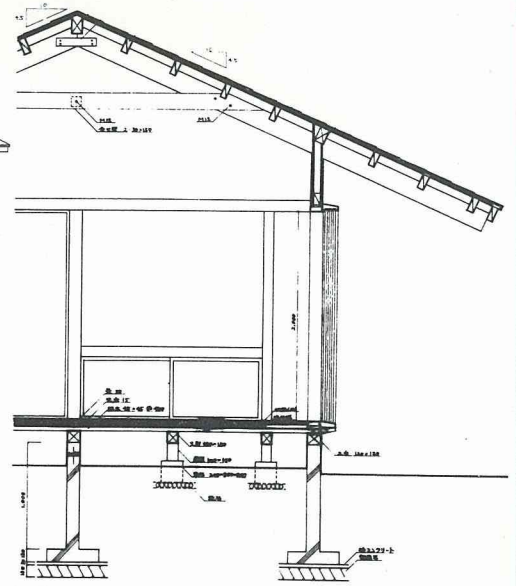
House in Karuizawa



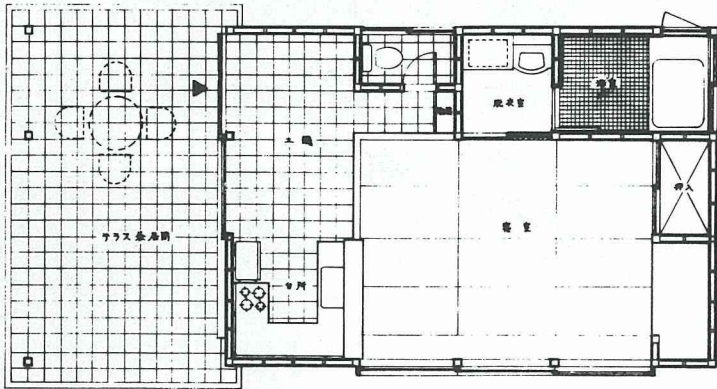
小池卓也  
Takuya Koike



section



detail



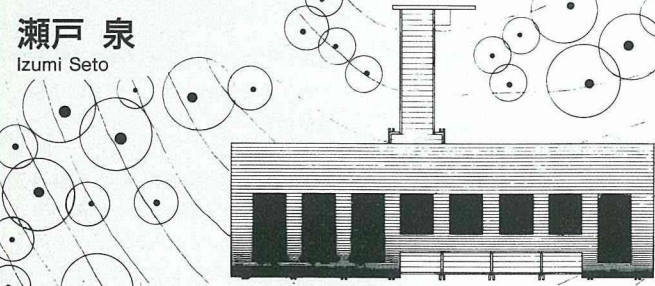
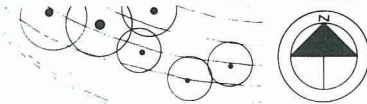
1st floor

■間仕切りの少ない空間で、人間同士、あるいは自然とふれ合う機会をもつとを目的とした。■食事やだらん、くつろぎの時間、生活は土間の回りで展開される。空間と空間の間に存在する境界線をあいまいにすることにより、視線がぶつかり、言葉が行き交う交流の場として機能することが可能となった。■構造的には合せ梁を採用し、広い空間をつくることができた。

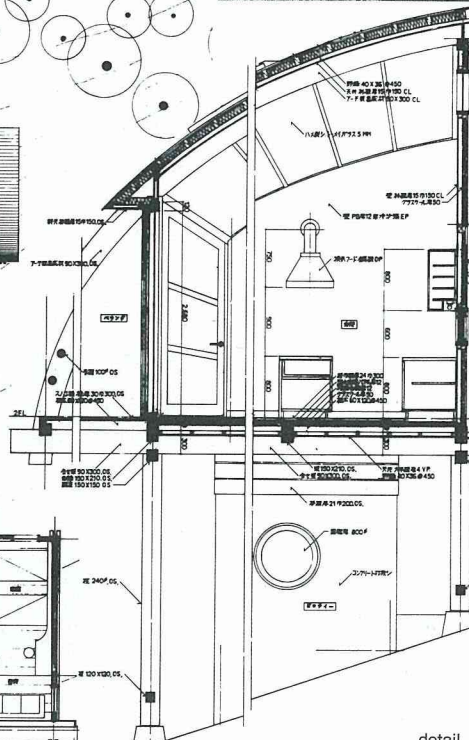
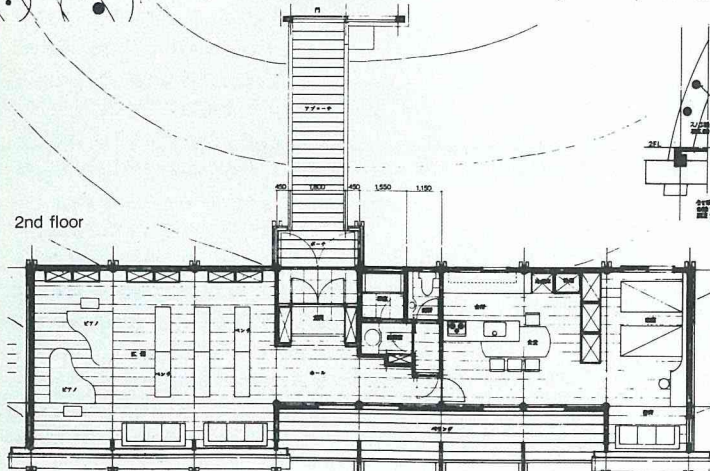
# ピアニスト夫妻の家

House for a Pianist Couple

瀬戸 泉  
Izumi Seto



2nd floor

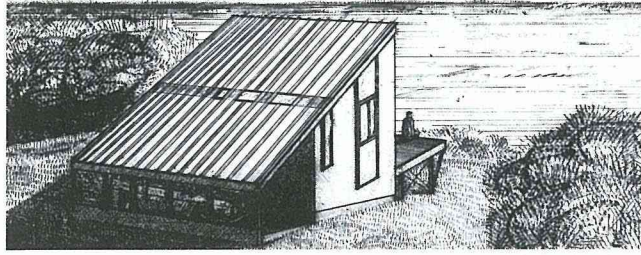


detail

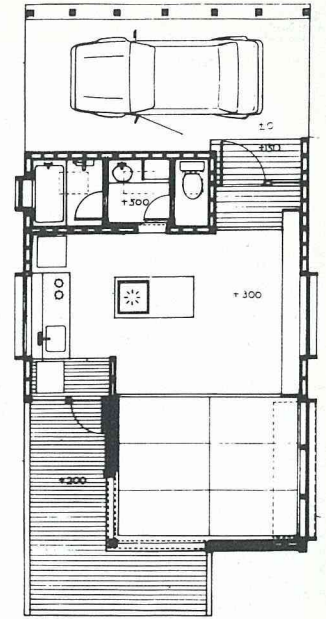
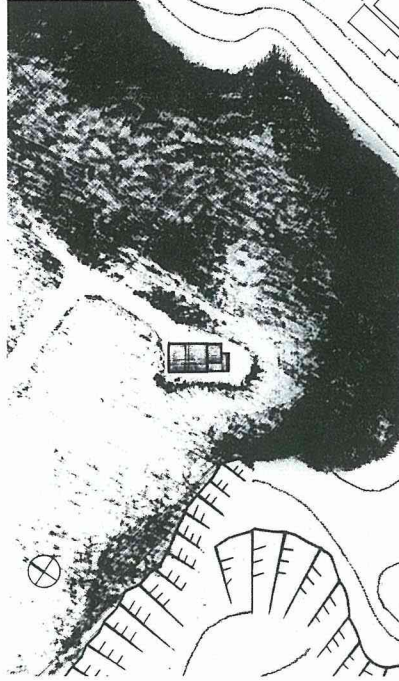
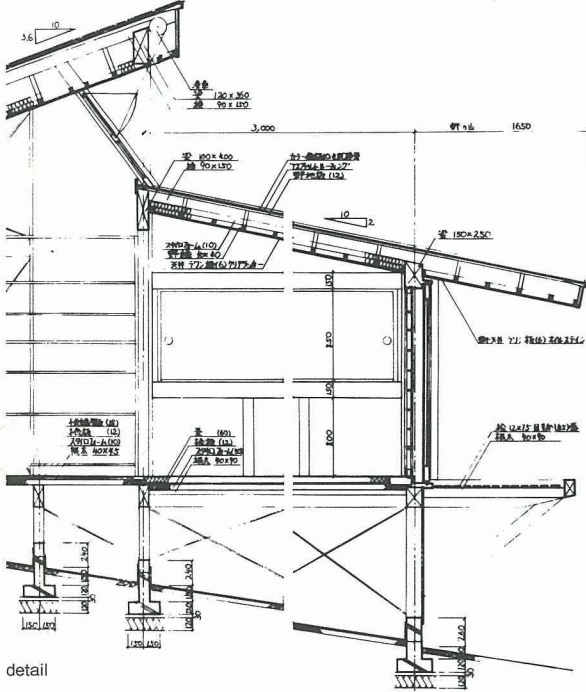
■富士北麓の御坂峠は、太宰治の小説『富嶽百景』の舞台となった土地である。ここからみた富士山は、太宰の『葉を借りれば』、『風呂屋のペンキ画』、『芝居の書割』のような俗っぽい風景と感じる。しかし御坂での二カ月の暮らしの中で、太宰は「のっそり突っ立っている」富士山を心のより所とするようになる。■この御坂峠の地で、創造的な演奏活動の場と、くつろいだ生活の場を併立させようと試みた。■凡人受けする「俗」な富士は、創造活動の妨げとなるため、演奏の場は富士に対して閉じた空間とした。いっぽう、日常生活を行う場では、堂々とした富士の眺めが安心感をもたらし、富士に対して大きな開口をとった。■集成材のアーチ梁をつらねて生みだされた細長い内部空間の連続性を失わないように、仕切壁は極力設けていない。別室にする必要のある水廻り諸室も、ひとつのBOXにおさめて、あたかも巨大な家具のようにみせている。このBOXが家の中央に配され、演奏の場と日常生活の場を分けている。

# 休息

Take a Rest



田中富朗  
Tomio Tanaka

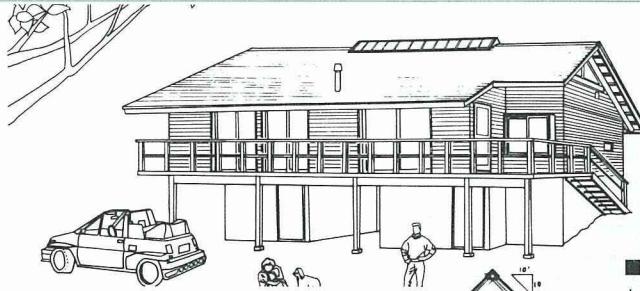


1st floor

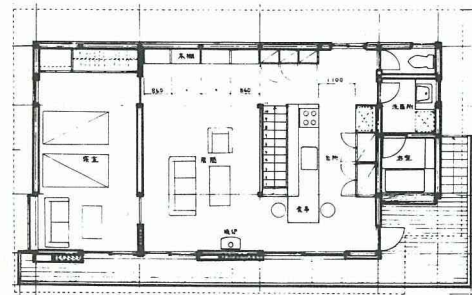
■私は「海が好き」ということで、安易に海のセカンドハウスにしました。夏の暑い時期に海で泳ぐのも楽しいけれど、冬の寒い時期の海をただ眺め、波の音を聞くというのも悪くないと思います。■セカンドハウスの中で、海の音を聞きながら、食べて、読書して、寝て、ときたまテラスから海を見たりして、特にこれといって何かをするわけではない。これがこのセカンドハウスです。

# 蓼科の別荘

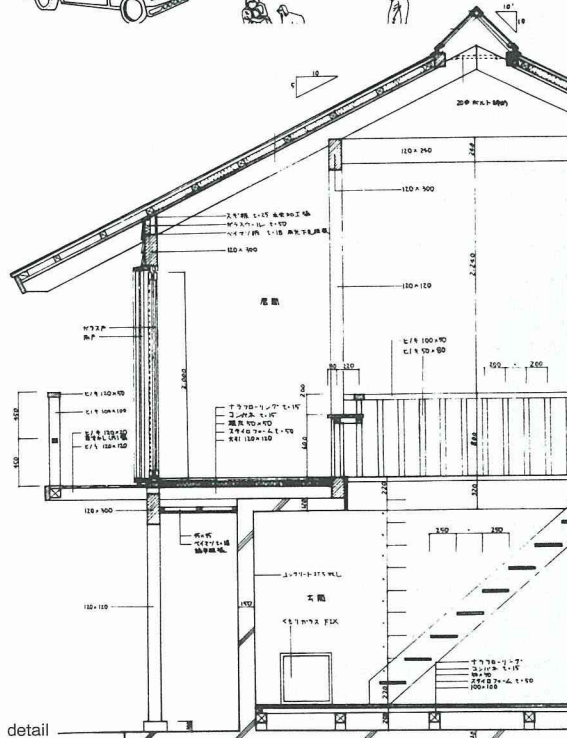
Second House in Tatেশina



村岡直人  
Naoto Muraoka

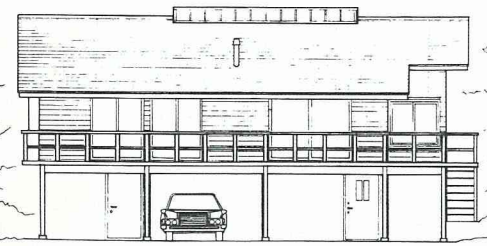


2nd floor



detail

■これは長野県茅野市蓼科に計画された別荘である。哲学者であり、思想家でもある施主が、東京の都会の雑踏を離れ、執筆および沈黙考の場として利用するものである。そのため、道路から離れたひと気の静かな針葉樹林の中に建つ。南西向き斜面に吸収されるかたちで建ち、遠くは八ヶ岳連峰、近くは横谷溪谷を眺めるため、生活の場をすべて2階におさめた。■1階は玄関、駐車スペース、物置のみで、2階は寝室とLDKに分けただけのシンプルなプランニングとなっている。LDKの空間には膨大な書物を収納するライブラリーがあり、居間でくつろぎながら仕事ができるようになっている。■彼はたいへん議論好きで、論客である友人と一晩中語り合うのもしばしばである。よって、この別荘は妻に気づかうことなく議論のできるサロンとしての役割をかねる。■今夜もまた、数人の知者がここに集い、人間とは何かというテーマについて語り明かそうとしている。2階には明かり、外は葉擦れの音。



section

# 1993年度設計製図第四(3年生)優秀作品より

This year's outstanding 3rd-year studio work : Winter Semester

## 最小限都市の都市観測所

Survey of Essential City Features

### 講評

非常勤講師 北川原 温

この課題に対する学生たちの反応をみて大変興味深く思ったのは、ほとんどの学生が皆少しずつ異なった都市観を潜在的にもっているということです。また、現代という時代を象徴するように他者との関係を切断した内気で観念的な傾向や、自己の眼差しや意志を留保した非常にクールな姿勢が多くみられます。都市そのものに対する実感のなさ、都市を考えることの虚無感などから、都市のイメージを描くことに学生たちはずいぶん悩んだようです。おそらく都市というものは与えられたもの、あるいはすでに存在しているものであって、創り出す、描いてみること自体あまり現実感がなく空想上の対象となってしまうのでしょう。

学生たちは、エスキスを進める過程で、都市の全体像を描くのではなく、都市の断片、局面を取り出し、その小さな部分から都市のモデルを想像し、さらに全体像へ光をあてるという方向へ向かったように思いますが、これはなかなか賢いアプローチです。

この課題の目的のひとつとして、建築や都市の研究に携わるものにとって、詩的思考の体験も必要ではないかと考えていましたので、

北川原 温  
Atsushi Kitagawara



1951年 長野県生まれ  
1977年 東京芸術大学美術学部建築科大学院修了  
1982年 設計研究所ILCD設立  
1991~94年 東京芸術大学非常勤講師  
主な作品：メトロサ(地下空間を活用した都市型小規模集合住宅：'91JIA新人賞)、柏原タウンセンター(住宅団地小規模コミュニティー施設)、東日本橋派出所、いわきニュータウンセンター  
主な著書：JA vol.8『北川原温特集』新建築社  
『北川原 温×稲越功一』TOTO出版

#### ●出題主旨

現代における都市は、都市を構成する無数のシステムが複雑に絡み合い、重層しながら絶えず変化し続けている。都市について、その部分や断片を語ることはできても、都市の総体を言い当てることは不可能に近い。都市は情報化し情報そのものになって、空間を超越してゆく一面をみせている。都市は必ずしも空間を必要とせず、むしろ実態のないイメージとしての都市のほうが、リアリティーをもつとさえいわれる時代になってきている。

そうした現代の都市の特徴をふまえ、現代における最小限都市のイメージを描き、その最小限都市の中の都市観測所を設計する。

まず、都市の類型や現代都市の特性をレビューし、各自の考案による最小限の都市のイメージを設定する。最小限の意味は、空間的なサイズやシステムの問題として捉てもよいが、あなたにとって都市とは何かをできるだけ明確にし、その最小単位を表現してほしい。

都市観測所は都市のさまざまな現象やできごとを調査・研究し、都市の構造や本質を探り、都市とは何かを追求する公共の研究機関の施設として想定する。また、この施設は研究成果を一般に公開し、研究者の交流の場として役割をもつものとする。

#### ●設計条件

都市観測所は下記の機能をもつものとし、機能・構

造は自由に設定してよい。

- ・都市におけるさまざまな日常のおよび非日常の現象を観測し、それぞれ正確に記録する。(観測方法は自由に考えてよい)→観測室、準備室など
  - ・その現象を分析し、原因や構造を調査・研究する。→研究室、研究者の宿泊室
  - ・調査・研究の成果を発表する。→展示ホール、レクチャーホール、シミュレーションルーム
  - ・都市観測研究者の国際的な会議や研究会を催す。→コンファランスホール、ホワイエ
- なお、必要と思われる付属的な諸室およびエントランスホール、通路、WC、倉庫、管理室、研究室などを適宜判断して設けること。

#### ●提出図面

(最小限都市のイメージ)

- ・概念図とコメント(1000字程度)

(都市観測所)

- ・最小限都市における位置図(概念的でよい)
  - ・配置図 : 1/500
  - ・平面図 : 1/200
  - ・断面図(2面) : 1/200
  - ・透視図(またはアクソメトリック)(2面) 彩色のこと、模型写真(カラー)でもよい
  - ・計画概要表(規模、構造、主な仕様など)
  - ・設計趣旨(1000字程度)
- 上記をA1版2枚に表現する

成果としての提案の完成度よりも、むしろいろいろと悩んでみるということに重点をおいて指導をしたつもりです。都市や建築をめぐる現在の状況がモダニズムの限界を示しているように、機械論的、計画論的あるいは技術論的な思考の中から、人びとの心を感動させる建築や都市をつくるには限界があるので、そのことをこの課題を通じて学生たちは理解をしてくれたように思います。提案はおもしろい案がいくつもありませんでしたが、紙面の都合で傾向の異なった案をあげてみました。

#### 【荻原史郎 案】

最小限都市がなぜシミュラクルの空間の集合ということになるのかわかりにくいですが、最小限都市→都市の断片→シミュラクルとしての空間、という設定は都市のどの部分を切り取ってもその部分が都市としての要素をもっているというフラクタルな見方で興味深い。

また、都市観測所にシミュラクルの存在しない領域を探し出す目的をもたせるといふ考え方は、失われた都市の再発見を理論的に目論むということだと思いが、その姿勢にも

共感がもてる。

#### 【小田宗治 案】

異星人? が地球人を観察するために最大の人工環境としての都市の最小限モデルを設計するというプロローグは、劇画タッチで描きながら都市を生物の合理的な生態系のアナロジーとして見做すのはやや単純である。人間の意識や意志、あるいは経済行為や政治力学など部分的には合理的な説明が可能でも、総体としては説明の困難な事柄は数多くあり、都市は矛盾とカタストロフに満ちている。

しかし小田君が示した都市観測所は、そのロケーションや機能の設定の平凡さに反して、建築的想像力を感じさせ魅力的だ。

#### 【安野彰 案】

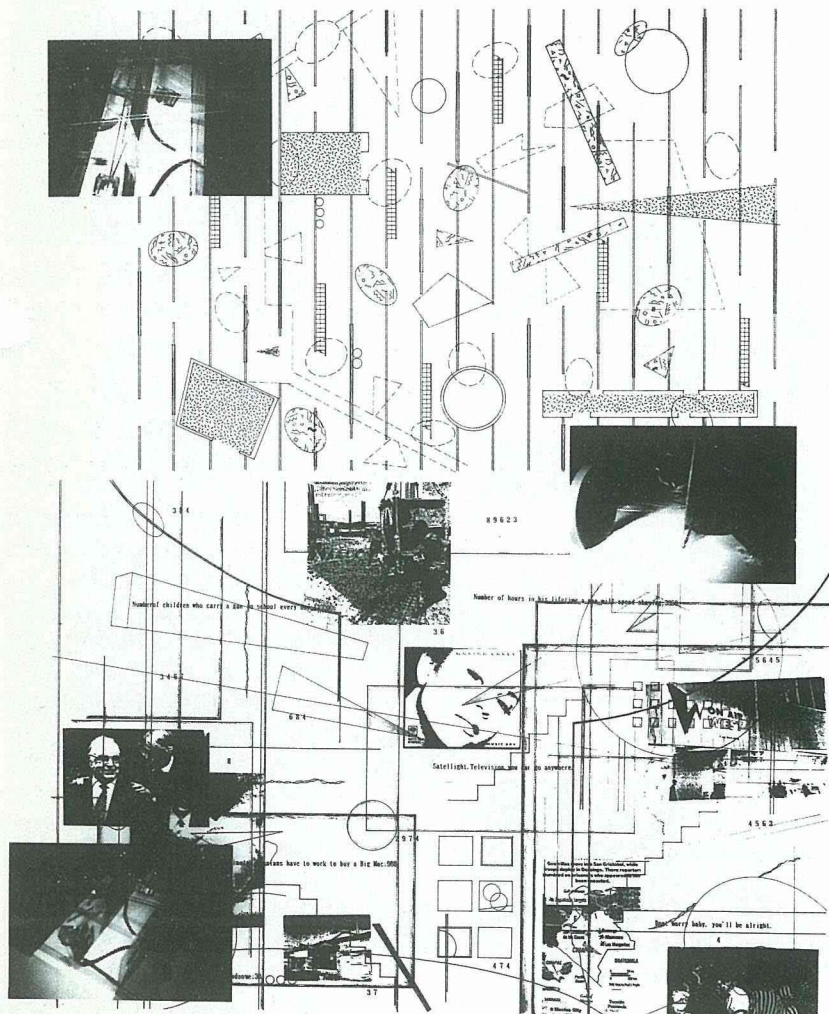
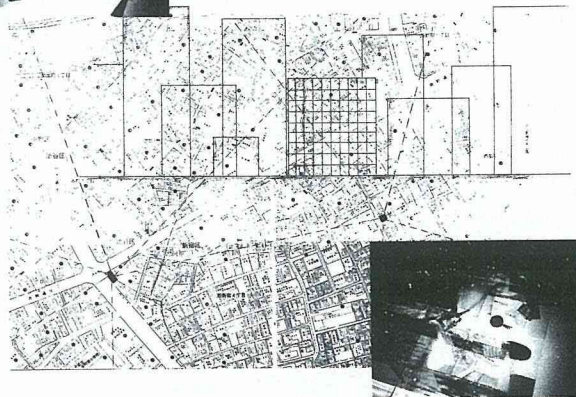
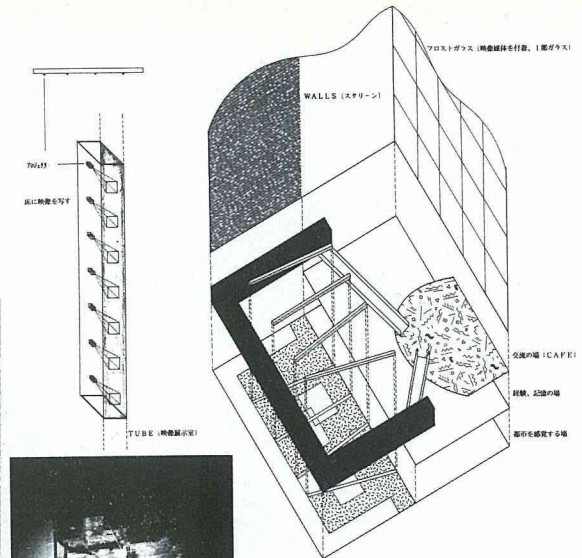
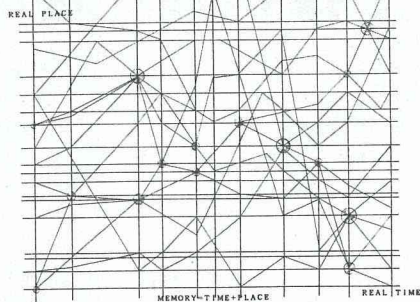
現実の空間(環境)と仮想の空間(環境)が適度なバランスを維持してゆくという都市の見方、そしてその2つの空間(環境)の接点に最小限都市をみようとする姿勢はとても理性的である。観測所のプランニングは、素直で爽やかだったが、空間的表現力が、伴ってくるともっとおもしろいものになるだろう。

# 最小限都市の都市観測所

Survey of Essential City Features

萩原史郎

Shiro Ogiwara



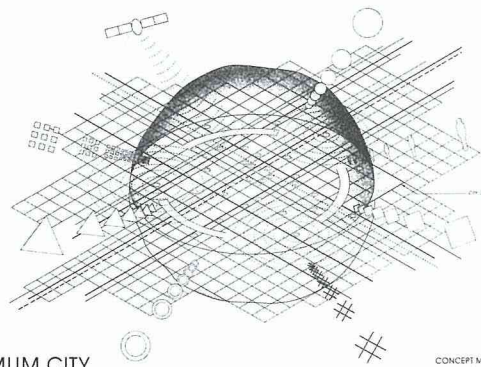
■われわれは空間を、物理的に、かつ個人のイメージの中でも捉えようとする。よって空間は客観的現実であり、また主観的現実でもある。後者をシミュラクルとよぶ。■個人的なものであるシミュラクルは、その情報源であるメディアの肥大化、かつ人びとの「中流である」という幻想によりアイデンティティを失い、その断片は社会共通のイメージとして客観的現実を浮遊する。しかも、メディアは非常に希薄なリアリティーしか残さず、均質化しきっている。(例：湾岸戦争)■ここで言う最小限都市とはこのようなシミュラクルの集合体であり、個々の建築物に大きな意味はなく、単なる単体の物質である。■この都市の観測とは、シミュラクルを人びとの頭脳から引き出して観測する行為に他ならない。それには、人びとが都市の虚像を一步手前から見つめなおし、それをリアルなものとして解釈し直す必要がある。■以上の理由から、観測所は仮想的な物として都市基盤に点在させ、ネットワークの多様性を確立させる。また、自己の行為を都市空間に埋め込むことで、アイデンティティの生存を保持させる。(Thanks for U2)

# 最小限都市の都市観測所

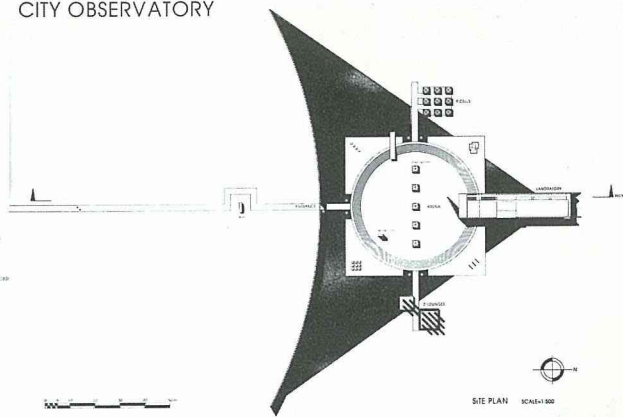
Survey of Essential City Features

小田宗治  
Muneharu Oda

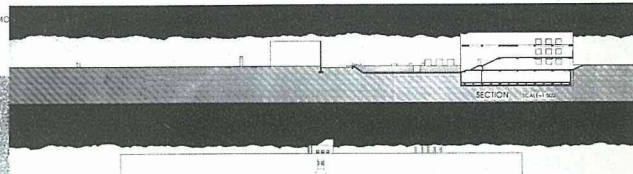
CITY OBSERVATORY



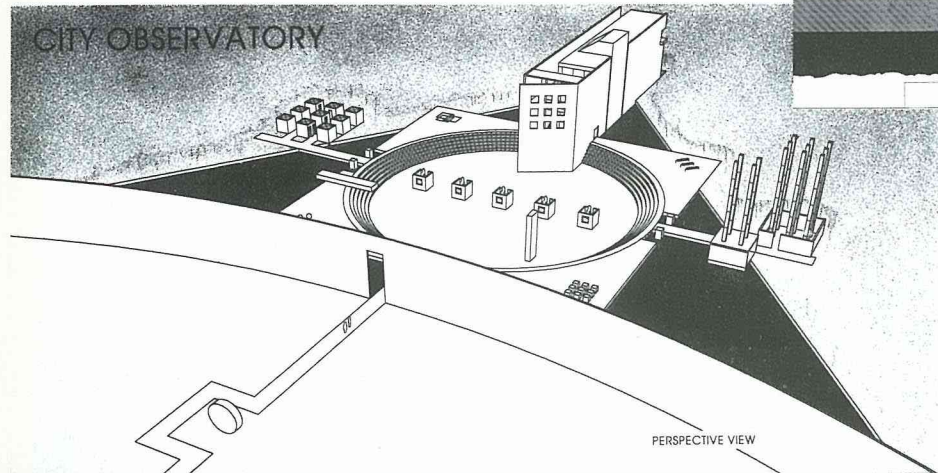
MINIMUM CITY



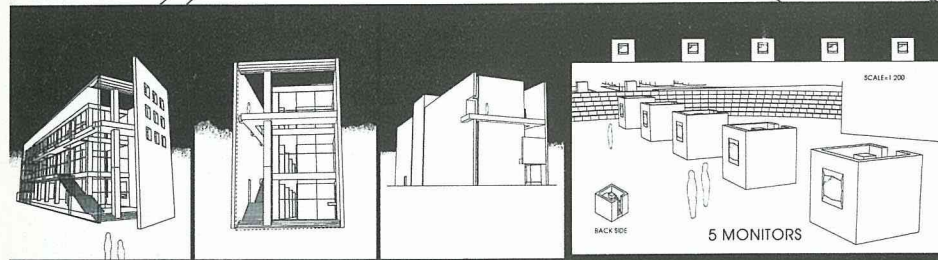
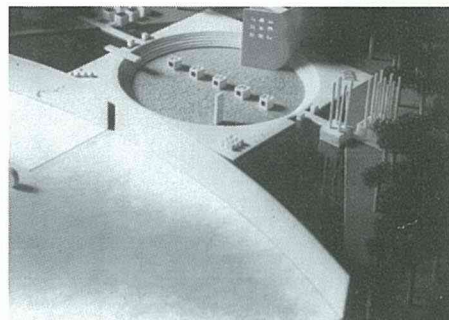
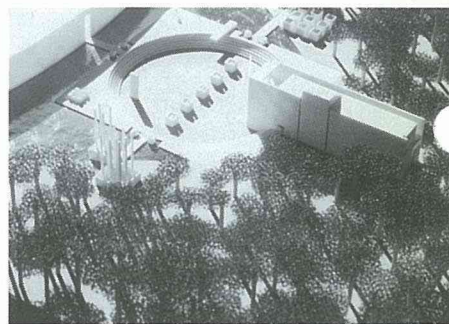
SITE PLAN SCALE=1/500



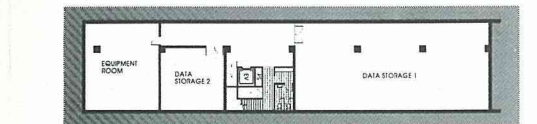
SECTION SCALE=1/200



PERSPECTIVE VIEW



5 MONITORS



BASEMENT PLAN SCALE=1/200



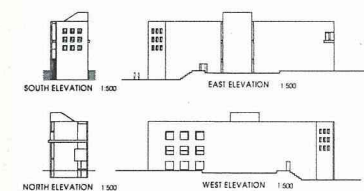
1st FLOOR PLAN SCALE=1/200



2nd FLOOR PLAN SCALE=1/200



3rd FLOOR PLAN SCALE=1/200

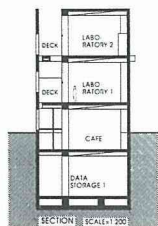


SOUTH ELEVATION 1/500

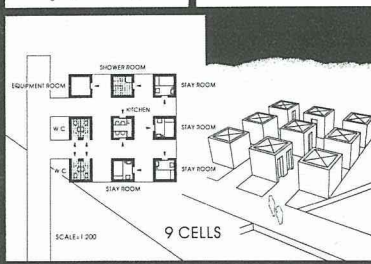
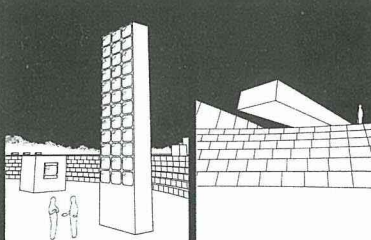
EAST ELEVATION 1/500

NORTH ELEVATION 1/500

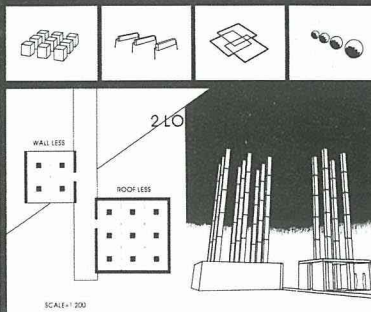
WEST ELEVATION 1/500



SECTION SCALE=1/200



9 CELLS



SCALE=1/200

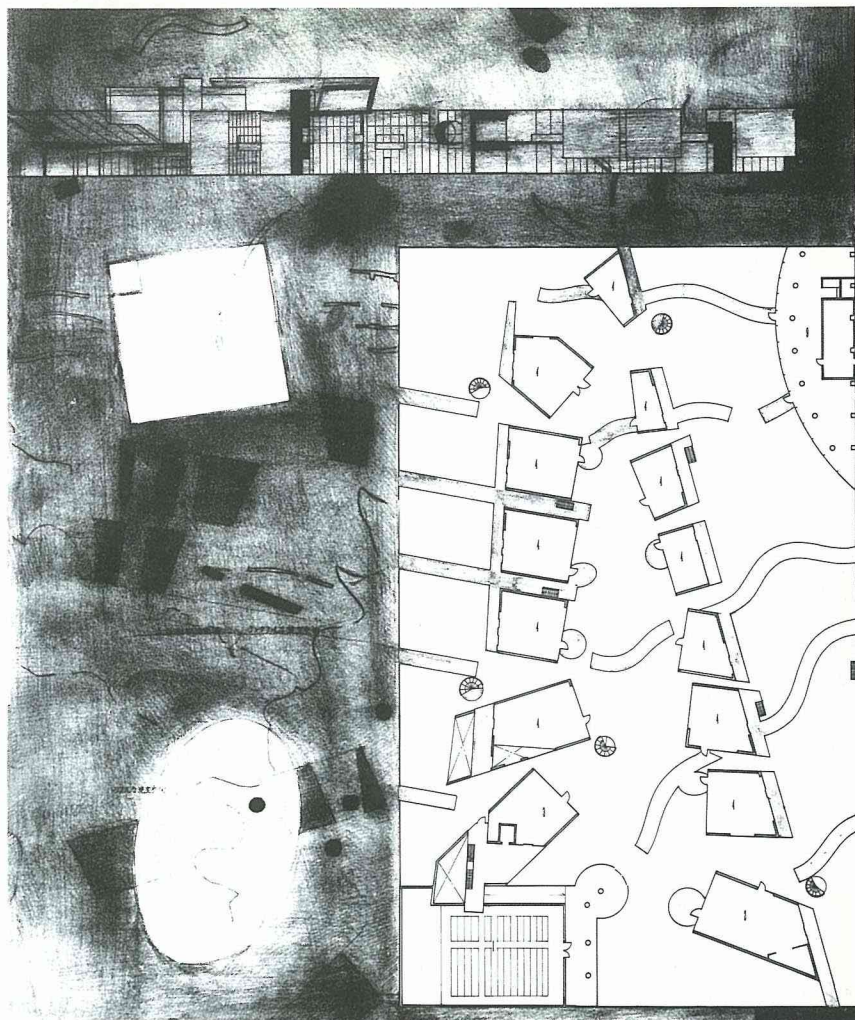
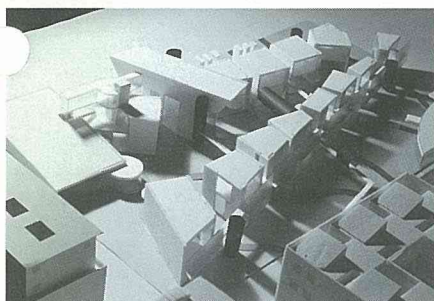
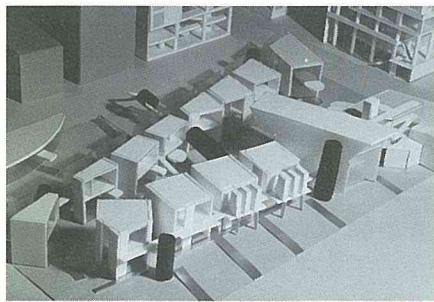
■この一見解釈不能な課題、まず都市の最小限要素をモデルとして提出しなければならぬ。完全な無秩序から、また最初の原生生物こそが、最小限の有機システムだと考えた私は、これをそのモデルとした。その特質とは「呼吸する開放系」、都市もひとつの永續する系である以上、最低限の有機性をもつはずだろう。■都市を体験し楽しむというのなら、都市へ入って行けばいい。ただ都市を「観測」しようというのなら話は違う。都市を客体化するために都市から隔絶される必要がある。しかし、あらゆる概念を飲み込んでしまう都市から何かを隔絶することなど、本当にできるのだろうか？■もはや都市に住んでいるわれわれにはそれはできない、都市から逃れることなどできないという認識から、それができるのは「地球外生物」しかないというアイロニカルなコンセプトをもった。図面は異星人の記録書というものを意図したが、これは建物の発想の段階から思考を自由にしてくれるのにも役立った。

# 最小限都市の都市観測所

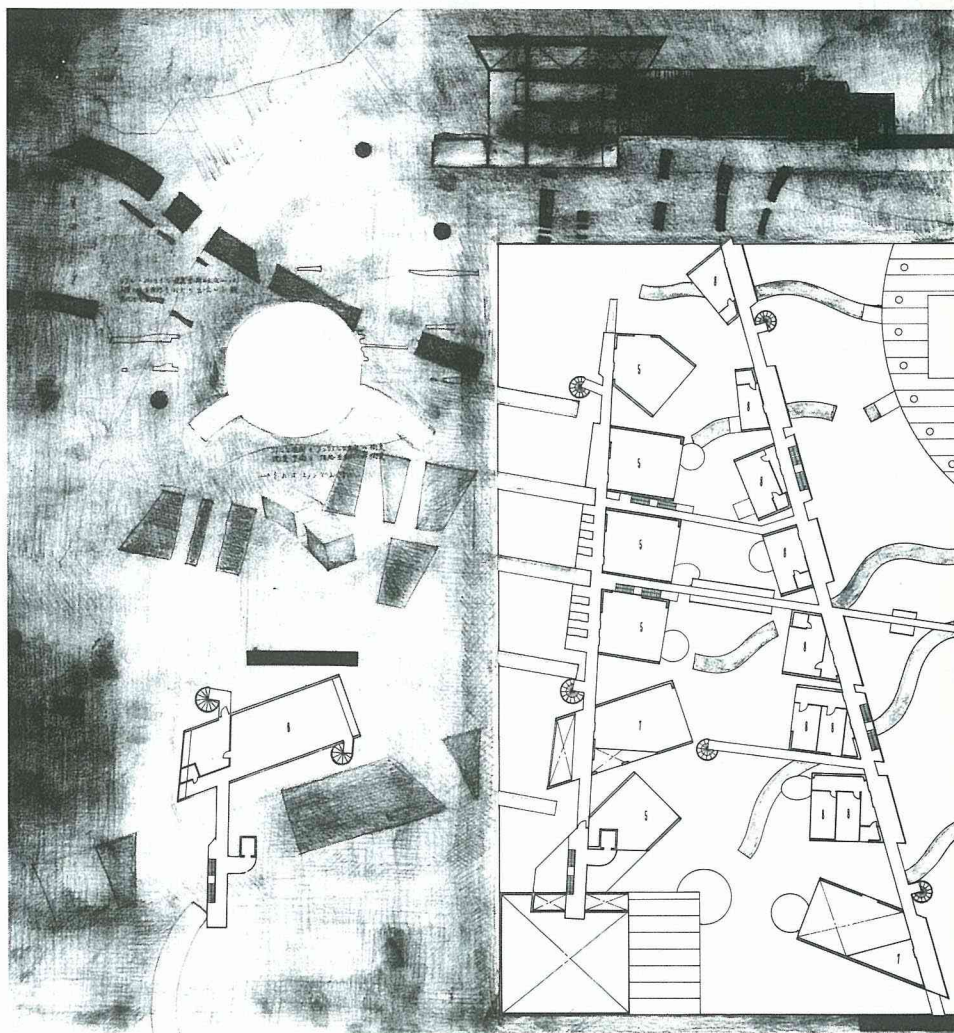
Survey of Essential City Features

安野 彰

Akira Yasuno



■現代都市の空間は、電子ネットワークによる流動的仮想空間と身体感覚による実体的空間とに大別でき、人びと、この中でコミュニケーションを行っている。近未来では流動的仮想空間が主役となりそうな勢いで、現在でもわれわれのリアリティーがその方向へ移行していることは否めない。しかし、人のコミュニケーションは、仮想空間だけでは完結せず、実体空間におけるそれを求めるものである。■現代における最小限都市とは、これら両方向の空間が、リアリティーを保ちつつ共存している場と考える。都市では、それぞれのコミュニケーションの方法にふさわしい空間が共存し、人びとの生活の中で空間的差異が次々と感じられるべきであろう。都市観測所は、両空間の感覚的差異を観測、研究するものとなる。■その形態は、都市を流れる情報の流れをイメージしつつ、一区画の四角い土地にさまざまな形の箱がただ置かれることで実体としての空間が現れることを意図したものである。内部機能は、ひとつずつ自立した箱の形と関係せず、建物の物的性質と対立する。



# 最小限都市の都市観測所

Survey of Essential City Features

## 【仲 胆 案】

フィクションの意味がデザインされた現実と仮定すれば、情報化社会ではフィクションとノンフィクションの境界は曖昧になり、その峻別は創造力の問題にゆだねられる。そういう意味では仲君の提案はアイロニカルではあるが、想像力だけが自身の存在の意味や理由を確認する手がかりとなることを示していて嬉しい。

ただ、ドローイングや模型に示された観測所は、むしろすでに存在している任意の建築をピックアップし、その文脈だけを変換して用いたならもっとクリアな提案になっただろう。

## 【吉田健二 案】

「現代都市に内包された過去都市」という設定は、空間都市を内包する情報都市と読み換えることができるだろう。この考え方は、現在の都市計画や建築計画において実践的に有効だろう。

現代と過去のメタフォリカルな表現によって二重構成される観測所は、発想はおもしろいが空間的表現に説得力がほしい。

## 【梅野圭介 案】

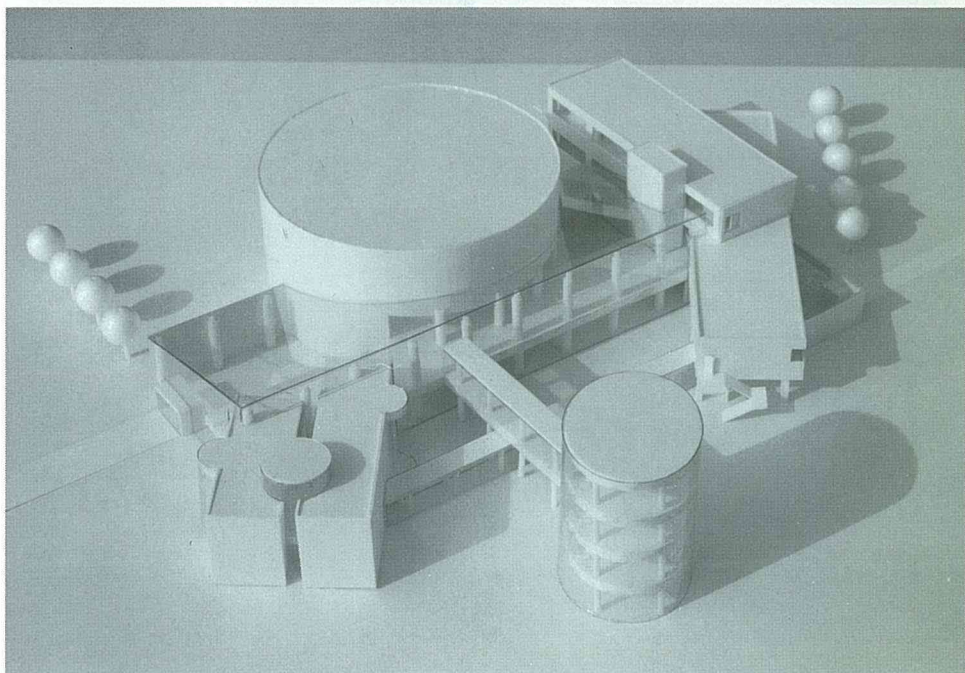
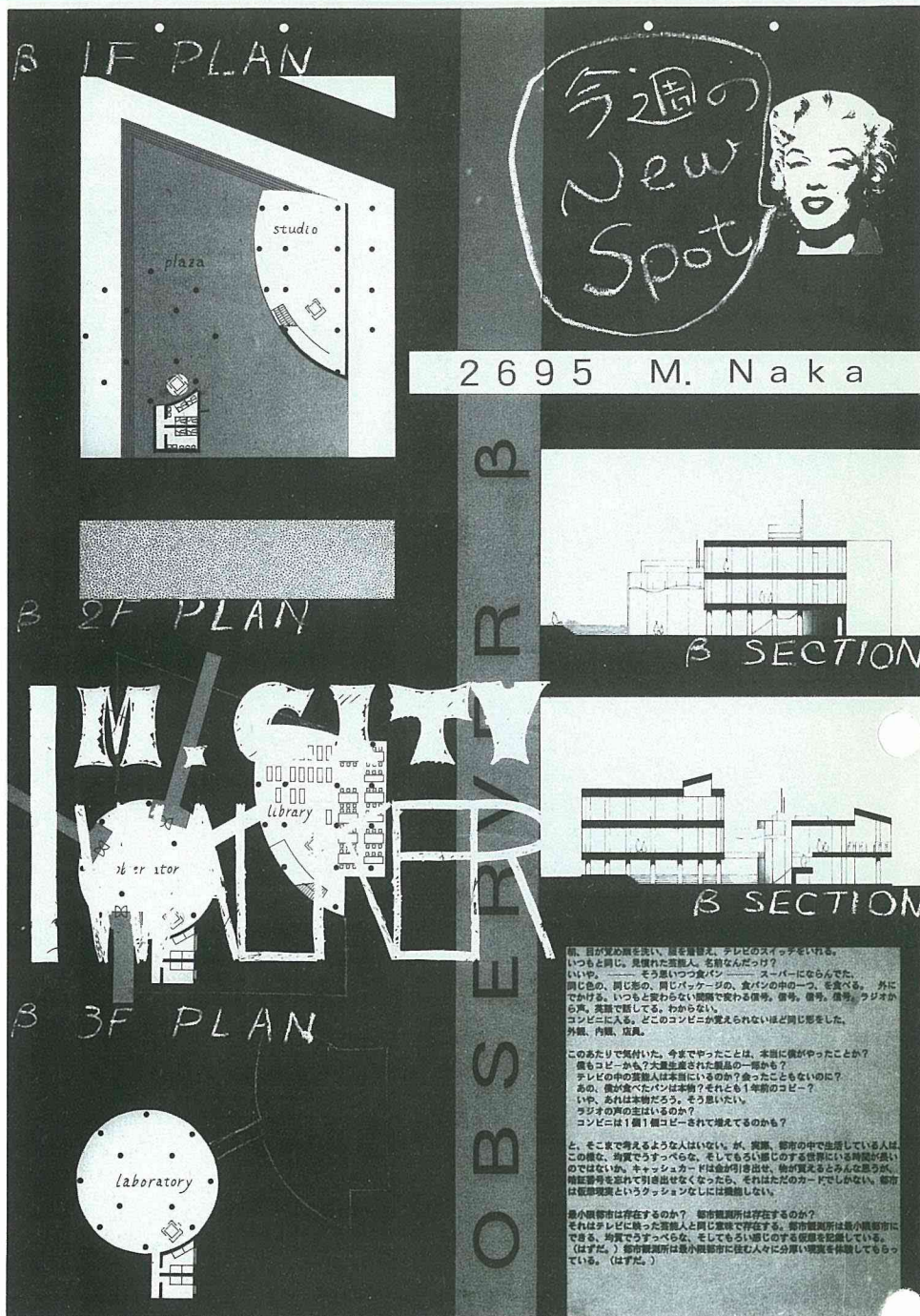
都市の誕生と成長を人間の欲望という観点から説明することは素朴すぎる発想ではあるが、さらにテクノロジーの問題を結びつけてみせるあたりはちょっと危ない感じがする。しかし欲望とテクノロジーの関係という問題はどの分野においても深刻なテーマだ。観測所の形態は特異なものだが、オリジナルであれば不思議な造形感覚があって印象的。

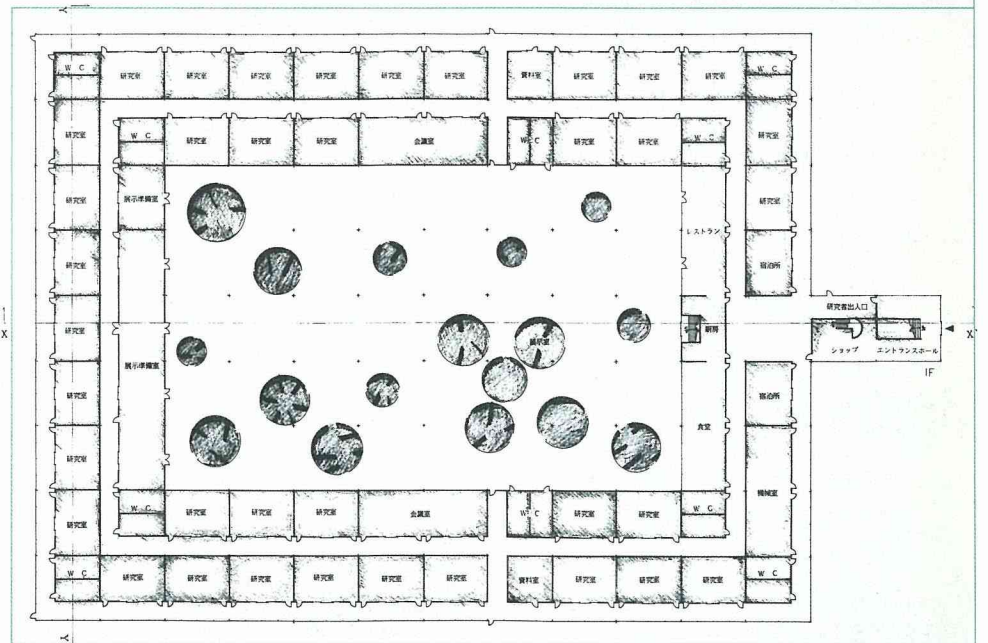
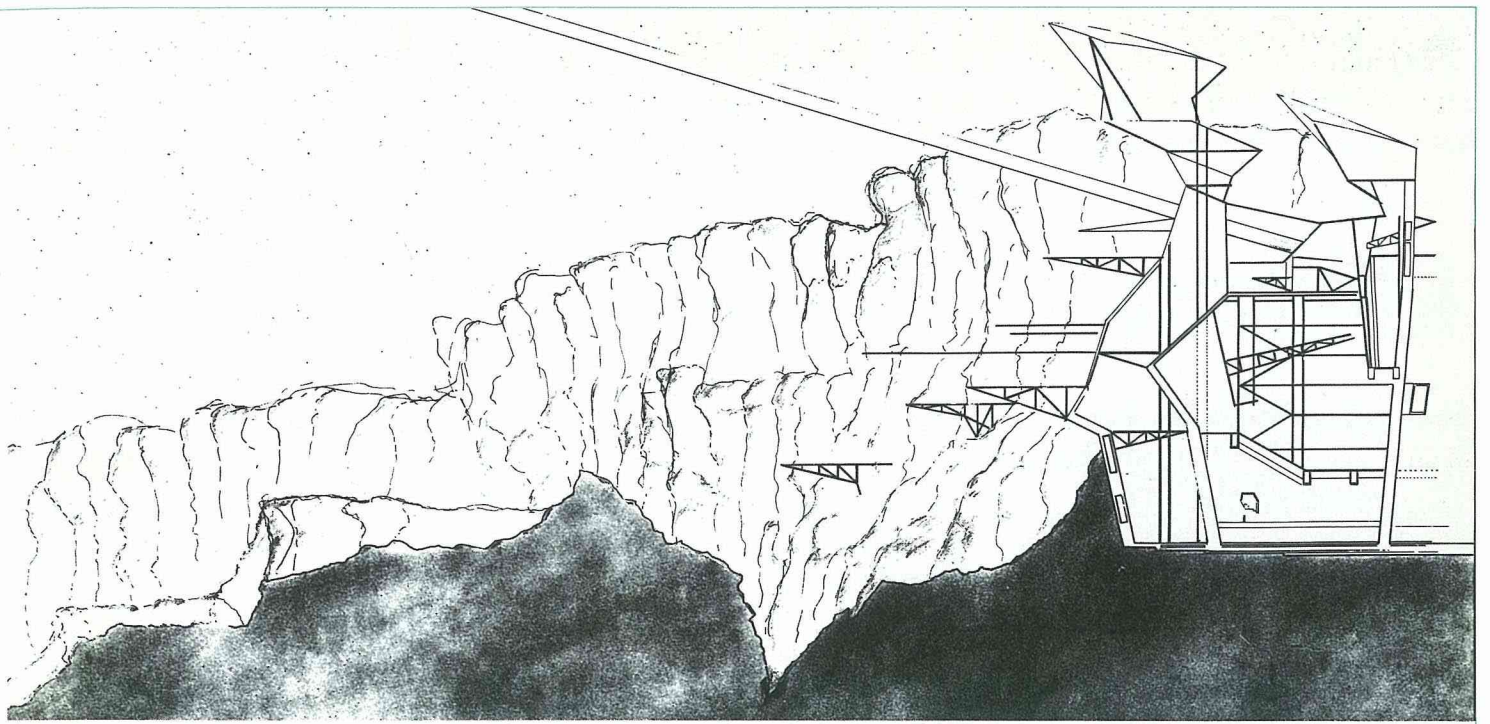
## 【木下芳郎 案】

「都市は個人それぞれの中に存在する」という認識は豊かな想像力を感じさせる。都市の大小を都市の構成要素の関係の複雑さの度合いで測るという考え方も経済人類学的な観点からみれば正しいだろう。都市の諸機関の関係の複雑度をゲーム感覚でプレゼンテーションするという観測所は批判的表現か。

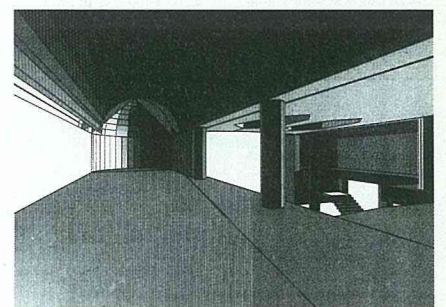
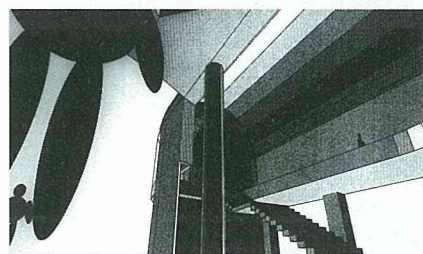
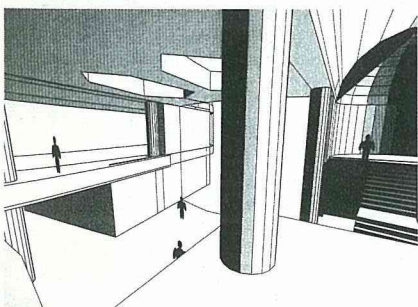
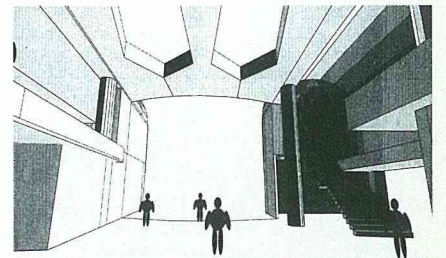
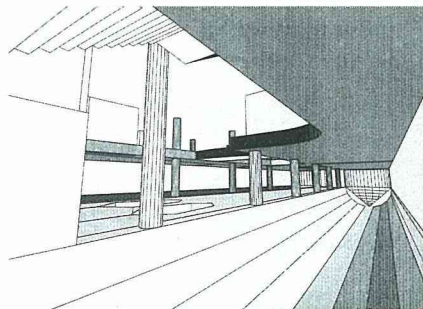
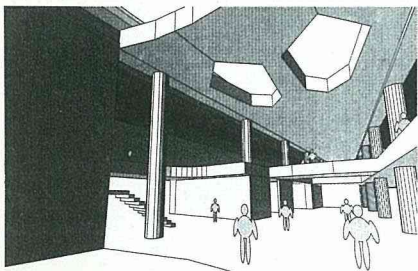
## 【村田 淳 案】

「情報のベクトルが変化する臨界域」を織りあげていった提案は、概念的には理解できるし、情報解析等には有効な発想だろう。また観測所が新しい情報媒体を開発する研究機関であるという設定はよいが、その空間形態はもっと概念的なほうが説得力がでる。





仲	梅野
	木下
吉田	村田



# 1993年度卒業設計製図優秀作品より

This year's diploma design thesis

## 講評

教授 志水英樹

ここに掲載する8作品は、1993年度卒業制作の中から優秀作品として選ばれたものである。このうち、繁昌朗君と永美樹君の作品、2点が今年度の大岡山賞として表彰された。

繁昌作品は駅のもっとも基本的な乗換機能に対して、傾斜ホームを立体的に交差させることにより、階段なしですべての乗換行動を可能にするという提案である。

駅舎を含む複合建築の提案は、毎年もっとも数多くでるテーマであるが、多くは駅舎そのものの機能は従来型を踏襲して、複合する他の機能に対して、さまざまな提案がなされてきた。しかし、本作品は駅舎のもっとも基本的な機能そのものに対する提案であるところ

に独自性がある。駅舎の形態的なユニークさが、この機能的提案を直接反映しているところが強い。しかし周辺の街並みとの関連や、ホームからみえる沿線随一の多摩川の眺望に対する配慮が希薄ではないかというコメントもあった。またホームの傾斜が電車の発着や歩行者の乗換行動に対して、リアリティーがどのくらいあるかという、課題が残されている。しかしその提案の新鮮さを評価したい。

次いで永作品は、神宮外苑の国立競技場と都立体育館とに挟まれた空地に、大きなアーチと逆アーチとの構成による土木的なスケールの大空間の中に、建築的なスケールのさまざまな機能をちりばめて、楽しい雰囲気をつくりだすことに成功している。この大空間は2つの巨大体育施設をつなぎとめるスケールをもつ空間であると共に、自由なプログラ

ムを包含するための舞台装置として存在理由がある。しかしいっぽう、2つの巨大な体育施設からどっと吐き出される群衆をうけとめるためには、空地のままの方がいいのではないかという指摘もあった。また、それらの施設が使われていない場合の空白感から、その場を何とかしたいという気持ちも理解できるというジレンマに対して議論が残るところである。

いずれにせよ上記2作品は明確な主張と提案が、水準以上の表現力をもって発表されている点で、他より高く評価されたのである。

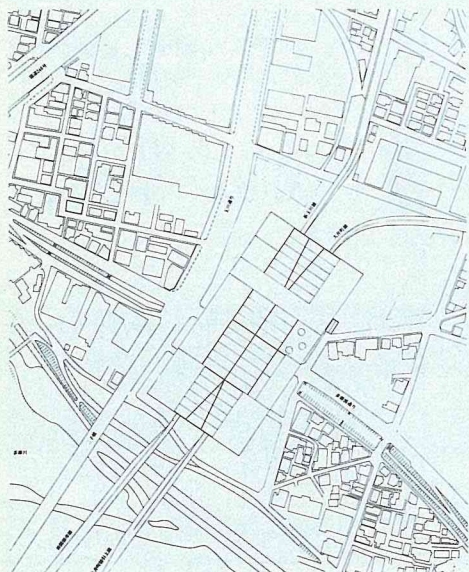
他の6作品はそれぞれ力作であるが、中でも加藤園子君の「杉並地域区民センター」は、既存のゴミ処理施設とその複合化というユニークな状況を設定しながら、そのおもしろさを表現まで高められなかったことが惜しまれる。

## 超乗換駅

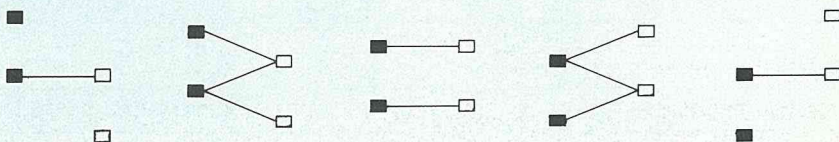
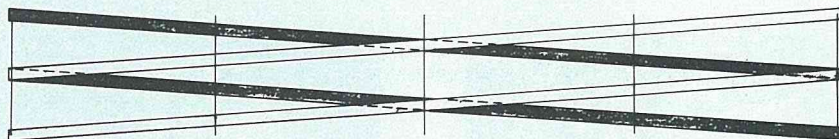
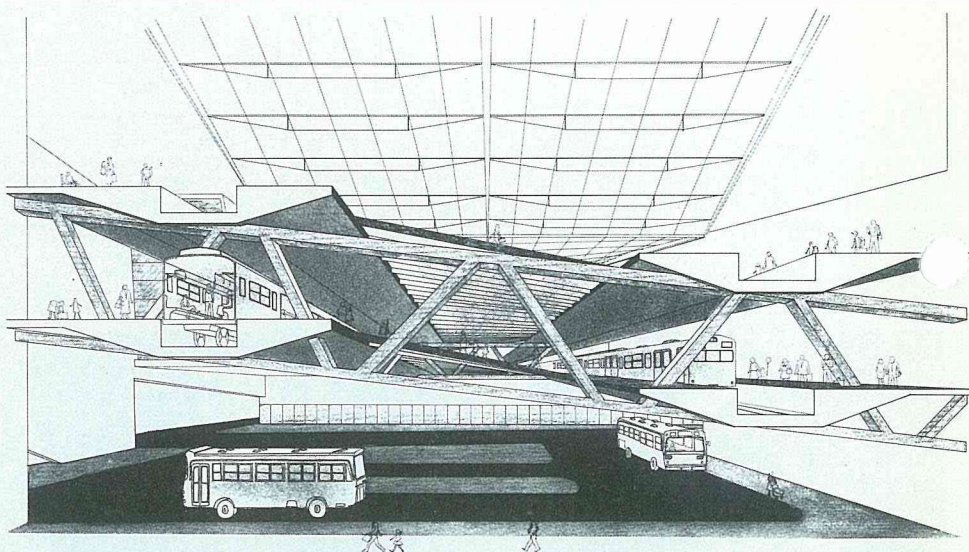
Hyper Junction

繁昌 朗

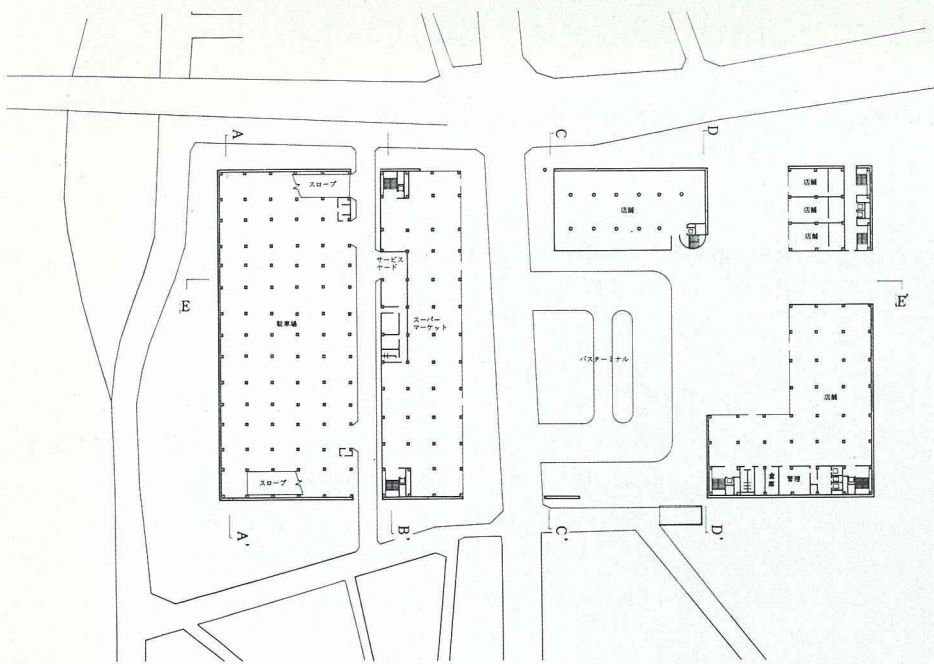
Akira Hanjo



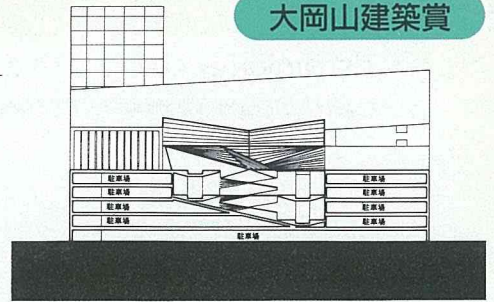
site plan



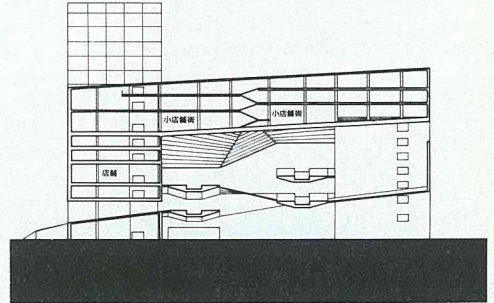
concept



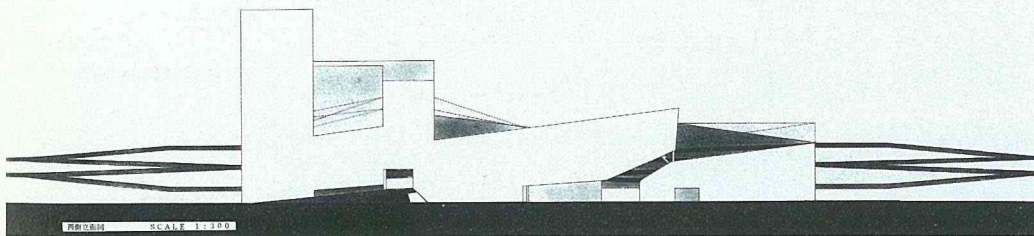
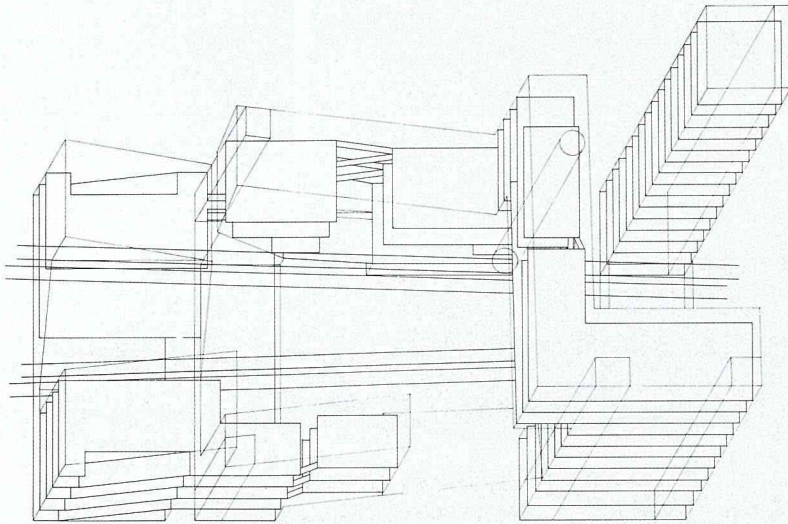
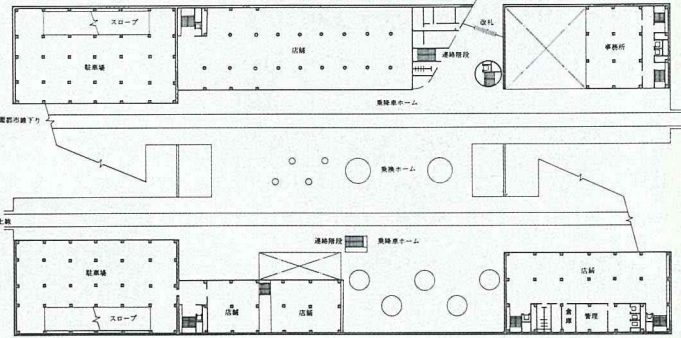
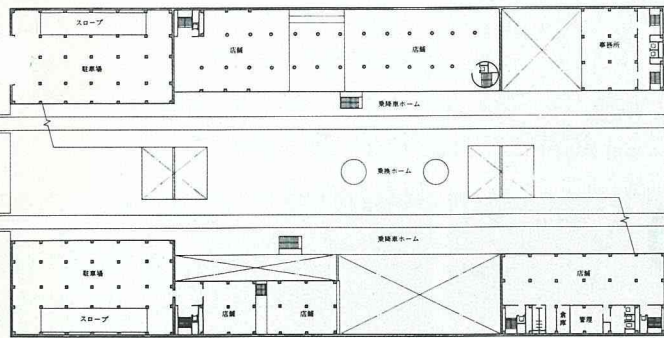
1st floor



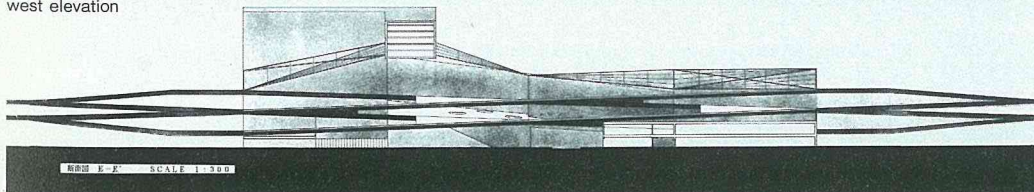
section A-A'



section D-D'



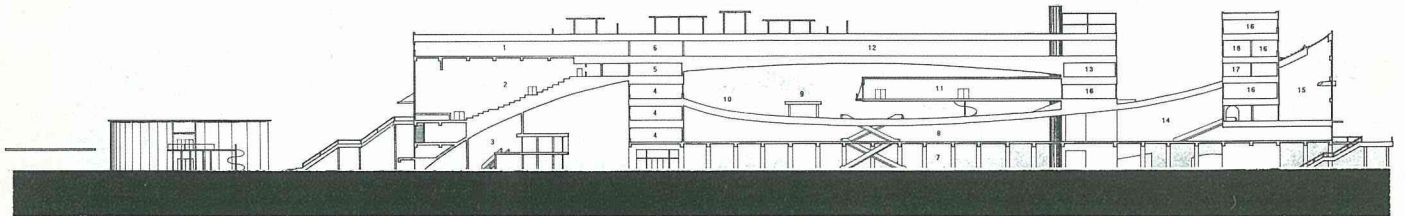
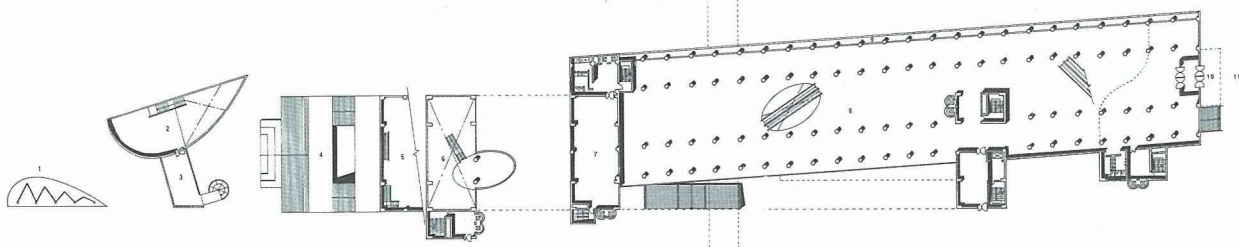
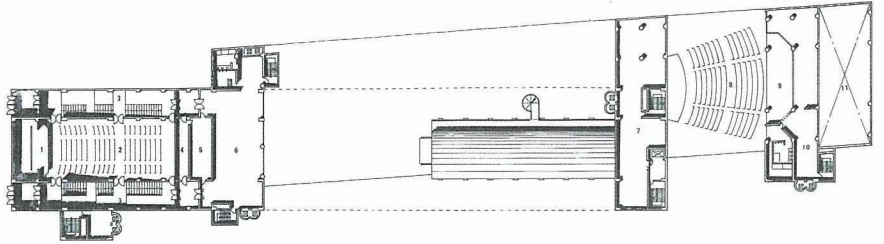
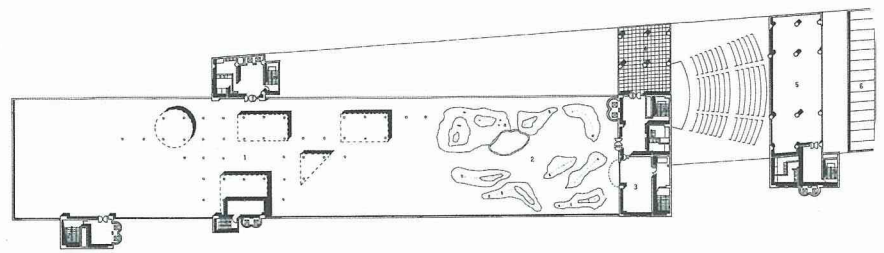
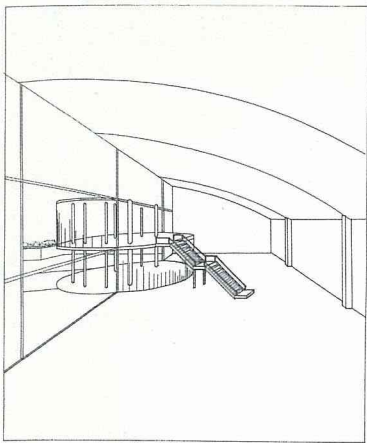
west elevation



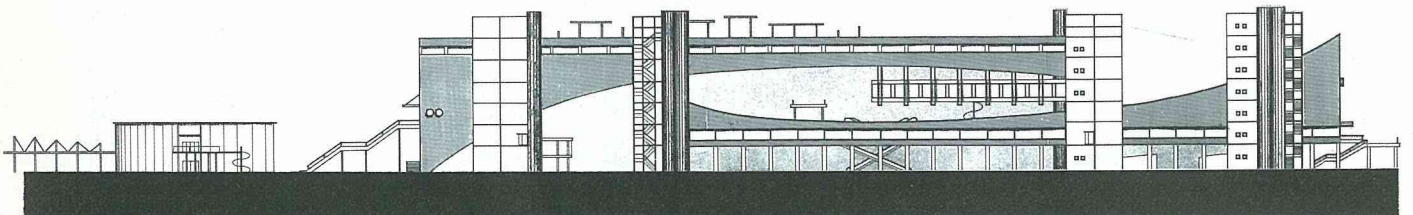
section E-E'

■駅は常に人の動きがある場所で、動線的な性格がその構成を左右する建築である。また、従来の郊外における駅周辺の再開発は、駅ビルによる画一的なものであり、沿線の各駅に同じような風景をつくりだしている。この計画では「乗り換えのための新しいプラットフォームの形式」を提案し、それをもとに建築全体の形態をつくることによって従来の画一的な再開発からの脱却を目指した。■二子玉川園駅は東急田園都市線と新玉川線、大井町線の結節点にあり、乗り換えによる混雑が激しい。そこで、4本の線路を2本ずつ上下に重ね、ねじれの位置におくことによって、動線を特定の通路(線)に集約させずにプラットフォーム(面)上ですべての乗り換えができるようにした。プラットフォームは建築を貫くうねった面となり、それを支えるフレームを介してこの建築の形態が作りだされている。店舗などはプラットフォームに絡みつく1本のボリュームとして表現され、この建築の一体感をより強めている。

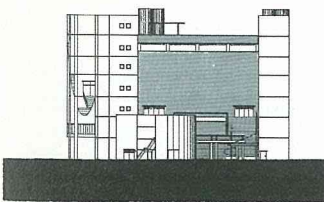




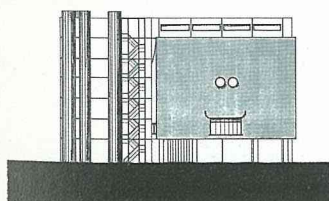
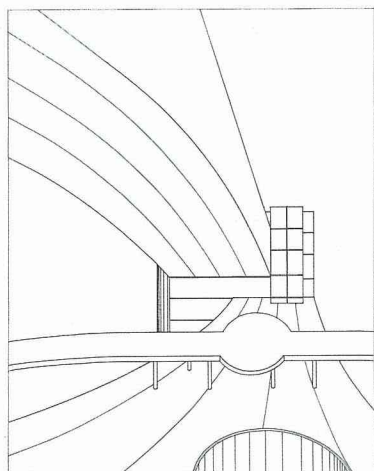
section



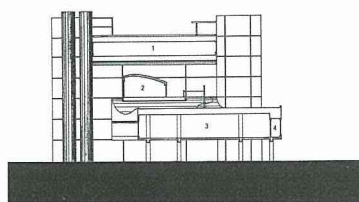
west elevation



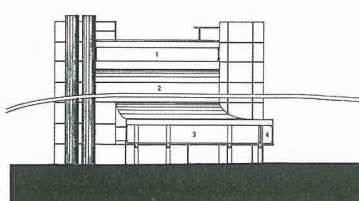
south elevation



north elevation



section



section

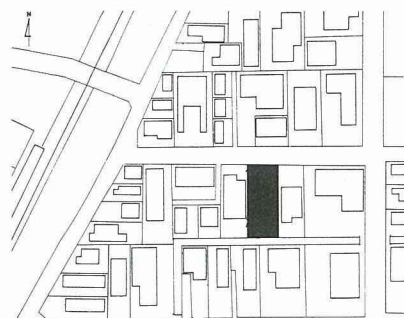
■都心において、さまざまなスポーツ競技で賑わう外苑。国立競技場と東京体育館にはさまれたこの地に、地域全体のゲートの存在となるような複合施設を計画した。■全体は、シアター、ギャラリーなどからなる上下のアーチと、それらを支える4本のコア、さらに、これら2つのアーチによって形成される3つの外部空間から構成される。これらの外部空間は、建築物の断面によって切り取られた広場であり、ここに建物(塊)と外部空間(空)の新しい関係を求めた。単に建物と広場といった対比ではなく、外部空間が連続しながら相互に刺激しあい、多様な仕掛けをもった公園となり広場となって、地域に交流のステージを提供する。■建築自身のもつ視覚的な力というものを信じ、また、建築は記憶に残る形態をもつべきだ、という思いを表現した。

# 対話

Conversation

対話  
～住宅の中での過去との対話の空間～

空中へ  
地中へ  
家の中心へ

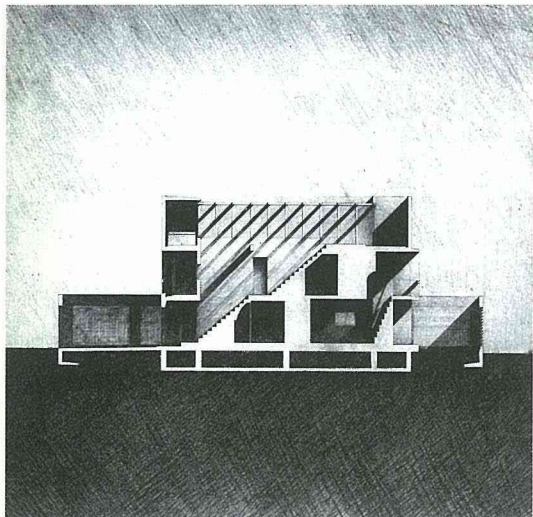


site plan

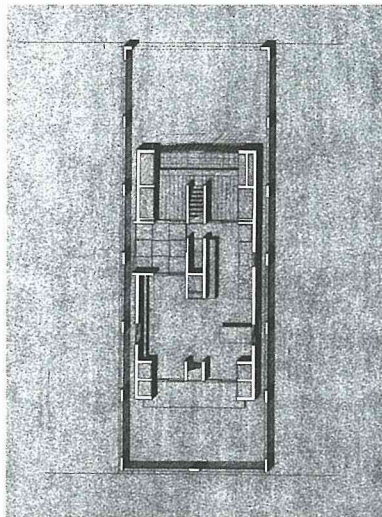
## 稲場政人

Masato Inaba

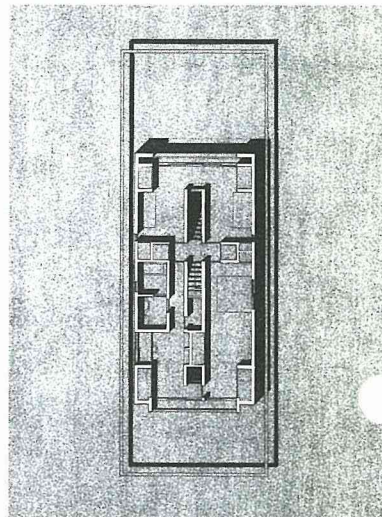
▼空中へ



section

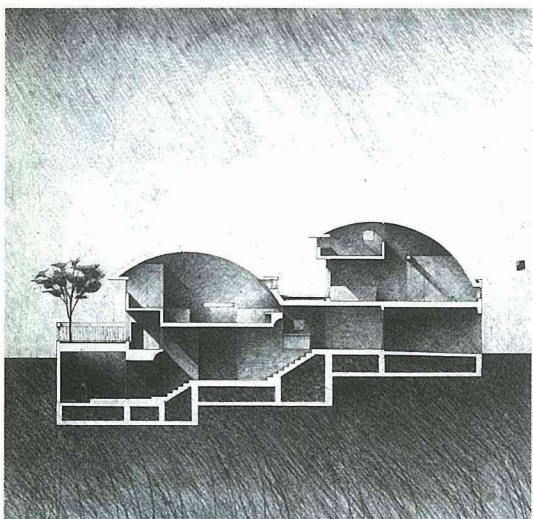


1st floor

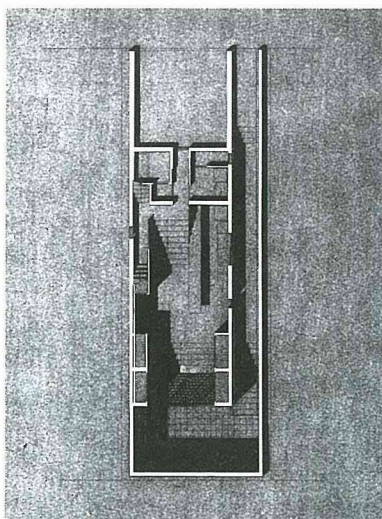


2nd floor

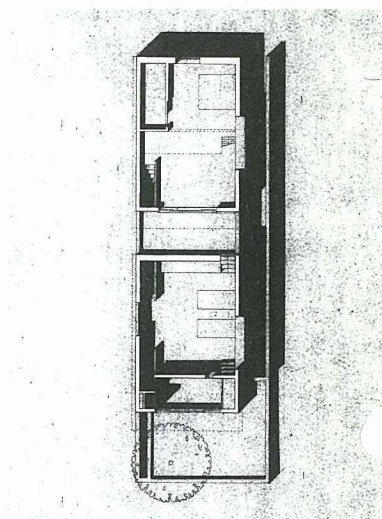
▼地中へ



section

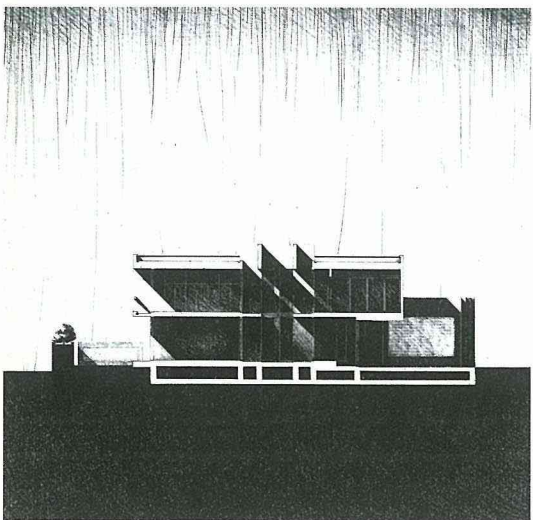


basement~1st floor

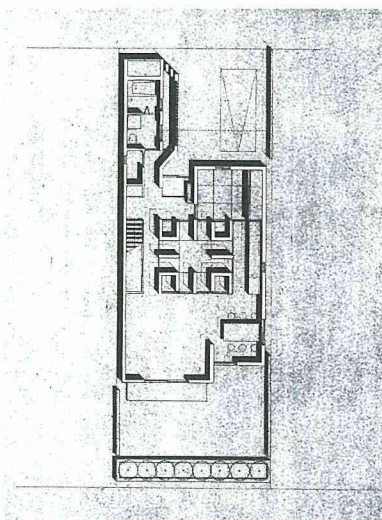


1st~2nd floor

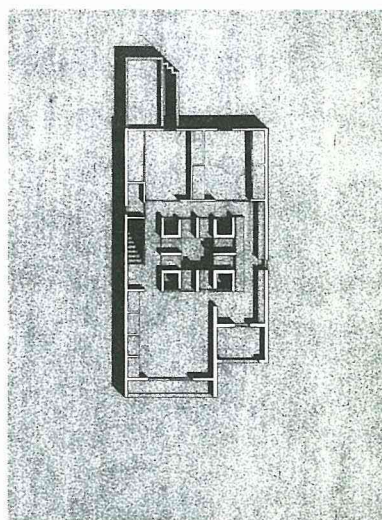
▼家の中心へ



section



1st floor

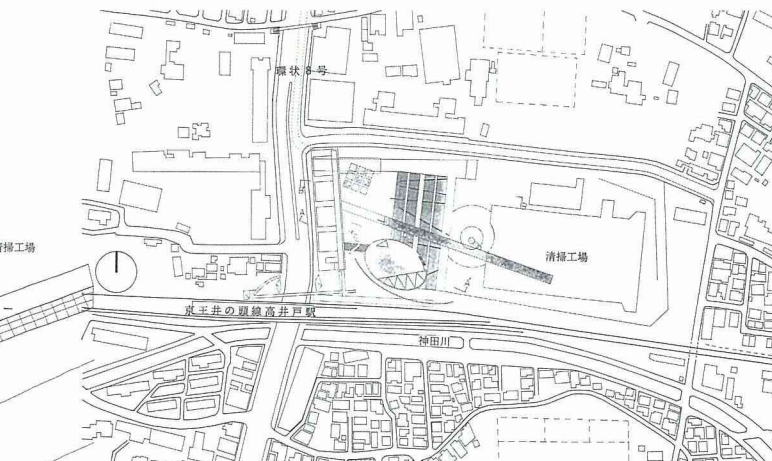
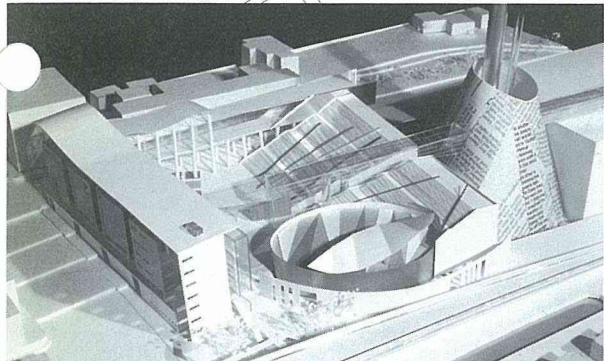
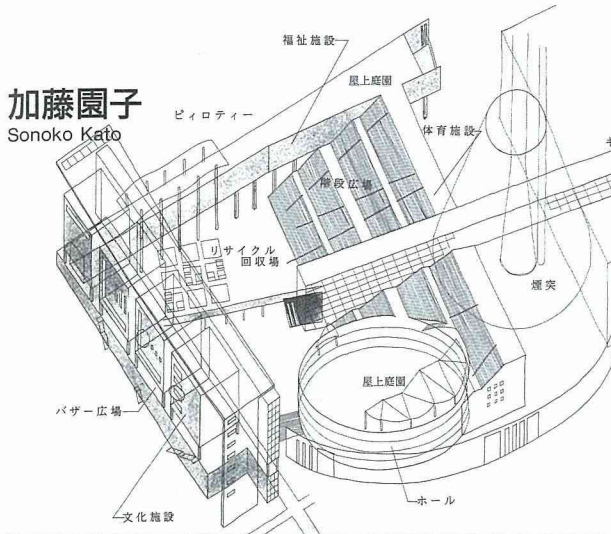


2nd floor

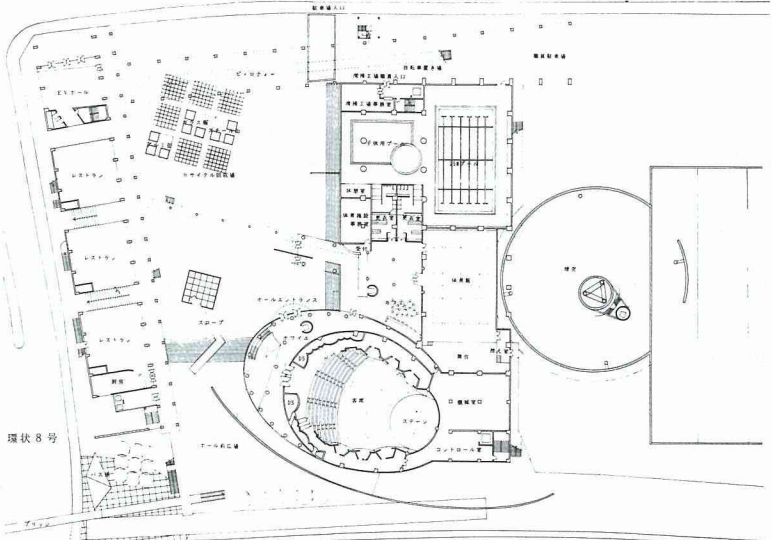
# 杉並地域区民センター

Suginami Ward Citizen Center

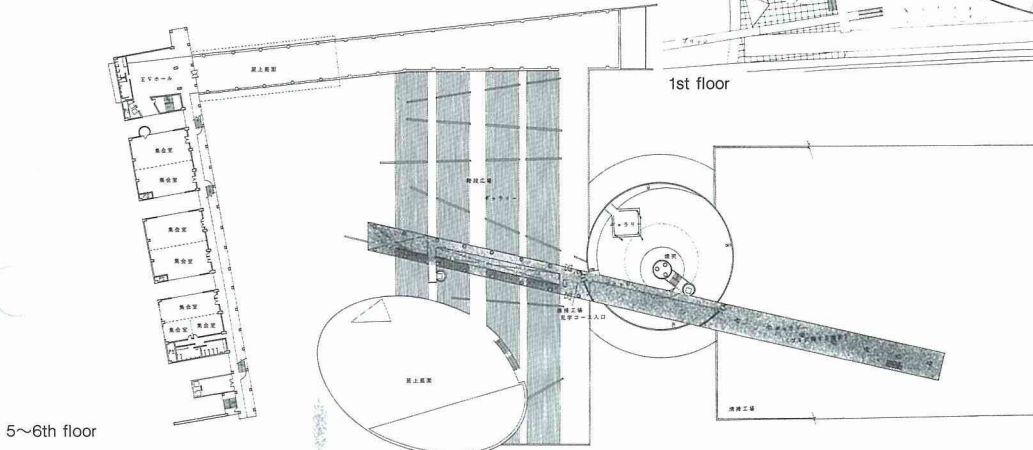
加藤園子  
Sonoko Kato



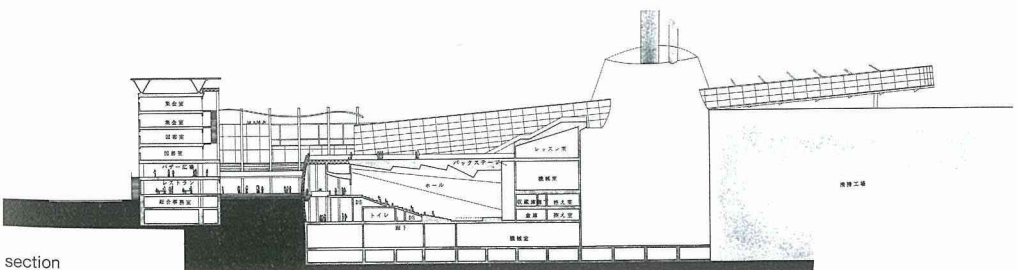
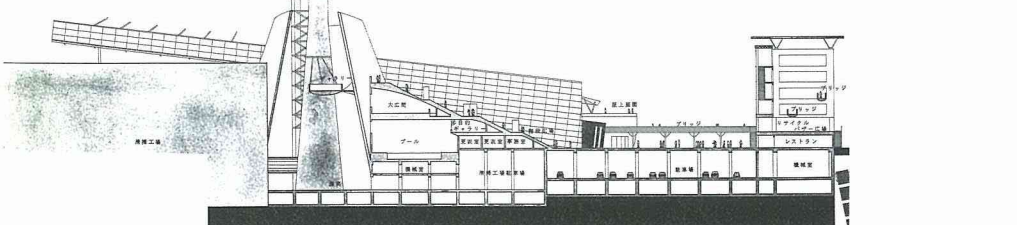
site plan



1st floor



5~6th floor



section

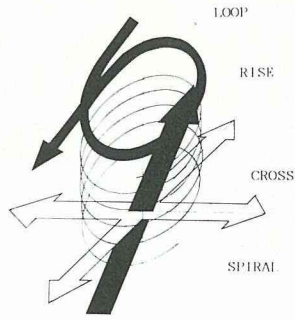
■住宅地に突如として現れる煙突，清掃工場。住宅地に不釣り合いのこの施設は，不思議と人びとからあまり意識されない，意識したくない施設となっている。■施設を計画するにあたって，あえて煙突というシンボルを中心に，さまざまなみえ方を検討した。まず，駅からアプローチする人びとの視線を重要と考え，環八沿いのファサードは，中庭内部の施設を感じられるよう，ボリュームを4つに分け，さらに，ホール上部の庭園，階段広場を見ることができる配置とした。そして，階段広場を貫通するガラスの通路は，煙突への視線をよび起こす。中庭では上部に視線をやると，階段広場により煙突を意識させるために誇張された表現の円錐が現れる。また，広場にはリサイクル活動を行う場もある。■この施設に集まるさまざまな人びとが，「この場所が，人間のつくりだしたゴミの集まる場」であることを意識するような場となることを希望している。

# Urban Junction

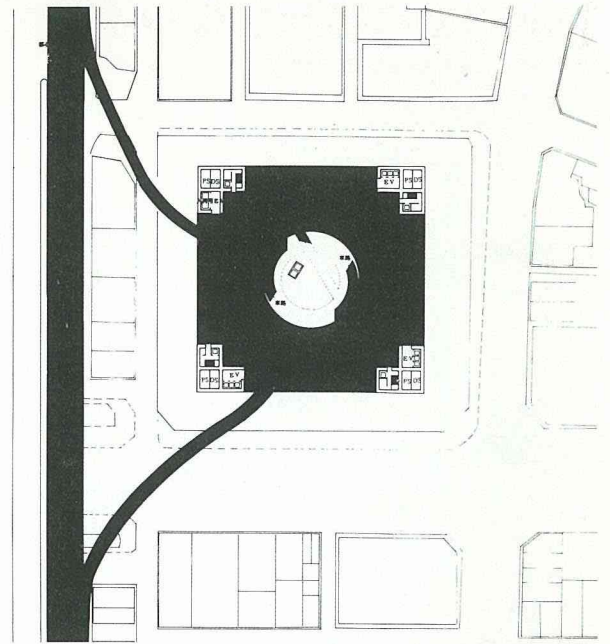
兜町ハイブリッドビルディング

迫 慶一郎

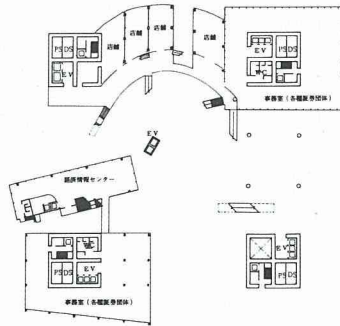
Keiichiro Sako



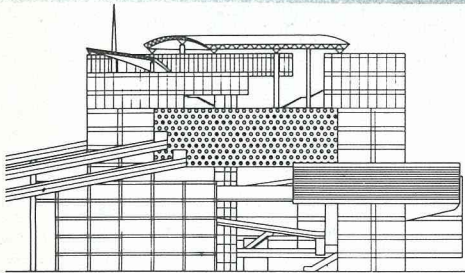
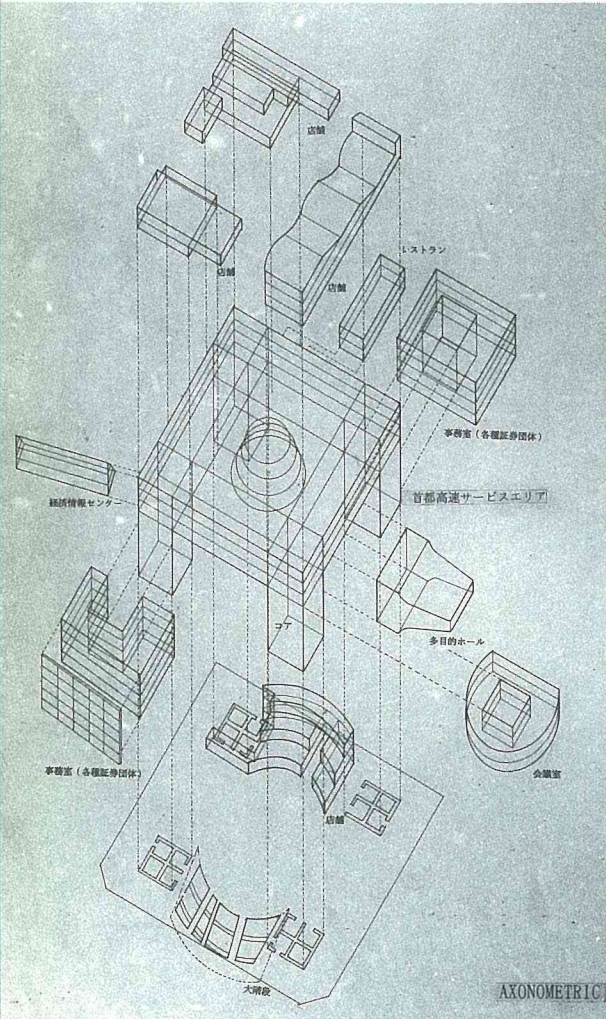
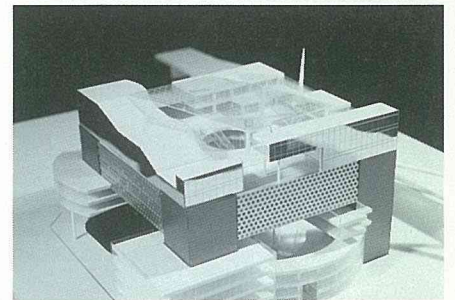
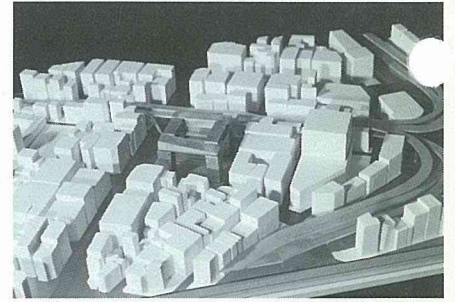
地下鉄 RISE  
 高架道 CROSS  
 高速道路 LOOP  
 螺旋 SPIRAL



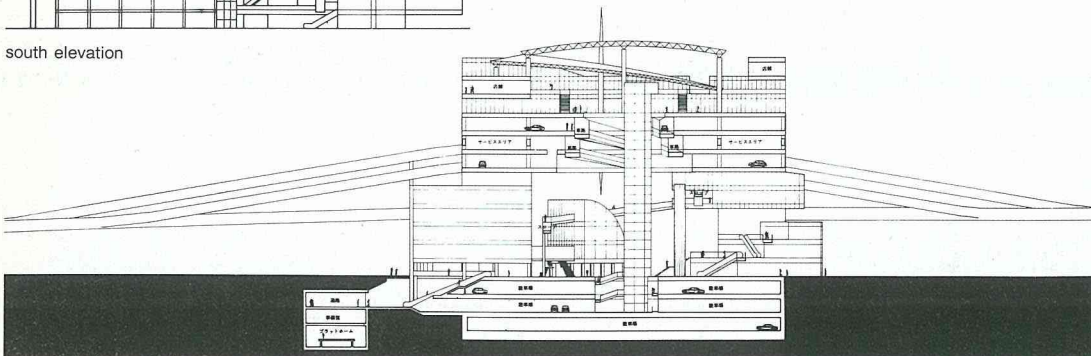
7th floor



2nd floor



south elevation



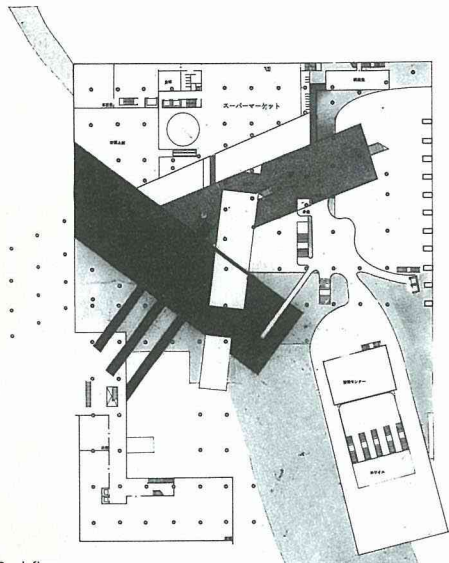
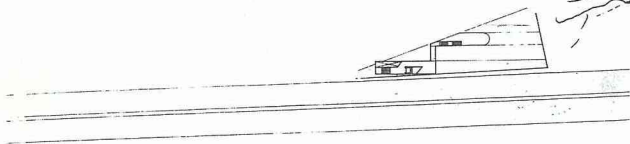
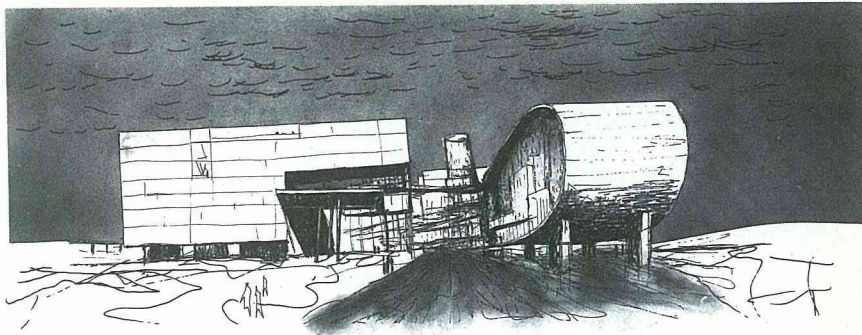
Y-Y' section

■人やものの集中が続く都市において、それらをさばく交通網は地下鉄や高架道路などの立体的拡大により対応しているが、それらは単にレイヤーされていくだけで相互の積極的関与は少ない。URBAN JUNCTIONは層状の構造である交通網を、それらの結節点において縦方向に結び付ける。地下鉄をRISE、道路をCROSS、高架道路をLOOPといったかたちで建物の中に取り込み、上下を貫くアトリウムとそこに展開されるSPIRALがそれらを統合する。■全体の構成は、まず首都高速のサービスエリアのポリウムを4本のコアが支える。その上に屋上庭園、その下のアトリウムに各機能空間が差し込まれたり、コアに取り付くように配置される。つまり地としてのアトリウムに図としての各機能がトポロジカルに配置され、本来の地と図の関係が逆転した空間が現象する。■都市交通の結節点は多く存在し、それらの統合がなされることにより新たな都市活動が誘発される。

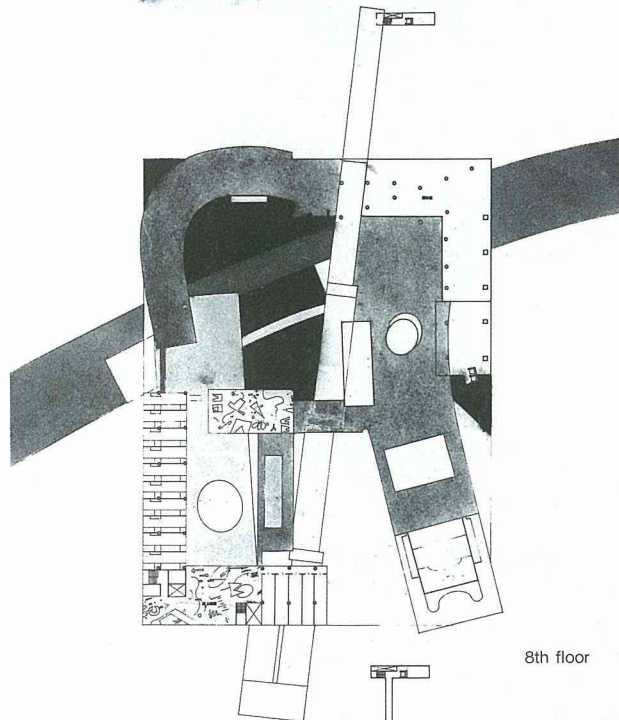
# ベッドタウンにおける駅舎環境の提案—北柏駅プロジェクト

Kitakashiwa Station: Proposal for a Dormitory Town

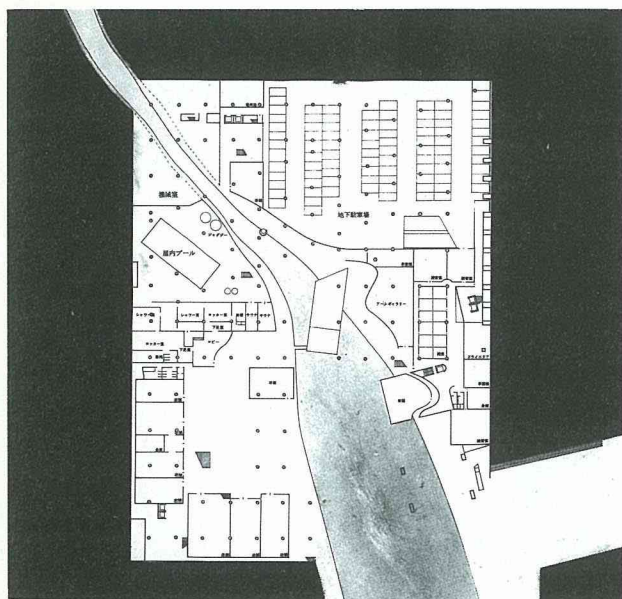
島 耕二  
Koji Shima



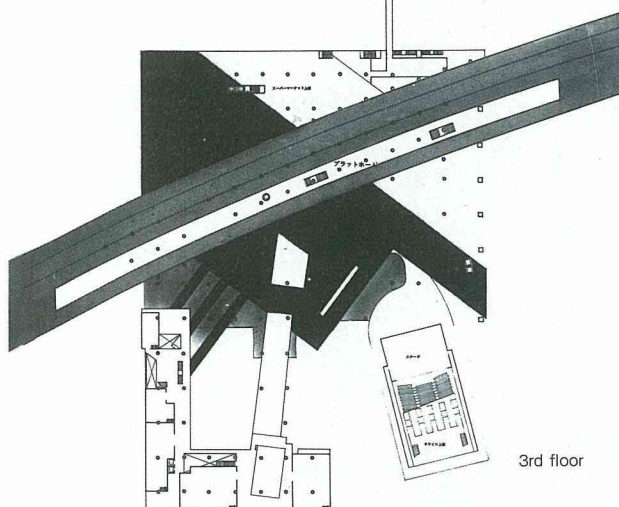
2nd floor



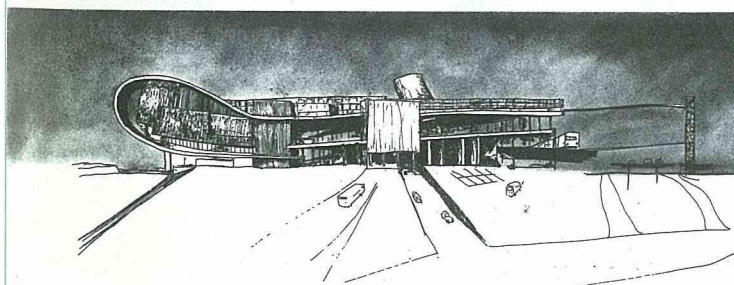
8th floor



basement floor



3rd floor



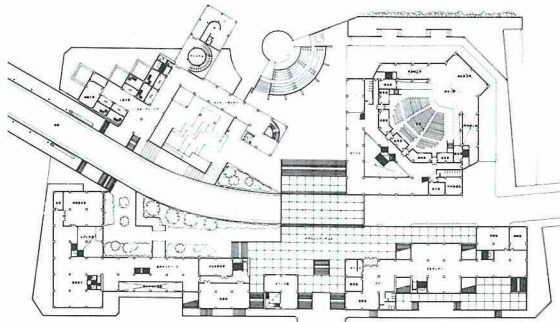
■一枚の板。真横から凝視し、ここは1本の線分だけであることを確認する。角を指で突き、ここはひとつの点であることを確認する。曲げる。S字曲線をふとつくってみる——発見、ただの偶然。折る。L字型、コの字型、口の字型……。直方体は6つの面から成ることを思い出し、そこに不便さがあったことをはじめて知る。■一枚のスラブ。上にのぼり、自分がいたはずの大地を見下ろす。下に落ち、昔物理で習ったコンデンサーを思いだす。端にぶら下

がり。懸垂運動を繰り返す。角隅に立ち、身体的感覚(または恐怖)と対角線の長さを同時に感じる。そして、スラブの中央は決して歩かない。(ここに光砲をつけよう!) ■「リアリティーのある空間」を掲げていたが、建築によって、自由な空気の吹くところをつくらうとしていたのか、建築本来のもつ力、場所性、拘束力を示そうとしたのかよくわからなくなったが、その矛盾した両方を内包したモノと考えている。これを否定はしない。

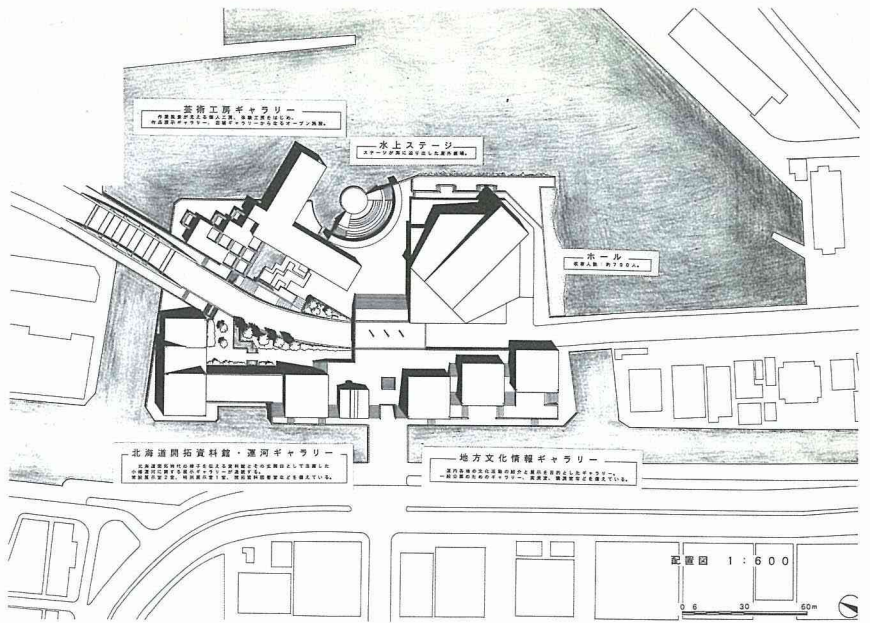
# 運河の街—伝統と創造

Waterway Town: Tradition and Creative Innovation

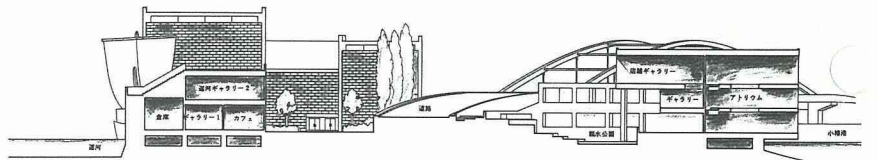
林 宏規  
Hiroki Hayashi



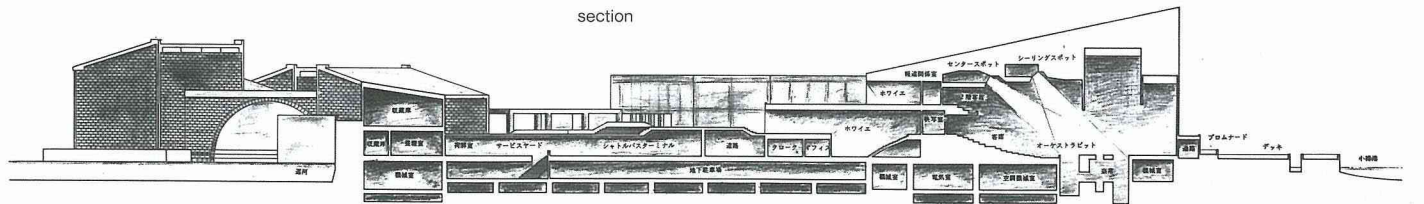
2nd floor



site plan



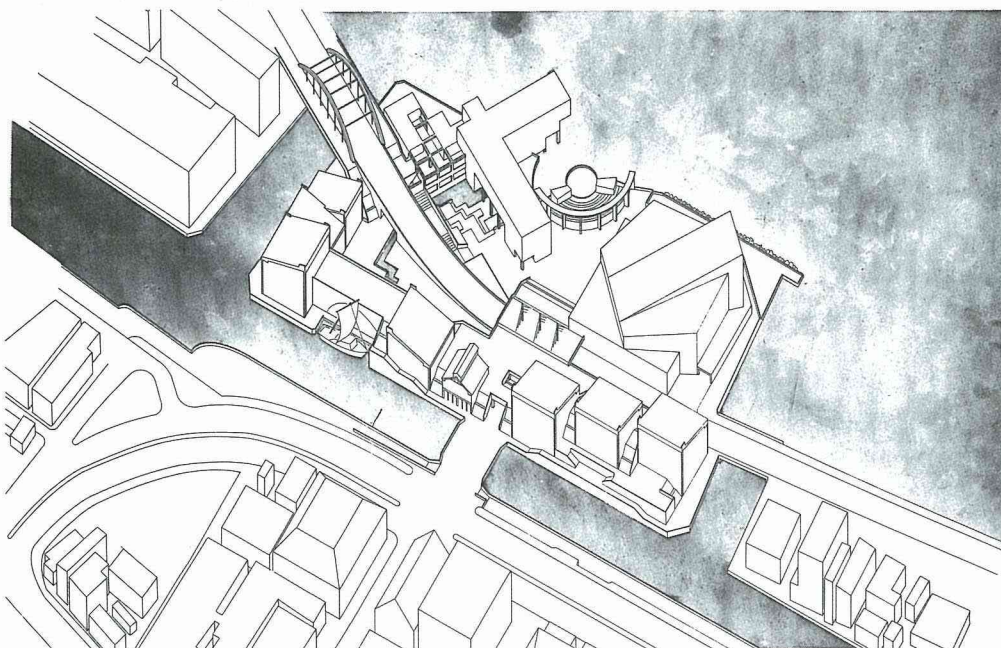
section



section



west elevation



■伝統は建築に息づき、その街を形づくる。歴史は景観に投影され、静かにヒトに伝えていく。石造の倉庫群がたたずむ街並みの連続性の喪失、街の活気を映してきた運河の水面は今何を語ろうとしているのだろうか……。■現在、観光地として機能する小樽運河周辺に、修景計画の支援を兼ねて歴史文化保全に焦点をあてた「伝承空間」、さらに新産業を生み出し今後の街づくりの原動力となる「創造空間」という2つのテーマをもつ文化施設を計画する。■河岸に連なる倉庫のモチーフは歴史の重みをメタファーにヒトを自然と内なる空間へと誘い、いっぽうで硝子、コンクリートが織り成す日本海に張った姿は、弛まぬ荒波が砕け散る断崖絶壁の雄大な海岸線を物語る。■互いに対極的な2つの顔をもつ「街」の心は、訪れるヒトの心に共生の精神を訴え、変わりゆく運河の水面に孤独な姿を映しつづけるのだろうか……。■——ここは北国の歴史の入り口、波濤の歌が聞こえる、北の都——



# 建築らしい建築

Architectural Architecture

非常勤講師

半澤重信

Shigenobu Hanzawa, Lecturer

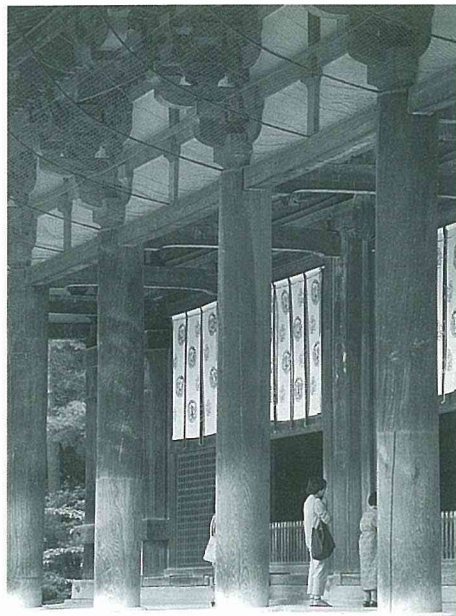
話の1：わが国では、古来古建築の修理において、旧材の一部を切除し別材を新補する場合、その断面を既存材の断面より必ず大きくとる。たとえば既存の柱に根接ぎあるいは埋木をする場合、現実の必要な材の太さとか、埋めるべき穴の大きさ・深さよりも、取り替え材・新補材の寸法を意識的に大きくして、両材の接触部分の表面に必ず目視できる段違いをつくって仕上げるのである。通常、この段違いは数mm以上とする。だから竣工してみると、素人の一寸見には意匠的に決して美しくないばかりか、施工した職人の寸法取りの誤り、つまり、不注意な目違いであるかのようにさえ見られることが多い。けれどもなぜ、先人はあえてこのような段違いをつくる技法を私たちに伝えてきたのだろうか。

話の2：私たちに遺されてきた伝統的な建物のひとつにくらがある。物を保存することを目的につくられてきた建物だが、同じ目的のものであっても、粗末な薄い板を張った小屋だとか、それに如何に入念にペンキを塗ったり、高級なタイルを貼っても、あるいは内部にどんなに立派な布を貼ったとしても、私たちはそれをくらはとはよばない。何故なのか。

話の3：わが国では、100年を経てなお使用されている住宅は、国全体の数からみるとほとんどないといってよい。これは世界の文明先進諸国のそれと較べてみても極端に少ない。どうしてか。

これらの話の解はまったく同じである。すなわち、私たちの先祖は、建物のあるべき姿をまったくこの現在に求めず、次世代以降の判断に任せて、そこから生きる幸いを得しめようとした。このことが最大の理由である。

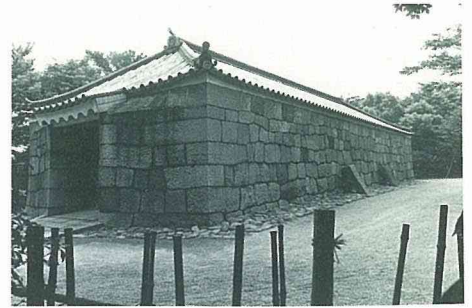
実際、私たちの先祖は、建物をその目的に



①

よって、現在のみの満足に留めるものと、後世に伝承すべきものとを厳密にわけて扱ってきた。たとえば住まい。人生50年、どうせ現世は文字どおりの浮き世。だからそれは最小限の仮寓に留めて、その間だけ用を足らせばよい。また、衣・食・住という言葉の最後に“住”があるように、いつの世にあっても住まいを確保することは、人の生活にとって最終的な大事業だったから、住居には恬淡として、今の瞬間に幸いを求めざるをえなかったのかもしれない。ところがである。わが先人たちは苦屋の“住”を甘んずる代わりに資を貯え、それを後世に託して、必ずや後の時代の人びとが享受しうであらう利益を夢見てきたのであった。そこで彼らは必死になって遺すべき建物を選択し、諸々の憶いを込めて今に伝えてくれたのである。

古来わが国の建造物は、150年から200年に1度半解体修理を行い、あるいは200年から300年に1度は建物全体を取り解き、組み立て直す。その間に小修理がこまめに行われる。このようにして、1000年余前の建物が30棟以上も今に遺されてきたのだ。上記の目違い寸法も、われわれの先祖はこの周期と事実を意識下におき、古材の現状を勘案して、割り出してきたのである。当分の間は、この根継ぎ・埋木の仕上げは見苦しいが、何十年かたった後には新旧の差は消え失せ、両材渾然として美しい姿を見せるはずである。職人はその姿を心に描き、完璧な意匠の建築として子孫に遺そうとした。いつの日か、人びとが得る幸いを最大ならしめるために、今現在受け入れられる限度ぎりぎりに、大きく段差をつけたのである。それは己が選んだ後世に遺すべき建物を誇るからこそ、いっそうそこに新しい生命を吹き込もうとしたのに他あるまい。



②



③

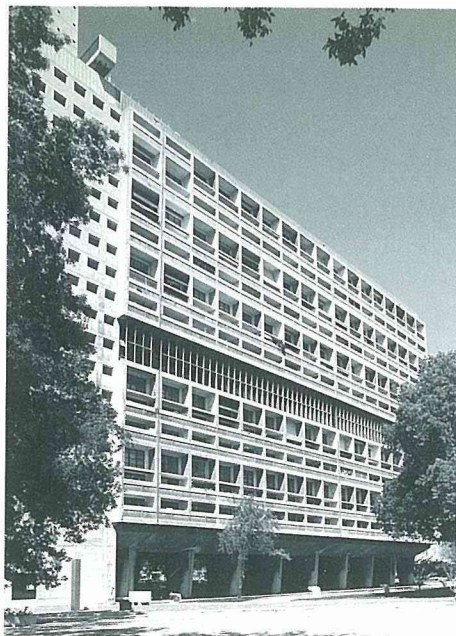
くらの話も同工異曲である。この建物は人間の最終的本能である物欲を満足させるために創りだされてきたのだが、建築意匠からみれば、日本のくらほど機能即意匠の建物はない。つまり、物の保存のためにくらは建築としてどうあらねばならないか、先人は経験と改良を重ね合わせて、かなり正確にそのあるべき姿をつかんできたのであった。そして、その尺度に適合しなければくらは認めなかったのである。先祖伝来の美術品を保存・伝世させるといった高度な機能をもつくらほど、すぐれた意匠をもつにいたった由縁である。それは日本の気候・風土と、日本人の美的感覚を下敷きとしているから、あまねく日本人の心の奥底にもつ共通の形に収斂していったのは当然であったろう。そして常に、およぶかぎりの知恵によって改良が加えられて今日におよんだから、いつの時代にあってもっとも現代的であり、次世代に対して挑発するものでもあった。現在いまだにくら内部の物について、保存の方法が科学的に確定していないのに、光を断ち、収納物周辺の湿度の急変を抑え、比較的低温に保つ、という空気と物との間の極端に微量な温熱のやりとりを、この空間に創りだしている。まさに恐れ入る。収納物への憶いやりが自らの物欲と交錯して、いつのまにか次世代に遺す憶い、愛情へと転化した結果ついに取得しえた方法である、とでもいえるようか。

大阪で開催されたEXPO'70以来、筆者は日本人にとって、本当によい建築とは何か、と考えさせられることが次第に多くなってきた。たまたま国宝とか重要文化財といった日本の非常にすぐれた建造物に、日夜深くかかわってきたから、一段と強く感ずるのかもしれない。



④

- ①唐招提寺金堂（国宝）の柱：江戸時代および明治31年に解体され、数本の柱が接木された。100年近くあるいはそれ以上たった現在、旧材と新補材は同一の太さとなり美しさを増した。
- ②大阪城の焔硝蔵（重要文化財）：火薬庫であるが、かつては厚い土が全体に被されていた。
- ③近江八幡の西川甚五郎本店の蔵：標準規模の高級土蔵。防火帯をつくると同時に美しい町の景観をつくる。
- ④西伊豆依田家の列び蔵：烈しい風雨に対する工夫がある。
- ⑤コルビュジェ設計、マルセイユのユニテ・ド・アビタシオン（1946-52）



⑤

半澤重信  
Shigenobu Hanzawa



1930年 東京都生まれ。  
建築家。半澤重信研究室代表、千葉工業大学講師、日本建築学会建築博物館設立調査委員会委員。  
1956年 東京工業大学建築学科大学院修了。前文化庁文化財保護部主任文化財調査官（91.3まで）  
主な作品：国立近代美術館工芸館、国立劇場・国立能楽堂（基本計画・監修）、The House of Japan (N.Y.)、中尊寺金色堂（国宝）文化財保存・防災施設  
主な著作：『博物館建築—博物館・美術館・資料館の空間計画』、『歴史民俗資料館』

い。近年、特に意匠に現れる建築に対する考え方が、博覧会建築のみに通用するようなものになりながら、一般の建築の設計にまで、まかり通るようになったことに危惧を抱かざるをえぬからである。EXPO'70はすでに20余年の昔になった。しかし、当時その人目を引くこと本位のイベント建築に、心をときめかした建築学徒や駆けだしの建築家の卵が、今やわが国では中堅である。ある程度名を出してきた建築家も数えるようになってきた。そのうちのいくばくかの者が、EXPOの影響あらわに自らの作品のみならずすべての建築に対して、博覧会建築—一時的な施設と恒久的な建築—特に公共建築のごとき一般的な建築との間の見境をなくし、その非に気がつかぬまま、不勉強の徒をますます蝕み続けている。このことの重大性を慮るのである。この見<sup>み</sup>なしの意匠はたちまちにして次の建築世代に<sup>へ</sup>伝播し、当然、浮薄な市民の喝采を受ける。しかもその回復は非常に遅い。かつ、心ある市民と真摯な建築家との間にも亀裂を生む危険性をはらませる。とにかく根本的に、刹那的な目先のみに留めるべき建築と、将来遺さねばならぬ建築の、評価のできる見識、本当によい建築とは何か、を見定める目を建築家および建築に身をおこうとする者は自ら養うことが緊要である。そしてこのことを的確に判断して、建築らしい建築を望む市民が急増していることに自ら気づかなくてはならない。特に近來、そのような市民の増加は瞠<sup>とん</sup>目するばかりなのだ。

コルビュジェの作品にマルセイユのアビタシオンがある。日本の建築界は彼を近代建築の神のごとくに崇めるが、この建築の個々の住居の詳細をよく読み、現地に行ってもみたまえ。築後40年、今なおわれわれはこれを果

たして住める空間といえるか、確かに現住人もそういう。しかし、当然時代の移り変わりによってもさらに住み難さは増すだろうが、ほとんどの人たちは引越す意志はなさそうである。

同じ彼の作品で上野公園の中に、国立西洋美術館がある。第2次大戦によって消沈した国民のために、当時の吉田茂首相が在仏松方コレクションを返還してもらう条件として、コルビュジェに設計を依頼し、昭和34年(1959)に完成した。ところが彼は展示物よりも自分の建築を見よ！とあのような設計をしたと聞く。詳細図作成などに協力した日本の担当官は、彼の造形における自信と意志力の強さに辟易し通しだと筆者に語ったものだが、美術品の展示は、美術館であるにもかかわらず、限りなく不可能に近い。当然、見学者にとっても見にくいことはなほだしい。けれども館側には今なお、また、将来ともにこれを改修する意志はなさそうである。

ここに記したコルビュジェに関する2つの事例は、建築の作品は、制作者の意志の力の強靱さが作品にそれなりの寸法的調和をもったとき、設計上の不都合をも時に圧倒することを示している。同時に、被害を受けるはずの使用側側の感性までも末永く刺激して喜ばせ、かつ誇りまでもたせて、いっそう人びとを感激させ、作品に奉仕させることのあることを示す。日本でも建築らしい建築を望む市民が急増していると先に述べた。つまり、一般の市民が、建物によっては従来の使い勝手=経済性一辺倒から、同様なことを起こしえる時代に<sup>いよいよ</sup>愈々入って、建築そのものに心の問題を強く問うようになったといえよう。金銭の投じ方で直ちに効果をはかりうる経済活動と異なり、心の問題は抽象的にありすぎ、その効果

ははかり難い。それゆえ前者のいく百倍もの努力が建築家に要求されるわけである。しかし、完成した建築にもしもそれが明瞭に現れてくるならば、それは本当によい建築=建築らしい建築であると評価されるはずである。そこでの意匠は末代まで受け入れられるからである。冒頭に述べた、先人のわれわれに残された技法や物欲を象徴する<sup>く</sup>らの話も、実は同列のものであることを洞察されたい。

われわれの先祖は建築を、次世代に焦点を当てて考えるべきもの、と認識していた証左である。彼らは刹那に捨て去られる建物を自らの生との間で容認するいっぽう、明日の世代の幸いを願い、価値ある建物をみだして、必死に伝えてきた。その厳密なあり方を、今一度考える必要がありそうである。建築の外面に、競いあって今日的もの珍しさを飾りつけ誇ろうとするのは間違いである。ただし、建築を経済的効率や使用上の機能の面からのみ考えるに留めるべきものとすれば、肯定されてよいのかもしれない。しかし建築には生命がある。その生命の永からんことを希うならば、さらに、そこに接するあらゆる人の心を<sup>しゆうらん</sup>収攬するものを備えていなければならない。古今東西を通じての道理にすぎないことだが、私たちの先祖も当然のこととしてこの道理を伝えてきた。建築の良否の判断はこのことを体得しているか否かからはじまる。ところが現在、この当たり前のことを忘れ去っている建築家が多すぎるような気がする。

心ある諸賢にいっそうの、本当によい建築=建築らしい建築をつくる努力を望んでやまない。

# 地籍・人籍

Context/Client Interface

非常勤講師

## 林 雅子先生に聞く

Visiting Masako Hayashi, Lecturer



①

①福井県立生活学習館(1993年)の模型：多目的ホールという名の無目的な空間はつくらず、さまざまな活動が行える多目的スペースを設計のコンセプトとした最新作品。

②東京都太田記念館(1989年)：東京という地に建つ、中国人留学生のための家。「地籍・人籍」という設計作法のひとつの回答例としての作品。

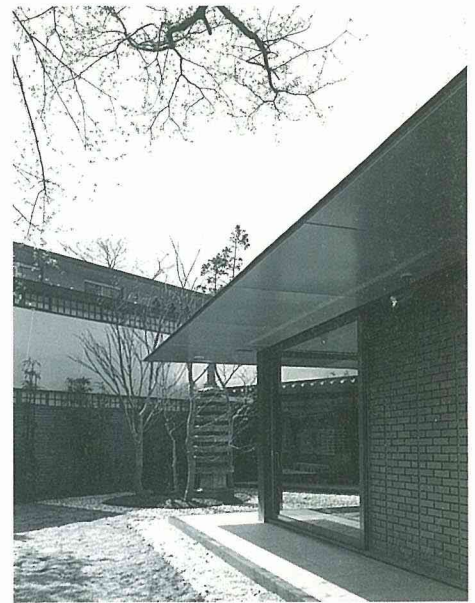


photo: Shinkenchiku

②

インタビューは神宮外苑の緑豊かな設計同人の事務所で行われた。

私たちの多岐にわたる質問に対し、プライベートな話題を交えながら、ご自分のお考えを明快に述べてくださった先生の言葉には、現場の経験に裏付けられた重みと謙虚さが感じられた。

先生の「地籍・人籍」という設計作法は、初期の作品から現在にいたるまで40余年の設計活動を通して変わることなく、住宅作品に限らずあらゆる建築作品の設計の中で活かされている。

そして、昨年もロス郊外でパイパーカブ機の操縦をされたという、常に新しいものに挑戦してゆく先生の積極的な姿勢が、よりよい建築を探求していくエネルギーになっていると感じられた。積極性の重要性を改めて感じたインタビューであった。

まず、建築に興味をもたれたきっかけについて教えてください。

あまりはっきりしたきっかけというのは、ありませんでした。

私は女子大の家政学部出身で、工学部建築学科ではありません。敗戦の年に大学に入学し、これからの行く末を考えたときに「手に職をつければ、家庭をもっても社会人として仕事が続けられる」と思ったわけです。当時の女性の仕事というのは、だいたい先生か医者だったのですが、どうも気がむかなくて、新制大学になると、新しい学科の中で嫌な科目を除き、かつ仕事につながれるのはどこかとみてみると、生活芸術学科が私に合っ

ていると思ったのです。

けれども女子大では100分の1程度の図面しか引いたことがなく、課題も2つしかありませんでした。ですから卒業しても建築を職業にしてゆく自信など全然ありませんでした。

清家研究室に在籍するきっかけは何だったのですか。

日本女子大4年の時、東工大清家先生の研究室で卒業研究の手伝いをしないかと誘われ、それを利用していただいて私の卒業論文も書きました。卒業したら清家研に来ないかといわれ、もう少し勉強しようと思ったのです。こうして無給助手として清家研に籍をおくことになりました。

清家研究室ではどのようなことを経験されましたか。

清家研では、掃除、お茶汲み、茶碗洗い、会計の帳簿つけをしながら、たまに仕事があると手伝いました。

当時は戦後で仕事はほとんどなかったのですが、清家研では、皆がそれぞれの仕事をもってきてはやっていました。一人が仕事をしていると、学生がよってたかって批評したり、何かができると皆で見学にいったものです。多分先生がご自分は気の進まない仕事を、学生に全部まかせてくださることもあり、篠原さんの第1作(久我山の家)もこうしてできたと記憶しています。

私も清家研に入った年に女子大時代の友人が金融公庫に当たり、手続き上図面が必要ということで設計を依頼されました。これが私の処女作の「Oさんの家」です。私は何もわからないまま現場と研究室の中で仕事を覚え、学ばせていただいたと思っています。

清家先生はいったん仕事を任せるとまったく手をだされませんでした。ただ「私ならこ

うするネ」と一言おっしゃられ、その一言にずいぶん悩んだものです。

研究室での経験は、どのようにいきま

すか。清家先生が常にいわれていたことは、「オリジナリティーを大切にしろ」ということでした。また、造形的なデザイン上の問題だけではなく、「なぜそれがそうあるべきか」という原点に立ち返って物事の本質から出発するという考え方を学びました。このことは本当に役立っています。

女性建築家ということでの苦労はありましたか。

女性だからということで、特に目立ったことはないですね。

女性が現場の気の荒い職人とやっていくのは大変でしょうともいわれますが、大工さんや職人さんというのは、一所懸命やっている相手とはすぐに打ち解けてくれるもので、立派な学識経験者よりも、手に職のある人とのほうがわかりあえるのです。

女性ならではの建築というものがあると思われませんか。

私の作品をみて「さすがに女性ならではのこまやかな心くばりが…」とおっしゃる方もいますが、それは先入観のためで、実際には名前を伏せられていたなら男性の作品か女性の作品かわからないと思います。男性でも細かなところまで非常に配慮が行き届く方はいくらでもいらっしゃいますね。

また戦後の建築史の中で、女性の作品はそれほど多くありませんから、女性作品の傾向といった評価が成立するのにも、まだ時間が必要ではないでしょうか。

設計同人の設立のきっかけや、仕事の分担などについて、お聞かせください。

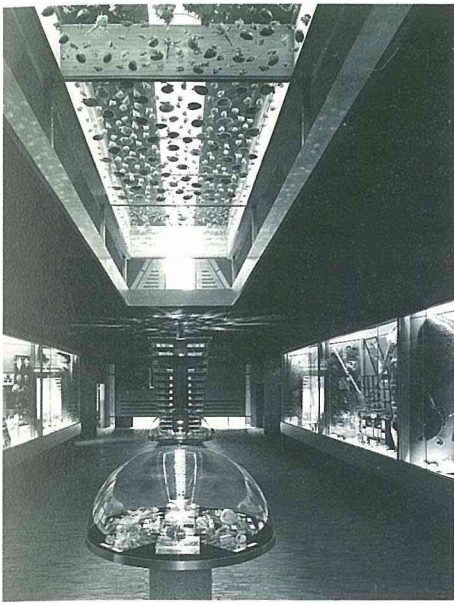


Photo: O.Murai

③

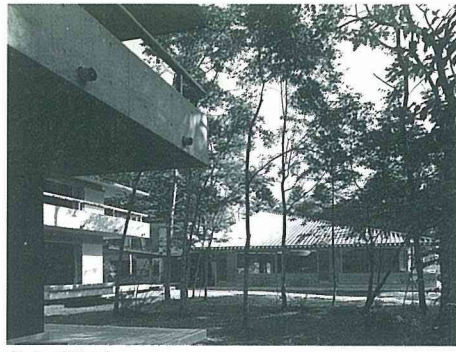


Photo: O.Murai

④



パイパー・カブ機を操縦する林先生(プロフィールはP18参照)

③海のギャラリー(1966年):薄くて色のきれいな貝殻を、海の中でのように見せることを意図して創られた展示スペース。「人籍」という作法を用いた空間づくりを端的に示している作品。

④日本女子大学軽井沢夏期寮(1979年):多数の住宅作品の設計の中で培われた暮らしのための空間づくりの手法を発揮した作品。

インタビュアー:

篠直人 Naohito Shino (M1)

松枝 碧 Midori Matsueda (M1)

私は1956年の結婚と同時に清家研をめました。その後しばらくは自宅で設計の仕事をしてきましたが、お嫁さんの立場では、来客や家事でなかなか仕事に集中できませんでした。

その頃、他の2人にも仕事場を別にもたなければ、というそれぞれの事情があって、たまたまタイミングがあって3人で旗上げしたのです。

同人という形でやっても、仕事はたいして個人にきます。私たちは、もの創りの最終責任は個人、という考え方でやっています。仕事場という物理的なスペースとスタッフは共有しますが、曖昧な共同作業というのはしてこなかったので現在まで続けてこられたのだと思います。

共同でやっていると、設計とは性格の違う事務所運営上の雑務が3分の1に減るといって、ありがたいことですね。

40年間の設計活動を通しての建築観をお聞かせください。

設計の対象が何であろうと考え方は同じです。社会が建築に対して何を求めているかということに、建築家はプロとして応えていかなければならないと考えています。

まず、美術館なら何がどのように展示されるか、住宅なら住み手の生活といった、建築内部に展開される内容、つまり心も含めて人間にかかわる問題が人籍です。

また海沿いや傾斜地といった、建物が建てられる環境が絡んできます。環境がそこに建つ建築に求めているものを探りだし、応えなければなりません。環境のもつ空間性や時間性というものは地籍であると考えます。私はこの人籍・地籍が不明な建築をつくってはいけません、というよりむしろつくれないと考えています。どこの国のどんな場所に建つ建築

か、どういう人が何のためにどう使うかが、いっこうに伺い知れない建築は好きにはなれません。

今の建築業界について思うことはありますか。

日本では特に設計という活動は認められてないですね。これは私たちの責任でもありますが、建築家の社会に対する発言力が非常に弱く、一般のジャーナリズムが、「もの」ではない設計の意味をよく理解していないというのは問題ですね。新しい建築を紹介する場合でも、まず規模・工事費・材料・施工者については書くけれども、誰が設計したのかにはほとんど無関心です。

またアトリエ系の事務所では、絵だけ描いて技術面は施工者に頼るところも多いようですが、私はそれではいけないと思っています。

建築を「何を用いてどうつくるか」の施工については理解されやすいですが、設計はその大前提の「何をつくるか」に携わる重要な過程です。いってみれば、建築家は作曲家、施工者はオーケストラみたいなものなのです。現場監督は各パートの職方をひとつに統合して、曲を奏でる指揮者ですね。

建築家はクライアントの利益を守る立場にあるわけで、その意味で建築家と施工者とはまったく立場が違います。

ジャーナリスティックな活動をされている建築家ももっとプロフェッショナルとして社会的な意識をもってくれたらと思います。

授業を通してみた東工大の学生の印象をお聞かせください。

設計製図の授業を通してなので偏るかも知れませんが、東工大の学生は非常にお行儀がよいと感じました。きちんとしていて、勉強もできて、育ちもよい。苦学力行なんてものは

今はないんだなと思ったりもしました。作品は可もなく不可もない、そこそこというものが多いですね。発想のシャープさに欠けるところがあり、「やってやろう」という気構えが感じられません。発想がよいといってほめると、そのままやっちゃって展開がないのです。残念ながら勉強のできるよい子ほど、設計が苦手なようです。

学生にアドバイスをお願いします。

今の学生は用意されたいいくつかの答えの中から選ぶのは得意ようですが、自分で問題提起して考える習慣が少ないですから、設計はすごく苦手なんですね。先生が正しい答えを教えてくださいと思っているようで、それを聞きにくるということもありました。

設計は自分でバランスをつくりあげてゆくものですから、先生に聞いてわかるものではないのです。私はよい発想に重きをおきます。発想の転換ができなくて、間取りのパズルみたいになってしまっただけです。よい発想を展開させ、さらに煮詰めて建築にしていこうとすることが大切です。

それから、建築科に入ろうとする学生に、いきなり建築家の月収はどのくらいですかと聞かれたことがありました。定年とか収入とか、最初に自分の行く道を綿密に計画して、それからどの仕事につくか、と考える人が多いようです。

でも世の中、そんなに予定通りにはいきませんよ。誰だって将来の見通しはつかないものです。大事なのは自分が今やりたいことを、確実にやっていこうとすることです。私は女子大出身のアウトサイダーですけど、建築家にはアウトサイダーが意外と多いのですよ。アウトサイダーになることを恐れてはいけません。

# テクノロジカル・アプローチとチームによる設計

Technological Approach and Teamwork in Design

非常勤講師

高田典夫

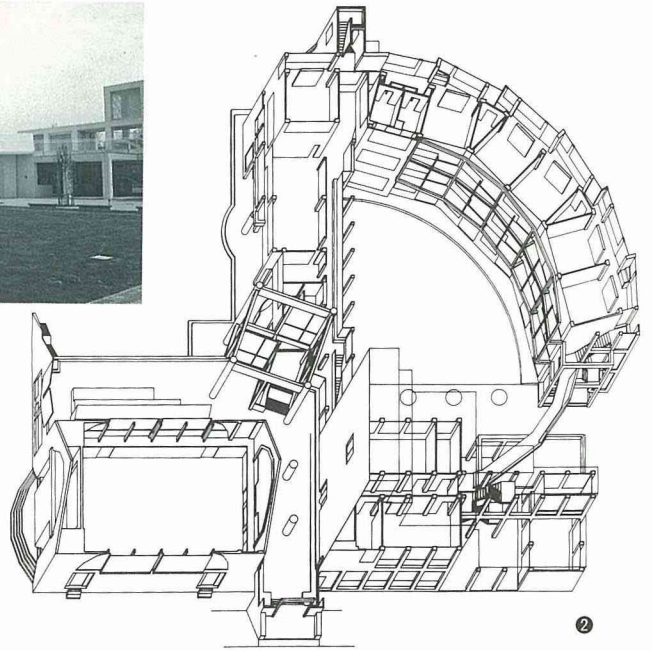
Norio Takata, Lecturer

基本計画、基本設計、実施設計そして現場監理という、建築をこの世に創り出すための一連の流れの中のいくつかの段階で、われわれは数限りないディジョン・メイキングをしなければならない。ある段階では、アーバンデザイナーとしての目をもって、全体の中の個々の計画の位置づけをし、またある場面ではディテールの決定をするために、1mmの違いや、色彩のわずかな違いを判断しなければならない。それでは、それぞれの場面における判断基準のもとになっているのは何であろうか。一言でいうのは非常にむずかしいし、私もまだはっきりとこれだといえるわけではないが、それは、それぞれの場面における「スケール感覚」と「バランス感覚」ということではないかと思う。

私が最初にこれらの一連の流れを経験したのは、横浜市立川和中学校の設計を担当した



①



②

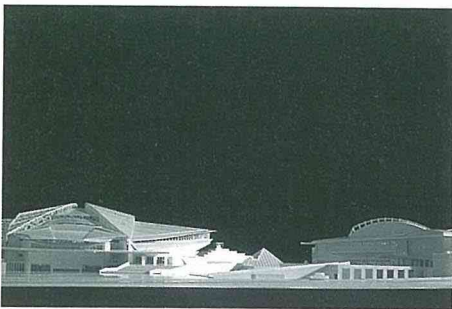
ときであった。楨総合計画事務所に入所して最初に担当したプロジェクトで、役所内の各部署との打ち合わせ、構造事務所、設備事務所との打ち合わせ、現場における建設会社の担当者との打ち合わせなど、すべての場面が始めての経験で、それぞれの場面で何らかの決定をしなければ、われわれが図面化した計画案を建築としてこの世に存在させることができないのだということを思い知らされた。

その後担当した、都営多摩ニュータウン南大沢団地、慶應義塾旧図書館改築、慶應義塾日吉図書館では、ビルディングタイプや規模などそれぞれ異なっていたが、同じような流れの中でそれぞれの計画を具現化することができた。

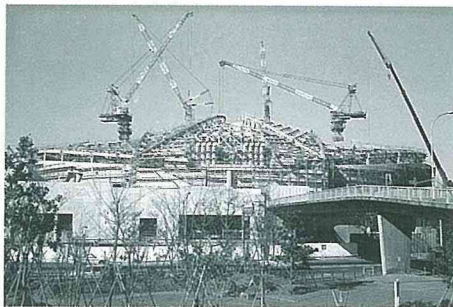
私の経験の中でひとつの大きなステップであったのは、やはり東京体育館の担当となったことであった。建物の観模が大きいという

ことや、機能が複雑であるということなどは、もちろんそれ相応の経験をさせてくれた要因のひとつではあったが、それだけではなかった。意匠、構造、設備それぞれの担当者がそれぞれ個々に考えているだけでは解けない問題が山積していたのである。それらをわかりやすくいえば、意匠担当者が構造・設備の立場で考え、構造担当者が意匠・設備の立場で考え、設備担当者が意匠・構造の立場で考えて解いていったのである。どんな計画においてもこのようなことは、多かれ少なかれ起こりうることはあるが、東京体育館においては、それらが顕著に現れていた。そして、このころから建築における技術の開発や、テクノロジカル・アプローチということに興味をもつようになってきた。

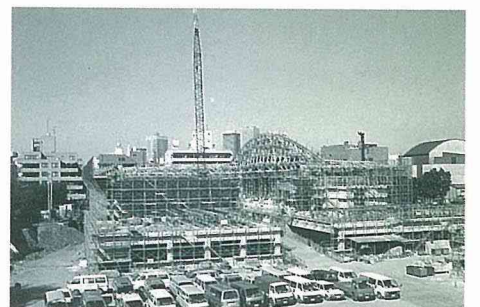
その後、ひょんなことから、レンゾ・ピアノのスタッフとして関西新空港の実施設計にか



⑤



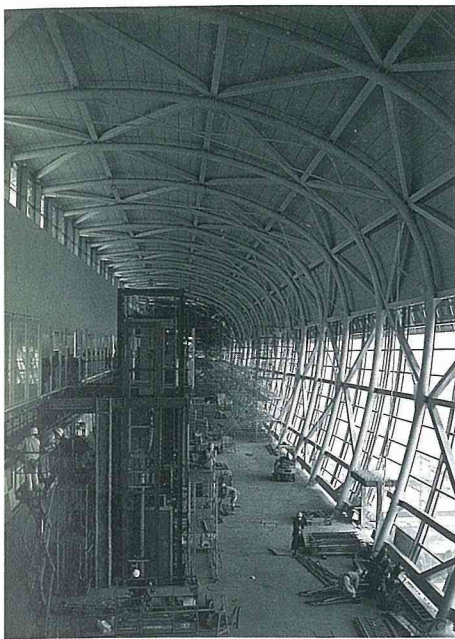
⑥



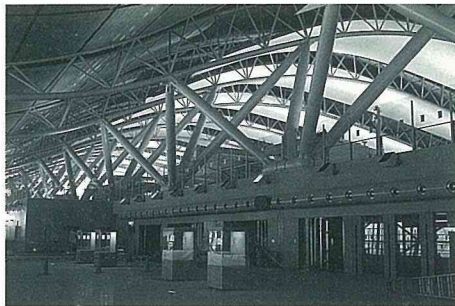
⑦

⑤⑥⑦ 東京体育館

⑧⑨⑩ 中野坂上本町二丁目地区市街地再開発事業



⑧



④

①② 横浜市立川和中学校

③④ 関西新空港

ら着工までを担当することになった。国際コンペ当選案としてのレンゾの計画は雑誌などで見ていたし、そのテクニカルなアプローチについては、もっとよく知りたいと思っていた。レンゾやレンゾのスタッフと一緒に仕事ができるということはもちろんであったが、それよりも私の関心は、ピーター・ライスやアラップのスタッフと一緒に仕事ができるということにあった。そしてそれは非常に刺激的な経験であった。

しかし、関西新空港プロジェクトにおいて私は、もう少し別のもので得ることができた。それは、「チームによる設計ということはどういうことか」ということであった。ご存知のように、関西新空港プロジェクトは、日建設計、パリ空港公団、日本空港コンサルタント、そしてレンゾ・ピアノ・ビルディング・ワークショップという4社のコンソーシアムによ

る設計体制をとっていた。デザイン・リーダーとしてのレンゾ・ピアノの下に、それぞれがそれぞれの責任範囲をきちんとおさめ、そしてそれぞれの間のデータのやりとりを確実にすることによって、この設計体制は成り立っていた。この設計体制のキープポイントは、それぞれの間のコーディネーション・ワークであり、設計範囲・スケジュール・進捗状況などの調整がその業務であった。主としてこの業務を担当することにより、各社の設計のやり方のようなものを間近に経験することができ、そして技術や経験の未熟さはエクスキューズにならないということを教えられたのであった。

われわれが事務所名にしている「ヘルム」という言葉は、もともとヨット用語で、「舵を操る」とか、それが転じて「指導する」という意味をもっている。これからわれわれが経

高田 典夫  
Norio Takata



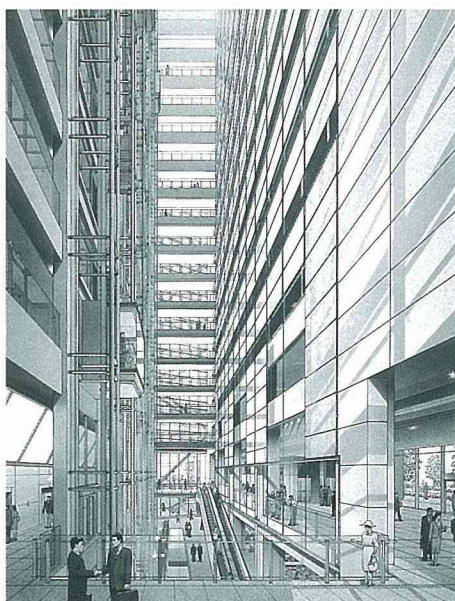
1951年 東京都生まれ。  
1974年 東京工業大学建築学科卒業  
1976年 東京工業大学建築学科大学院修士修了  
同大工学部助手（長津田計画室）  
78～90 横総合計画事務所  
90～91 レンゾ・ピアノ・ビルディング・ワーク  
ショップ・ジャパン  
91～ ヘルム建築・都市・コンサルタント取締役  
主な作品：中野坂上2丁目地区第1種市街地再開発（'96年竣工予定）、関西国際空港旅客ターミナルビル、東京体育館、慶応義塾日吉図書館、都営多摩ニュータウン南大沢団地

験していくプロジェクトにおいては、ひとつの事務所だけでなく、いくつかの専門家集団の集合体としての対応が求められる場面が増えてくると思われる。そして、それらの場面で適切な判断を下せるような事務所になりたいと思いを選んだ事務所名である。

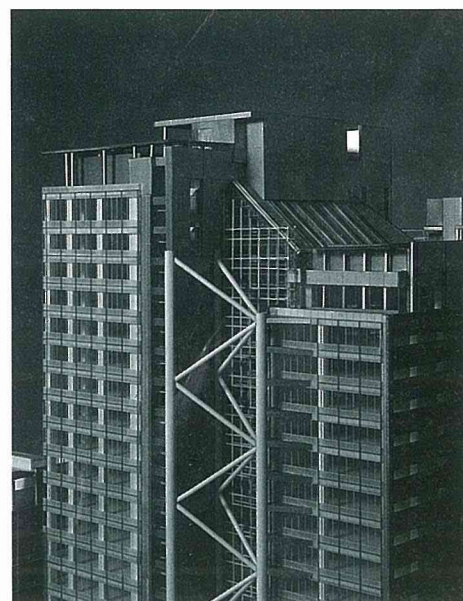
現在われわれが携わっているプロジェクトは、中野坂上本町二丁目地区第一種市街地再開発事業という住宅・都市整備公団が事業主体である超高層のオフィスビルを中心とした再開発である。1996年の春オープンをめざして、この秋にも鉄骨が地上に姿を見せ始める。ここでは、高さ130mにおよぶアトリウム、高速オープンエレベーター、ステンレスによる外装システムなど、いくつかの新しい試みを盛り込んで、テクニカルなアプローチでチームによる設計を実践しているところである。



⑨



⑨



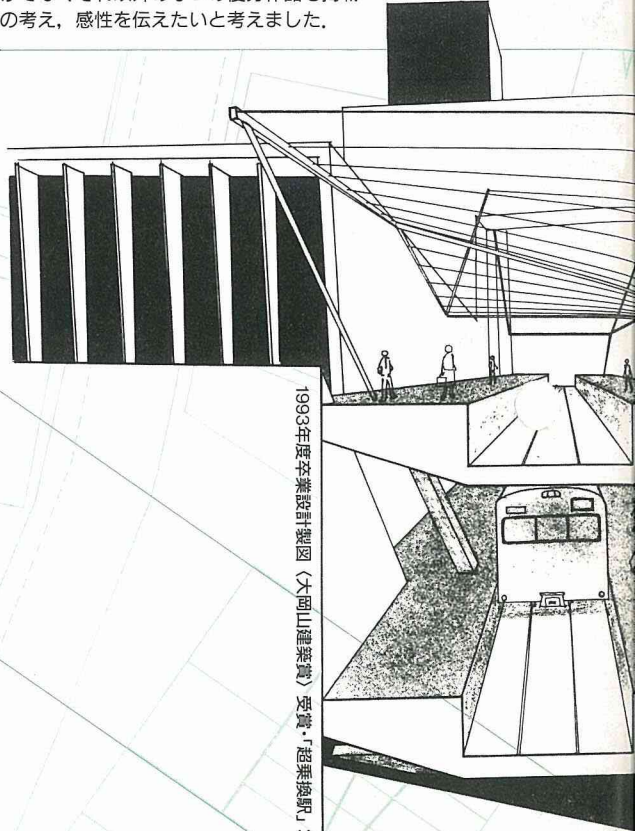
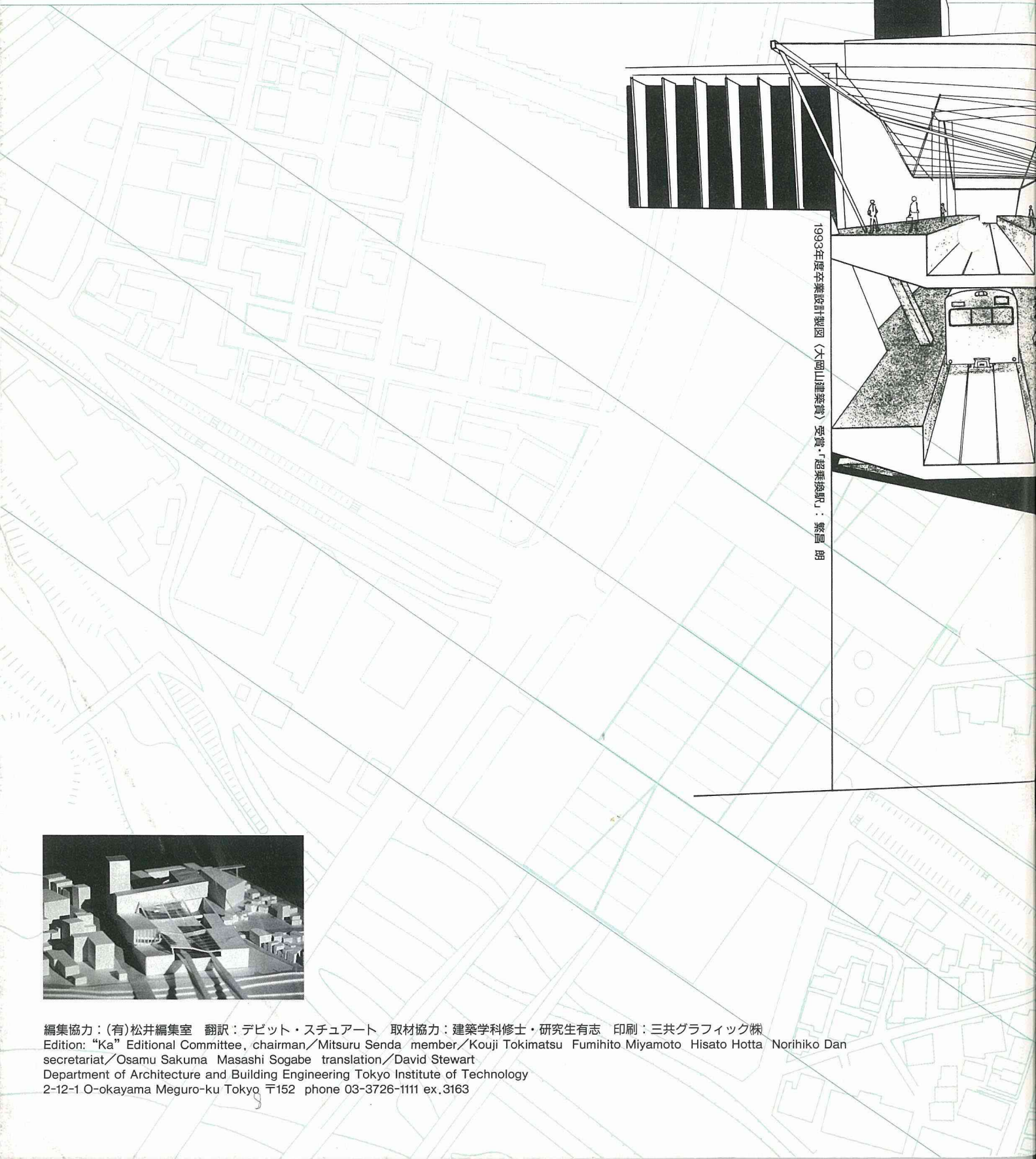
⑩



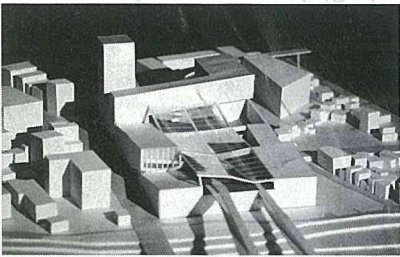
Ka No.8 1994  
 design journal of  
 the department of architecture  
 and building engineering  
 Tokyo Institute of Technology  
 published by TIT society  
 of architectural design education

編集：東京工業大学工学部建築学科 華編集委員会  
 委員長／仙田満 委員／時松孝次 宮本文人 堀田久人 團紀彦  
 事務局／佐久間治 曾賀部昌史  
 発行：TIT建築設計教育研究会 林昌二  
 定価：800円

編集後記：第8号は、多くの学生作品を掲載すること、非常勤講師の方の声を反映することに主眼をおいて編集しました。特に設計製図第四では、授業形式を新しくして、4人の非常勤講師の方からそれぞれ課題を出していただき、そのうち2課題を学生が選択する形式を採用したため、編集においてもその課題ごとに学生作品を掲載しました。また、卒業設計も大岡山建築賞作品だけでなくそれ以外の6つの優秀作品も掲載し、作品を通して多くの学生の考え、感性を伝えたいと考えました。



1993年度卒業設計製図(大岡山建築賞)受賞「超乗換駅」：繁昌 朗



編集協力：(有)松井編集室 翻訳：デビット・スチュアート 取材協力：建築学科修士・研究生有志 印刷：三共グラフィック株  
 Edition: "Ka" Editorial Committee, chairman/Mitsuru Senda member/Kouji Tokimatsu Fumihito Miyamoto Hisato Hotta Norihiko Dan  
 secretariat/Osamu Sakuma Masashi Sogabe translation/David Stewart  
 Department of Architecture and Building Engineering Tokyo Institute of Technology  
 2-12-1 O-okayama Meguro-ku Tokyo 〒152 phone 03-3726-1111 ex.3163